

中部山岳国立公園南部地域 利用の高付加価値化に向けた基本構想

令和 6 年 12 月

中部山岳国立公園管理事務所・中部山岳国立公園南部地域利用推進協議会

目 次

第1章 はじめに	1
1. 目的・背景	1
2. 対象とする地域	1
3. 基本構想の位置づけ	4
第2章 中部山岳国立公園南部地域の現況	5
1. 本地域の概要	5
2. 利用状況	6
3. これまでの取組	7
4. 中部山岳国立公園南部地域利用促進プログラム 2025 の個別施策	10
5. 利用の高付加価値化に向けた課題	13
第3章 利用の高付加価値化に向けたビジョン	18
1. 前提となる考え方	18
2. 基本理念	19
3. 利用拠点における面的魅力向上のイメージと宿泊施設の構成要素	21
4. 地域ならではの価値を伝えるテーマ・ストーリー	25
第4章 各地区の役割分担と磨き上げの方向性	27
1. 各地区の高付加価値化の方向性と役割分担	27
2. 各地区の磨き上げの方向性	31
3. 利用拠点選定の考え方と目指す方向性	93
第5章 推進体制・スケジュール	100
1. 推進体制	100
2. スケジュール	103

資料編

1. 基本構想策定の経緯	106
2. 検討体制	109
3. 民間事業者との対話（サウンディング調査）の実施	110

第1章 はじめに

1. 目的・背景

環境省では、平成28年より「明日の日本を支える観光ビジョン」（平成28年3月、明日の日本を支える観光ビジョン構想会議）に基づき、国立公園のブランド力を高め、上質なツーリズムを実現し、保護と利用の好循環により地域活性化を図ることを目指し、国立公園満喫プロジェクト（以下「満喫プロジェクト」という。）を推進してきた。

今般、インバウンドが急速に回復する中、観光立国推進基本計画も踏まえ、国立公園の美しい自然の中での感動体験を柱とした滞在型・高付加価値観光を推進することとし、「宿舎事業を中心とした国立公園利用拠点の面的魅力向上検討会」において、国立公園の利用の高付加価値化の方向性と、国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設を中心とした利用拠点の面的な魅力向上に取り組む先端モデル事業の進め方を検討し、その結果を「宿舎事業を中心とした国立公園利用拠点の面的魅力向上に向けた取組方針」（令和5年6月）（以下「取組方針」という。）として公表した。

本取組方針に基づき、令和5年8月に、有識者等を含む専門委員会（非公開）の意見も踏まえつつ、環境省として政策的な観点から、「国立公園における滞在体験の魅力向上のための先端モデル事業」（以下「モデル事業」という。）の対象として、中部山岳国立公園南部地域（以下「本地域」という。）をはじめ、全国の国立公園の中から4つの地域が選定された。

本地域では、本モデル事業の選定を受けて、令和5年度より地方公共団体や地域関係者との意見交換や、民間事業者との対話（サウンディング）等を重ね、利用の高付加価値化に向けた基本構想の検討を進めてきたところである。

本基本構想は、これまでの検討を踏まえ、今後、利用拠点において、地域協働実施体制の構築、利用拠点マスタープランの策定、自然体験アクティビティと連携した国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設の誘致、保護と利用の好循環の仕組みづくり等を行い、利用拠点の魅力向上に取り組むための方針を示すものである。

2. 対象とする地域

（1）本基本構想の対象範囲

本地域は、長野県松本市と岐阜県高山市にまたがる、槍・穂高連峰を中核とする山岳、乗鞍岳及びその山麓に広がる高原を含むエリアであり、本基本構想においては、本地域全域を対象とする。

また、本地域においては、本モデル事業の選定に先駆けて、「松本高山 Big Bridge 構想実現プロジェクト」のもと、国立公園を中心に、松本市街地と高山市街地をつなぐ行政区分にとられない横断的な地域を Kita Alps Traverse Route と命名し、一つの観光圏として捉え、多彩で上質な体験と滞在ができる魅力的な観光地経営を地域全体の取組として行っていることから、松本市・高山市の市街地までを含む国立公園外に位置する一帯の地域との連携を図ることとする。



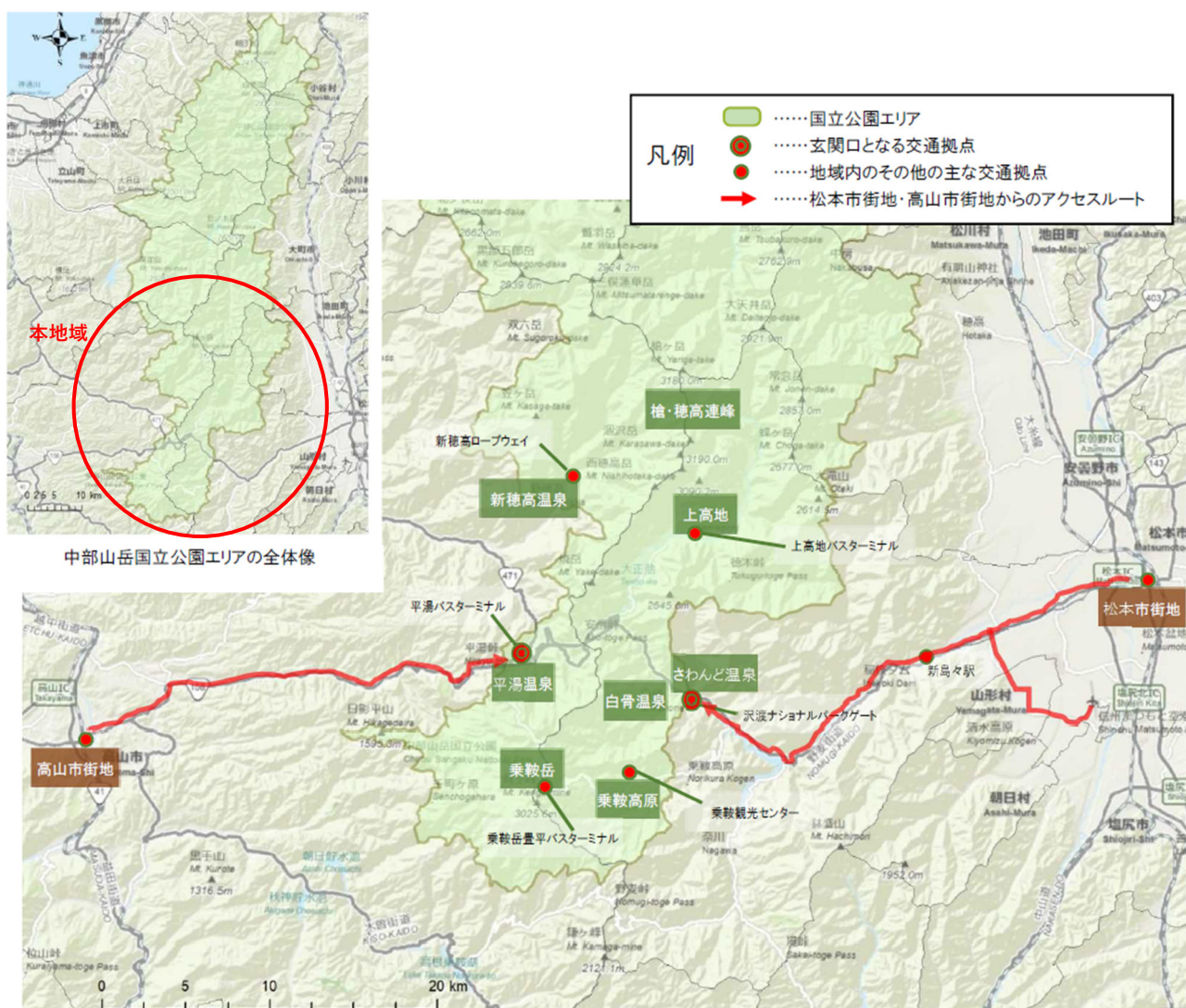
図 基本構想の対象範囲

(2) 本地域の位置と主なアクセスルート

本地域の東には松本市街地、西には高山市街地があり、それぞれ年間 400～500 万人規模の観光客が訪れる観光地である。松本市の「国宝松本城」や高山市の「古い町並」等、国際的にも著名な観光スポットを有している。

本地域はこの2つの観光地の中間に位置し、国道 158 号を通じてアクセスすることができる。松本市街地からはさわんど温泉地区が、高山市街地からは平湯温泉地区が本地域の玄関口にあたり、それぞれ上高地バスターミナル、新穂高ロープウェイ、乗鞍岳畳平バスターミナル等、地域内の主要な交通拠点とつながっている。

さらに、松本市内には、空の玄関口である信州まつもと空港が立地しており、同空港からのアクセスルートも視野に入れる必要がある。



[出典] 中部山岳国立公園南部地域利用推進協議会「中部山岳国立公園南部地域利用推進プログラム 2025（2023 改訂版）」（令和 6 年 3 月）

本基本構想は、「宿舎事業を中心とした国立公園利用拠点の面的魅力向上に向けた取組方針」を踏まえて、本地域における利用の高付加価値化の方向性を示すものである。

また、中部山岳国立公園南部地域を含む松本・高山エリアは「地方における高付加価値なインバウンド観光地づくりに向けたアクションプラン」（令和4年5月、観光庁）に基づき、集中的な支援を実施する「モデル観光地」に選定されており、本モデル事業も「モデル観光地」の事業の一部の位置付けであることから、「松本・高山高付加価値化マスタープラン（第1版）」（令和5年2月、松本・高山高付加価値な観光地づくり推進協議会）との整合・連携を図ることとする。



第2章 中部山岳国立公園南部地域の現況

1. 本地域の概要

中部山岳国立公園は、昭和9年12月に国立公園に指定された我が国を代表する山岳の国立公園である。特に長野県と岐阜県の二県にまたがる本地域は、槍・穂高連峰を中核とする急峻な山岳や、活火山である乗鞍岳や焼岳、さらにはその周囲に広がる温泉地や高原を含む地域である。

山岳地帯の麓で暮らす人々の生活やかつての山岳信仰が、文化として今に受け継がれているとともに、19世紀後半にイギリス人宣教師ウォルター・ウェストンが本地域一帯を「Japanese Alps」として世界に紹介し、西洋式の登山文化を我が国に持ち込んで以来、本地域には日本独自のアルピニズムが発祥し、今なお根付いている。このような背景から、本地域は中部山岳国立公園における核心部というだけでなく、日本を代表する山岳のディスティネーションでもあり、固有の価値と魅力を持った地域である。

また、本地域は広大な面積と大きな標高差を持つことから、変化に富んだ原生的自然と土地利用及び季節感を有している。標高や地形・地質、放牧・採草等による人為の関与度に応じて特徴的な植物相がみられ、高山植物群落をはじめ河畔林、半自然草地、湿生植物群落、二次草原等の多様な植生が形成されている。豊かな植物相に応じて、多様な動物の生息があり、ツキノワグマやニホンカモシカ等の大型哺乳類のほか、ライチョウやホシガラス等の鳥類、希少な高山蝶や草原性蝶類等が分布している。

さらに、本地域は関東圏・中京圏及び北陸からアクセスできる立地にあり、山岳道路やロープウェイ等を使って日本を代表する3,000m級の山岳景観を有する自然景勝地へ比較的容易に到達することができる。露天風呂数が日本一を誇る奥飛騨温泉郷をはじめとする温泉保養地や内陸性のパウダースノーを楽しめるスキー場等の利用施設も配置され、季節や利用者の志向に応じて、本格的な登山から自然散策、温泉保養まで、多種多様な自然体験の機会を提供している。

こうした豊かな自然環境を持続可能とするために、我が国で最も古い自動車利用適正化事業（マイカー規制）の実施や、登山道の維持管理や景観保全等、古くから国、地方公共団体、地域住民、民間企業、NPO等の多様な関係者が協働して保護管理を行ってきた歴史も備えている。

なお、「中部山岳国立公園南部地域利用推進プログラム2025（2023改訂版）」において、8つの地区（上高地、槍・穂高連峰、乗鞍高原、乗鞍岳、白骨温泉、新穂高温泉、平湯温泉、さわんど温泉）に区分され、取組等が整理されている。各地区の現況・課題等は「第4章 各地区の役割分担と磨き上げの方向性」を参照されたい。

2. 利用状況

本地域の総利用者数は、平成24年から令和元年にかけて概ね200万人前後で推移している。コロナ禍の影響により、特に上高地の利用者数の落ち込みが大きく、令和2年及び令和3年は100万人を割り込んだものの、令和4年には約140万人に回復している。

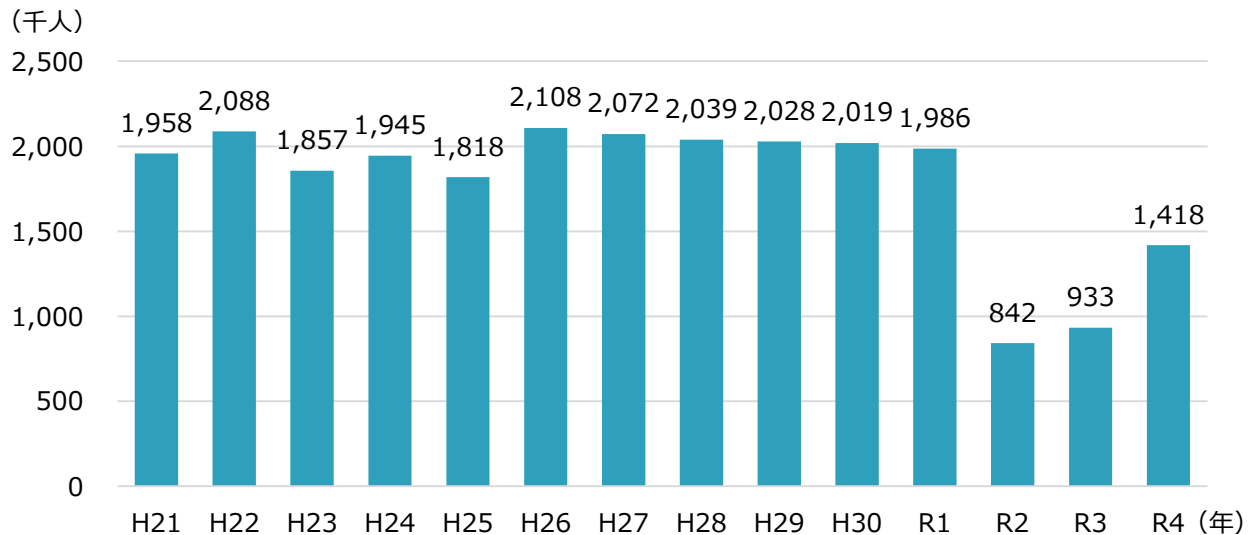


図 総利用者数の推移

[出典] 環境省自然環境局「自然公園等利用者数調（令和4年）」

（上高地、乗鞍高原、平湯、乗鞍鶴ヶ池の各集団施設地区等における利用者数を合計して算出）

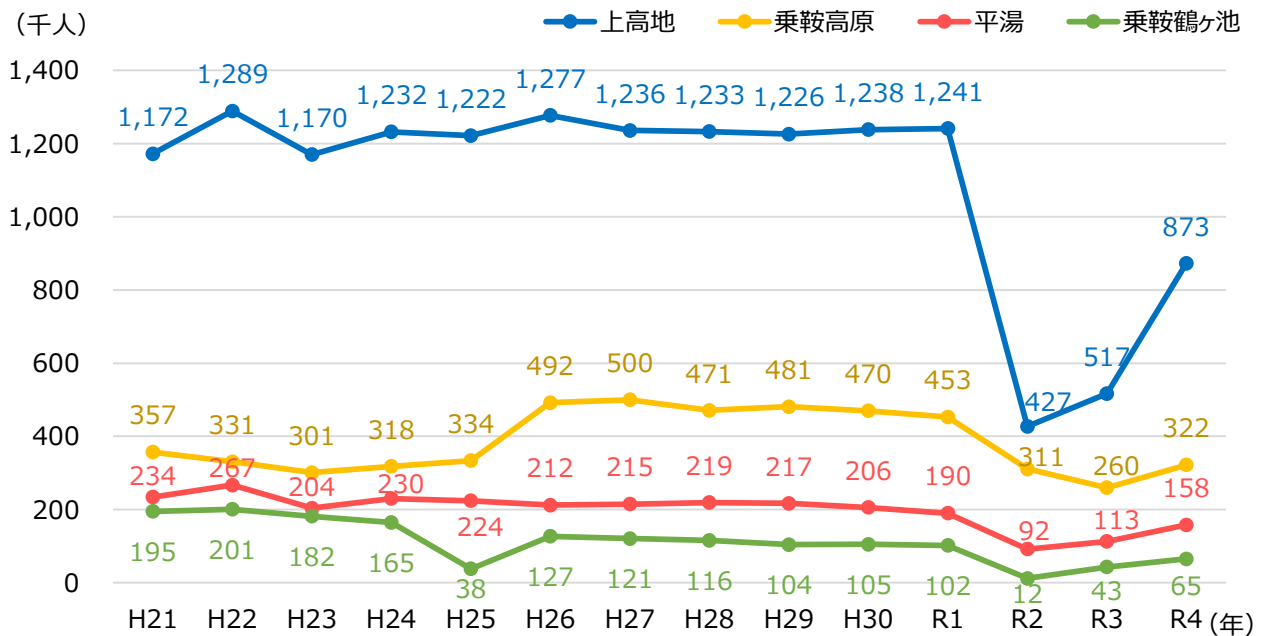


図 集団施設地区別の利用者数の推移

[出典] 環境省自然環境局「自然公園等利用者数調（令和4年）」

3. これまでの取組

(1) 中部山岳国立公園南部地域利用促進プログラム 2025

本地域では、「国立公園満喫プロジェクト」を先行的・集中的に実施する8公園に準じて推進する3公園として選定されたことを契機に、平成29年10月に行政機関や関係団体等で構成する中部山岳国立公園南部地域利用推進協議会（以下「利用推進協議会」という。）を設置し、平成30年4月に国立公園としての利用促進に向けた計画や取組をまとめた「中部山岳国立公園南部地域利用促進プログラム2020」を策定し、地域との協働のもと、利用促進に関する取組を実施してきた。

令和3年3月には「中部山岳国立公園南部地域利用促進プログラム2025」を策定、令和6年3月には中間見直しを行い、「松本高山 Big Bridge 構想」をメイン事業として、本地域独自の価値や魅力、持続可能性のさらなる磨き上げに取り組んでいるところである。

■松本高山 Big Bridge 構想

松本高山 Big Bridge 構想とは、本地域の国立公園地域の核心部である山岳と山麓地域を中心に、国内屈指の国際観光都市である高山市、国宝松本城及び旧開智学校を有する松本市をつなぐ行政区分にとらわれない横断的な地域を一つの観光圏として捉えた観光地経営を行うことで、多彩で上質な体験と滞在、個人の志向による多様な移動手段等を、世界有数のナショナルパークのように自然を主に置いた観光地と並ぶ水準に磨き上げることにより、「世界水準のディスティネーションの実現」を目指す構想である。

この構想のもと、各地区に関わる事業者、関係機関等と連携し、本地域のファンとなり得る利用者ととも協働することで、保護と利用の好循環を生み出し、持続可能な地域を確立していくことを目指している。



図 持続可能な総合循環型観光圏の取組イメージ

[出典] 中部山岳国立公園南部地域利用推進協議会「中部山岳国立公園南部地域利用推進プログラム2025（2023改訂版）」（令和6年3月）

【ビジョン】

私たちは、自らの人生を営むこの地域が、日本列島で最大級の標高差があり、かつ、日本アルピニズム発祥の地であることの誇りを持ち、3,000m級の急峻な山々とその恵み、四季を身近に感じる暮らし、自然への畏敬の念から発せられる文化を通じて、松本～高山間を横断する旅人がいつ、どこを訪れても、新しい発見・体験・驚き・探究心を得られるよう、エリア一体となって提供します。

これにより実現したいのは

環境への貢献	人生への貢献	社会への貢献
自然との良い付き合い方を、旅人と私たち住人がお互いに学び合うこと	旅人に滞在してよかった、また滞在したい、と思っていただくこと	旅人と私たち住人それぞれが持続可能になること

【ストーリー】

ようこそ、日本横断のAlpine × City Wonderlandへ -Discover, Explore, Experience in this Bridge Route-

信州・松本～飛騨・高山を横断する旅は、標高差約2,400mの世界に広がる、山・自然・人・文化から学ぶ物語。日本アルピニズム発祥の地である、北アルプスの山脈に広がる、いきものあふれる美しい自然。日本の東西の分水嶺でもあり、圧倒的な標高差にあって、人と自然の営みが交錯することで生まれた多様な歴史と文化。日本の国立公園ならではの四季彩は、日本最高峰の峰々にこそ広がっている。この地を訪れることは、日本人と自然の共生の歴史を知ることにつながり、また、あなたの人生を豊かに彩り、あなたらしく生きるヒントが詰まっている。

ビジョン・ストーリーを具現化する旅人の動き

松本～高山を横断すること	山岳と高原と街を満遍なく移動すること	1週間以上の滞在をすること	環境配慮が感じられること
--------------	--------------------	---------------	--------------

図 松本高山 Big Bridge 構想の先にあるこの地域での新たな旅の過ごし方

[出典] 松本高山 Big Bridge 構想実現プロジェクトウェブサイト (https://chubusangaku.jp/bigbridge_project/)

■松本～高山をつなぐエリア名称「Kita Alps Traverse Route」

松本高山 Big Bridge 構想により実現を目指す広域観光圏についてより多くの人に認知してもらえるよう、令和5年に決定した松本～高山をつなぐエリアの名称が「Kita Alps Traverse Route」である。

本地域の特徴のひとつとして、都市から比較的近い距離に急峻な山岳地域が位置していることが挙げられる。この地形により、利用者は、都市～郊外～山里～景勝地～山岳という人と自然との関わりグラデーション（段階）を楽しみ、体感することができる。また、このグラデーションこそが、本地域のライフスタイルや自然、景観、地域文化などの多様性の源泉といえる。

このような本地域の強みを「Kita Alps Traverse Route」として磨き上げ、魅力的なエリアとして確立することを目指し、地域全体で一体的な旅作りとプロモーションが開始されている。

Kita Alps Traverse Route に込められた想い

国内で確立している「Kita Alps（北アルプス）」という固有名詞を世界に広げること、及び「山岳を横断する」という意味の「Traverse（トラバース）」というワードから、「3,000m級の山岳と80km圏内にある2つの都市圏を訪問するという特別感と特異性を感じてほしい」という思いが込められている。

Kita Alps Traverse Route

Kita Alps Traverse Route

図 「Kita Alps Traverse Route」ロゴマーク

[出典] 信越自然環境事務所ウェブサイト「松本高山 Big Bridge 構想実現プロジェクト「Kita Alps Traverse Route」ロゴマークの決定について」(https://chubu.env.go.jp/shinetsu/pre_2023/press_00092.html)

(2)松本・高山 高付加価値化マスタープラン

本地域を中心とした松本・高山エリアでは、令和4年10月に、松本市・高山市、観光団体、金融機関、交通事業者、医療機関等の多様な主体が参画する「松本・高山 高付加価値な観光地づくり推進協議会」を設立し、特にインバウンドを中心とした地域全体の高付加価値化への取組を開始している。

同協議会は、松本高山 Big Bridge 構想の実現性を高めるため、観光庁による「地方における高付加価値なインバウンド観光地づくり事業」（以下「モデル観光地事業」という。）に申請し、令和5年3月には、松本・高山エリアが全国11地域のモデル観光地の1つに選定されている。

モデル観光地の選定を受けて、令和6年2月に「松本・高山 高付加価値化マスタープラン」が策定された。同マスタープランは、地域全体で目指す姿や地域固有の価値、観光産業の高付加価値化のための課題と解決方針について関係者が共通の理解を持ち、今後の具体的な観光地域づくりの事業を実施していく上での指針であり、松本・高山エリア全体で高付加価値化に取り組むことで、観光関連産業全体の「量と質のバランス」を底上げしていくことを重視している。

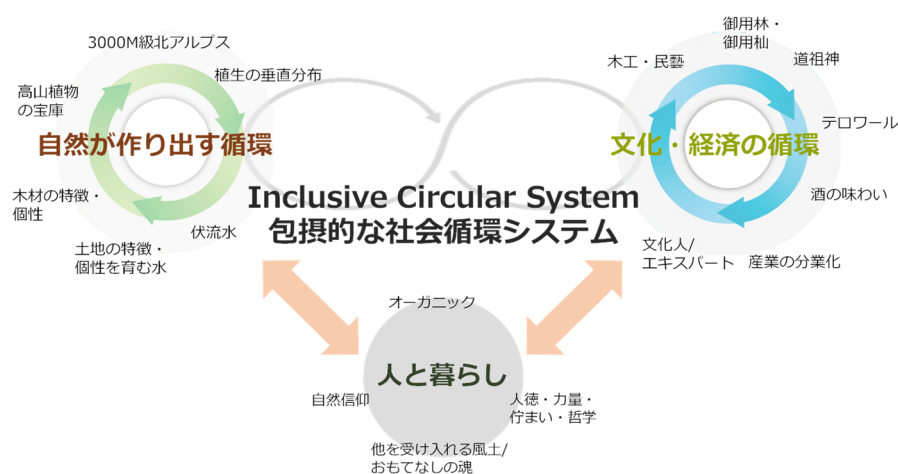
今後、同マスタープランを踏まえた具体的な事業を展開し、継続的なブラッシュアップを行いながら、ウリ・ヤド・ヒト・コネ・アシの個別領域の具体的な事業化と成長に向けた取組を進めることで、観光地の高付加価値化による持続可能な地域としての発展を目指している。

■松本・高山エリアのコアバリュー（地域の滞在価値を牽引する世界的価値）

マスタープランでは、松本・高山エリアのコアバリューを「ワンビジットで松本・高山を旅することで、北アルプスと都市、自然と伝統文化の調和の階層的な変化を体験すること」と定めている。

これは、松本市街地を起点とした場合、東側の山地が形成した扇状地である市街地から、徐々に里山、そして3,000m級の山岳へ移動するにつれ、標高差による植生の移ろいや、それに付随する人の営みの微細な変化を楽しむことができ、北アルプスを超え飛騨側ではまた信州側と異なる文化圏（食・言葉・生活様式など）を感じることができる。このように東西南北の分水嶺である北アルプス起源とする水と、その水に育まれた森林がもたらす伝統文化・暮らし方の違いや日本人と山との共生文化・精神性こそが本エリアのコアバリューである。

自然と文化の循環が調和する、包摂的な社会循環システムが息づく“松本・高山”。
都市と自然がコンパクトに集結するエリアだからこそ存在する、自然との共生哲学を学ぶ旅。



➡ **ワンビジットで松本高山を訪れることで、
北アルプスと都市、自然と伝統文化の調和の階層的な変化を体験**

図 松本・高山エリアのコアバリュー

[出典] 松本・高山 高付加価値な観光地づくり推進協議会「松本・高山 高付加価値化マスタープラン」（令和6年2月29日）

4. 中部山岳国立公園南部地域利用促進プログラム 2025 の個別施策

(1) 中部山岳国立公園南部地域横断自然歩道（信飛トレイル）

「Kita Alps Traverse Route」では、多様な手段での移動を想定しており、その一つとして、令和5年7月に、長野県松本市市街地及び岐阜県高山市市街地を起点に山岳エリアである本地域を歩いて横断するトレイルルートとして、「中部山岳国立公園南部地域横断自然歩道」（以下「信飛トレイル」という。）が設定されている。

信飛トレイルは、日本の自然や文化の魅力が凝縮している松本・高山の市街地を起点とし、山岳エリアである中部山岳国立公園を歩いて旅することで、車の旅では見えない・体感できない風景（自然・人文風景）、歴史、文化（風俗・食）などの奥深さを見て、体験する機会を提供することを目指している。

本トレイルが目指すもの

- ・松本、高山が跨る国立公園の横断ルートを世界のディスティネーションとして確立
- ・歩くことによる健全な心身の育成と充実感の再発見
- ・自然、歴史、文化等の地域資源の体感、地元人との対話を通じた地域の体感
- ・持続可能な地域づくり、また教育の場等への貢献

[出典] 環境省中部山岳国立公園管理事務所「中部山岳国立公園南部地域横断自然歩道基本計画」（令和5年7月）

全線の一括踏破を目指す徒歩旅愛好家から、一部区間を日帰りから1泊2日程度で散策を行う親子連れや中高年層まで、幅広い利用者層を想定しており、本線と支線により構成されている。

現在、令和7年のオープンに向けて、「一般社団法人信飛トレイル準備委員会」（令和5年4月設立）を中心に準備が進められており、運用開始以降も、信飛トレイルの運営は、同委員会が主体となっており、地域の関係者及び行政関係者との定例の協議の場を設けることとなっている。



ロングトレイルは自然環境保全と地域経済向上の両立が期待でき、そのエリアの自然・歴史・文化とのふれあいの推進をし、地域活性化や交流人口・関係人口の創出も期待できる。更にはハイカーだけではなくその地域の人々が地域の実情・現状を更に深く考えるきっかけにも信飛トレイルはなる可能性を秘めている。

図 信飛トレイルの概要

[出典] 一般社団法人信飛トレイル準備委員会資料をもとに作成

(2) 乗鞍ライチョウルート

本地域の乗鞍岳へは、長野県側の「乗鞍エコーライン」と岐阜県側の「乗鞍スカイライン」の2つのマイカー規制道路が通じており、「バスで走れる標高が日本一」の道路として手軽に標高 2,500m 超の高山帯の山岳景観や自然を楽しむことができる。

この2つの道路は乗鞍岳の山頂付近（畳平）で繋がっており、両県側へと双方向に通り抜けることで異なった乗鞍岳の景観や麓地域の魅力を楽しむことができるにも関わらず、県境を越えた利用推進事業を十分に実施できておらず、利用者への周知不足や回遊できる利用モデルが提案できていないなどの課題を抱えていた。

そのような状況を踏まえ、令和3年8月1日に乗鞍岳鶴ヶ池駐車場で開催された松本市・高山市姉妹都市提携 50 周年記念式典において、両道路の一体的な利用を推進するためのきっかけとして、乗鞍岳一気通貫の観光ルート愛称である「乗鞍ライチョウルート」が発表された。

ルート愛称をはじめとした、ロゴマーク及びポスターデザイン策定といった乗鞍岳の統一的なプロモーションの検討については、乗鞍岳及びその山麓エリアの関係機関及び地域関係者を中心に構成されるプロジェクトチームである「乗鞍岳 Beyond Border Project Team（以下「乗鞍岳 BBPT」という。）」が主体となって取り組んでいる。

今後、「乗鞍ライチョウルートの日イベント」等によって、乗鞍岳の高山自然環境の素晴らしさを守るために何ができるのか、知る、考える、伝える機会を創出するなど、両県を跨いだ一気通貫の利用コンテンツの創出や楽しみ方の情報発信といった乗鞍岳を中心とした一体的な取組が期待される。



図 乗鞍ライチョウルートの取組

[出典] 環境省資料

(3)乗鞍岳エコツーリズム推進全体構想

岐阜県中部山岳国立公園活性化推進協議会は、「岐阜県中部山岳国立公園活性化基本構想」（平成 29 年 7 月、岐阜県）及び「岐阜県中部山岳国立公園活性化基本計画」（平成 30 年 1 月、岐阜県）に基づく取組を地域一体となって推進するため、平成 31 年 3 月に設立した組織体であり、岐阜県・高山市・地元関係団体で構成される。

同協議会では、乗鞍岳及び乗鞍山麓地域のあり方についての意見交換や情報共有を図るとともに、現状の課題の集約や整理、乗鞍岳や乗鞍に関連する魅力の洗い出しなどの検討を行い、「乗鞍岳エコツーリズム推進全体構想」を策定した。

同構想は、乗鞍岳の自然環境保全と適切な利用による持続可能な活性化を図るため、自然環境保全の取組のもと、観光・体験・保養・学習・研究等を総合的に楽しむことができる山岳体験エリアとしての魅力向上、高山市街地を含む周辺地域一体となった活性化に繋げることを目的としており、基本方針は以下の通りである。

- ① 乗鞍岳における自然環境や多様な魅力を発信し、活性化に繋げる
- ② 乗鞍岳及び周辺地域の地域資源、歴史文化等を活かしたエコツーリズムを推進する
- ③ 地域住民の乗鞍岳への理解を深め、次世代に守り育てる

乗鞍岳エコツーリズム推進全体構想は、令和 6 年 9 月 13 日に国からエコツーリズム推進法に基づく認定を受けた。今後、自然資源の保護と適正利用を両立するエコツーリズムがより充実することが期待される。



図 乗鞍岳エコツーリズム推進全体構想の概要

[出典] 高山市提供資料をもとに作成

5. 利用の高付加価値化に向けた課題

本地域における利用の高付加価値化に向けた課題は以下の通りである。

(1) 旅の価値観の変容と、外国人における日本イメージの解像度向上への対応

これまでの旅行は、特に高度経済成長期の右肩上がりの経済発展とともに、日本人の生活水準が向上し、レジャー志向が高まる中、「ハレ消費」の象徴として行くこと自体が「目的」という存在であった。2000年代初頭のインターネットの黎明期までは、旅行情報の提供元は基本的に観光地や旅行・観光事業者、マスメディア媒体に限られ、特に大手旅行会社に依存した旅行者の行動は画一的であった。しかしながら、社会や経済の成熟化やインターネットの汎用性が高まり、個人の価値観やライフスタイルの多様化とともに旅行スタイルも多様化し、旅行は趣味や自己実現を体現する「手段」へと変化してきている。

従来の旅行においては、行動の多くが「観光地の観光エリア」での物見遊山で画一的であったが、現在ではSNS等で地元生活者の面白い発信情報の取得が可能になり、旅行者の行動は旅先での本物体験を求める「旅先での生活エリア」へと広がっている。そこに根付く生活文化、産業や携わる人に魅力を感じたり、共感したりと、従来とは違う特別な地域への思いも広がるようになり、地域と旅行者との関係は双方向型となり、旅行者自身の発信が地域のブランディングに関わるようになってきている。

また、平成15年に開始したビジット・ジャパン・キャンペーン（Visit JAPAN Campaign）以降、査証発給の規制緩和、国・地域ごとのマーケティング、誘客先の分散、広域誘致策づくりなどが奏効し、「第24回観光立国推進閣僚会議」（令和6年7月19日）によると、令和6年の訪日外国人旅行者数が3,500万人、旅行消費額が8兆円と過去最高になる見通しが示された。さらに、政府目標である2030年の訪日客数6,000万人、旅行消費額15兆円の達成も視野に入る状況となっている。

特にインバウンド需要が拡大する中、世界の富裕層の中で文化への関心の高い「モダンラグジュアリー層」が増えており、今後、より広い層に同様の志向を持つ人々が増加すると予想される。

日本政府観光局（JNTO）によると、富裕旅行者の中でも文化や本物の経験を求めるマインドセットを持つ層が新型の「モダンラグジュアリー層」と定義されている。

「海外都市から見た日本のブランドイメージ調査」（経済産業省）によると、外国人は日本ブランドとして、「バラエティ豊かな遊び心のある体験」「心が落ち着く体験」「健康な暮らし」「丁寧な生き方」の4つの提供価値を感じているとされ、具体的な日本のイメージを表すキーワードとして、

「Duality of Old & New：歴史とモダンの両立」「Cute & Eccentric：可愛くて奇抜」「Quality & Affordability：質が高いものがお得」「Healthy & Green：健康的でグリーン」「Condensed Diverse Creativity：多様な創造性がギュッと詰まっている」「Craftsmanship：職人魂」「Spirituality in Nature：自然と共生する精神性」の7つを挙げているとしている。この7つは近年のインバウンドの増加やSNSや動画等での情報発信、日本食レストランや日用品ブランドの海外展開等によって接点が増え、外国人目線での日本のイメージは以前よりも解像度が上がっているものと考えられる。

現在、松本・高山エリアでは、上記のようなインバウンドをターゲット層として想定し、4つのブランド、7つのキーワードに対応した要素を盛り込んだ旅行を提供できる地域づくりを目指し、モデル観光地事業を中心に、招聘ツアーや既存コンテンツの磨き上げ、プロトタイプツアーの造成・販売・検証、高付加価値層を顧客に持つ旅行会社との連携・関係構築等に取り組んでおり、本事業においてもこれらの取組と連携し、今後増加が見込まれるインバウンドの受け入れ態勢を整えるとともに、本地域ならではの魅力的な滞在体験を提供できるよう、各地区の磨き上げに取り組む必要がある。



図 日本のイメージを表す7つのキーワード

【出典】経済産業省「海外都市から見た日本のブランドイメージ調査」（令和5年3月28日）

（2）アドベンチャートラベルへの注目とその地域ならではの滞在体験の提供

近年、注目をされている領域として「アドベンチャートラベル」（以下「AT」という。）の存在がある。

国際的なアドベンチャートラベルの業界団体である Adventure Travel Trade Association（ATTA）の定義によると、ATとは、旅行者にとってユニークかつ目新しい場所への旅であり、「アクティビティ」を通じてその地域の自然と文化に触れ、精神的・身体的に充足感を得ることができる体験とされている。

ATで必須とされる構成要素は「アクティビティ」「自然」「異文化体験」であり、それらの構成要素との接点を通じて、旅行者に「ユニークな体験」「自己変革」「挑戦」「健全さ」「ローインパクト」を価値提供するものである。

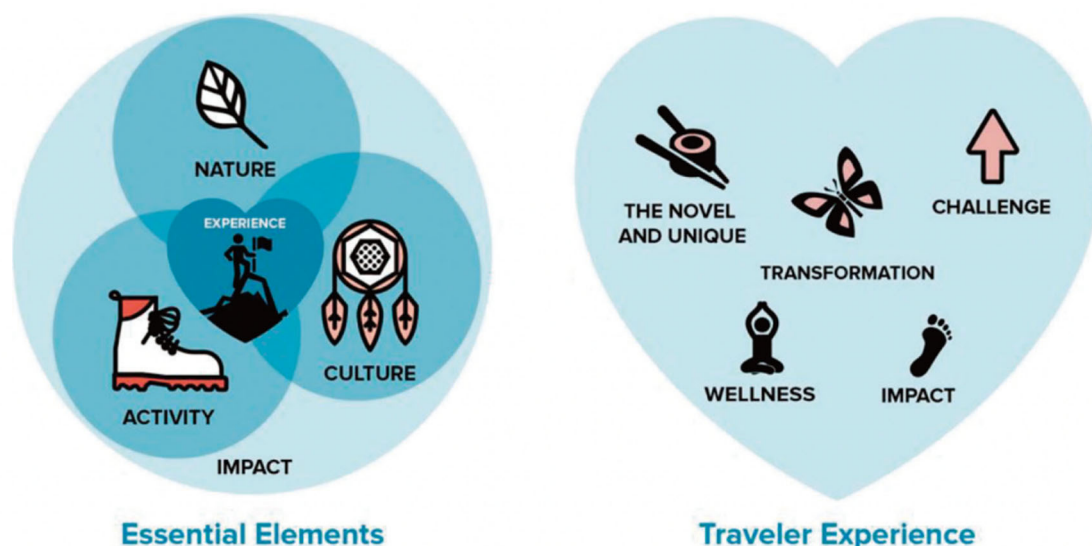


図 ATTA が提唱する AT の3つの構成要素と5つの体験価値

【出典】ATTA「Media Fact Sheet」（<https://cdn.adventuretravel.biz/wp-content/uploads/2018/09/Media-Fact-Sheet.pdf>）

ATの大きな特徴は、これまでのマス・ツーリズムの対局に位置し、地域の観光資源の保全と持続可能な経済的発展を目的としていることである。また、AT旅行者は、旅行を通じて自分自身の変化や視野の拡大、学び等を得ることを目的としており、個々のコンテンツの質の高さは当然として、旅行者それぞれの興味・関心に応じたテーマやストーリー性のある滞在プラン等、その地域ならではの体験を求めていることが特徴である。

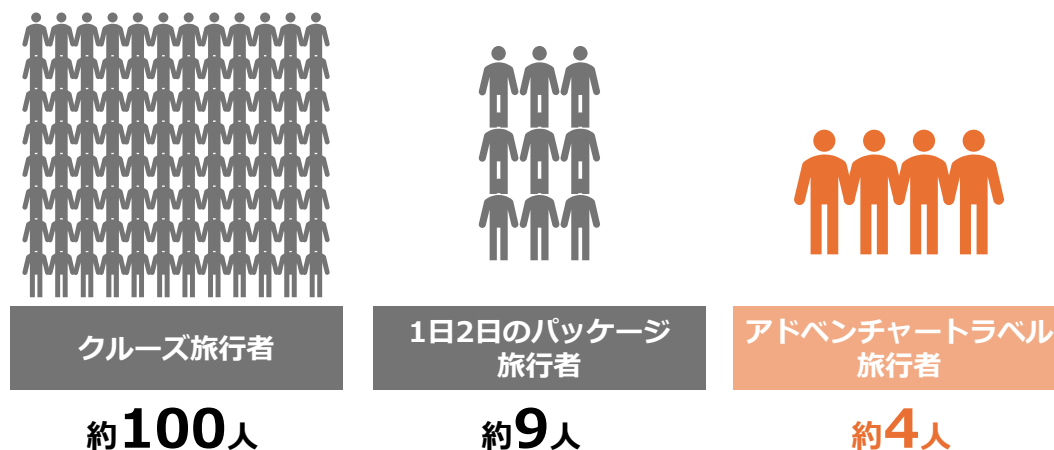
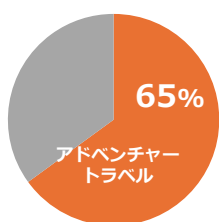
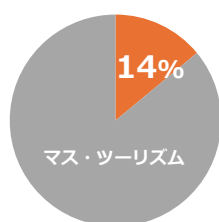


図 \$10,000 相当の経済効果を地域にもたらすために必要な旅行者の数

[出典] ATTA「Media Fact Sheet」(<https://cdn.adventuretravel.biz/wp-content/uploads/2018/09/Media-Fact-Sheet.pdf>) をもとに作成



2023年の最新データでは…

平均旅行日数： **8日間**
 旅行単価： **2,813ドル** (航空券を除く)
 1日あたりの単価： **351ドル**
 地域に落ちるお金の割合： **75%**
 地元産のお土産購入： **192ドル**

＜AT市場平均＞
ヨーロッパ市場
北米市場

US \$274 (Luxury Adventure tripの場合は**\$632**)
US \$175
US \$319 (Luxury Adventure tripの場合は**\$640**)

＜地元のお土産での消費額＞ **US \$140** (Luxury Adventure tripの場合は**\$184**) / 1旅行につき

図 旅行者の支出のうち、地域に残るお金の割合

[出典] ATTA「ATTA 2024 Adventure Tour Operator Snapshot Survey」等をもとに作成

本地域を中心とする松本・高山エリアでは、高付加価値なインバウンド観光地づくりの一環として、地域の本質的な滞在価値（コアバリュー）を「北アルプスと都市、自然と文化の調和の階層的な変化を体験すること」と定めており、本地域の「自然」や「自然と人との関わり」はその重要な要素である。

そのため、上記の利用ニーズの変化や多様化を念頭に、階層的な変化の観点から、各地区が有する唯一無二の価値・特徴や、これまで各地区が培ってきた自然と人との関わりや歴史等を深掘りし、本質的な価値の提供を重視して、各地区の磨き上げの方向性を定め、その適切な利用を推進することが求められる。また、AT旅行者に提供するガイドツアーの造成、アクティビティ事業者やガイド人材の育成、地域に根差したランドオペレーターの組成が必要とされる。

(3)サステナビリティ及びレスポンスビリティへの対応

近年、国内外の利用者から「サステナブルツーリズム（持続可能な観光）」が注目されており、目的地の設定に当たってはサステナビリティ（持続可能性）も重要な要素のひとつとなっている。さらに、旅行者が地域社会や環境に与える影響に配慮し責任を持つというレスポンスブルツーリズム（責任ある観光）や、地域の環境・社会・経済をより良くするというリジェネラティブツーリズム（再生型観光）という観光の考え方も生まれている。

世界ツーリズム協会（WTTC）が発表したネイチャーポジティブツーリズムに関するレポートにおいては、旅行が「生物多様性の損失を助長する可能性があるが、生物多様性の保全を促進することも可能」とし、特定の活動の回避や旅行者への普及啓発といった生物多様性損失の軽減策だけでなく、直接的な保全活動の実施や保全への寄付といった生物多様性の再生に寄与する要素を旅行に盛り込むなどの取組等を推奨しており、ツーリズムがネイチャーポジティブ（自然再興）にとって重要な役割を果たすことができることを示している。

本地域では、例えば乗鞍高原において全国に先駆けたゼロカーボンパークの取組として、修景伐採木の循環利用、再生可能エネルギーの導入推進、施設の脱炭素化等の取組を推進しており、上高地帝國ホテルではアメニティの脱プラスチック、カーボンオフセットによるCO₂排出量実質ゼロ、天然水である湧き水の活用、生ごみリサイクル推進等の取組を行い、令和5年12月に環境省が主催するグッドライフアワードにて実行委員会特別賞「地域と人の思いやり賞」を受賞している。自然環境の保全を基本とする国立公園だからこそ、このようなサステナビリティや自然環境・地域の経済社会へのレスポンスビリティの観点を、利用者や観光事業者等に強く求めていくことが重要であり、かつ、このような自然環境保全を基本とする姿勢がメッセージ性を持った国立公園の新たな魅力となり得る。そのため、地域の関係者とともに、脱炭素化、脱プラスチック、廃棄物対策、水資源利用、地産地消等の取組を通じて、持続可能な地域づくりへの貢献をより一層推進することが求められる。

また、本地域共通の課題として、少子高齢化・人口減少による深刻な人手不足（求める人材を雇用できないこと、必要な人員を確保できないこと）が挙げられる。地域そのものの規模が縮小することによって移動や買い物等の地域住民の生活の維持に課題が生じていることに加え、地域の働き手の安定した住まいの確保も課題となっている。また、地域内は従業員の通年雇用が難しい地区が多いことから、従業員の入れ替わりによって継続的な人材育成が難しく、サービス水準の向上につながりにくい状況も見られる。このような状況が今後も続くことで、自然環境の保全や観光サービスの質の向上が困難となり、地域としての持続可能性が失われることが懸念される。

そのため、利用者と地域住民の双方を満たす持続可能な観光に取り組むことにより、交流人口・関係人口の創出・拡大による地域活性化、地域住民の地域への愛着・誇りの醸成、災害に備えた危機管理等、地域コミュニティの維持・再生や課題解決に貢献することが求められる。

(4) 国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設の必要性

海外の国立公園等においては、世界中からそこに滞在することを目的として利用者が訪れるような宿泊施設があり、素晴らしい景観の中に位置するだけでなく、環境保全や持続可能性、地域の生活・文化・歴史や、伝統、地域コミュニティ等に配慮しつつ、その土地のストーリーを伝えるようなアクティビティの提供を行い、国立公園ならではの唯一無二の体験を提供している。

宿泊体験を核とした利用の高付加価値化に向けて、取組方針においては、次の2点を満たすような「国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設」が必要とされている。

国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設

- ①**魅力的な自然を基盤として、その土地の生活・文化・歴史なども踏まえた、感動と学びの体験を提供する宿泊施設**（自然に囲まれた魅力的な立地、その土地ならではの文化や歴史を感じさせる意匠、リラックスできる落ち着いた空間、地域の自然や生活・文化・歴史に関する情報提供、自然体験アクティビティの提供等）
- ②**持続可能な観光の観点から、自然環境や地域社会に配慮し責任をもった事業を行い、国立公園の保護と利用の好循環に貢献する姿勢をもつ宿泊施設**

また、宿泊施設を中心として、ハード（利用施設等）とソフト（アクティビティやサービス等）とが一体となった利用拠点の面的な魅力向上を実施し、地域における保護と利用の好循環の実現を目指すことが望まれる。

本地域においても、上記のような宿泊施設での滞在と、そこを拠点とした情報提供や自然体験アクティビティの提供により、国立公園ならではの感動体験を提供し、満足度を高め、滞在日数を延ばすことが求められる。また、松本・高山エリアを結ぶ Kita Alps Traverse Route における滞在体験の魅力向上にも資することが期待される。

第3章 利用の高付加価値化に向けたビジョン

1. 前提となる考え方

取組方針において、国立公園の利用の高付加価値化は以下のように定義されている。

国立公園の利用の高付加価値化とは

国立公園における利用の高付加価値化とは、単に富裕層を対象として高額で豪華な宿泊施設やサービスを提供することを意味するものではない。次の①及び②を付加価値として高めることを意味するものと定義する。

①国立公園だからこそ守られてきた魅力的な自然環境を基盤として、その土地の生活・文化・歴史を踏まえた国立公園ならではの本物の価値に基づく感動や学びの体験を提供することで、利用者に自己の内面の変化（トランスフォーメーション※）を起こすことを目指す。

②サステナビリティ及びレスポンシビリティの観点で、保護と利用の好循環の実現を目指す。

※トランスフォーメーション：利用者の考え方や人生観にまで影響を及ぼすような意識変容・行動変容を指す。

[出典] 環境省自然公園局国立公園課「宿舎事業を中心とした国立公園利用拠点の面的魅力向上に向けた取組方針」（令和5年6月）より抜粋

上記の定義を踏まえた本地域における利用の高付加価値化が目指すところを以下に示す。

中部山岳国立公園南部地域における利用の高付加価値化が目指すもの

本地域は、世界から「日本アルプス」として知られるように日本を代表する山岳地帯であり、令和6年12月に国立公園指定90周年を迎える歴史ある国立公園である。

日本アルピニズム発祥の地であり、古くから登山者や点在する山小屋が山岳文化を育むとともに、山麓では人と自然との共生の歴史も有している。山岳地だけでなく里山や高原、温泉といった多様な資源を有しており、これらは地域とともに守り受け継がれてきたものである。

一方、地域は少子高齢化や社会情勢の変化に起因して様々な課題を抱えており、多様な自然を守り受け継いできた地域そのものの持続性が危ぶまれる状況にある。それゆえに持続可能な観光の実現を通じて、地域課題の解決への貢献が期待されている。

このような状況を踏まえ、本地域における利用の高付加価値化とは、上記のような**本地域が有する本質的な価値・魅力に共感して訪れた利用者をターゲットとして、魅力的な自然環境を基盤とした自己の内面の変革を起こすような感動体験を提供すること、それにより相応の対価を得て本地域に分配されること**を指す。

そのため、本モデル事業に基づき、宿泊施設を中心とした滞在体験の魅力向上を図る際には、宿泊施設単体の事業性・収益性を高めるだけでなく、その効果が地域全体に裨益する経済循環を構築し、地域社会の持続性を高めていく観点を重視することとする。

2. 基本理念

本地域における利用の高付加価値化の基本理念を以下に示す。

Kita Alps Traverse Route ならではの本物の価値に基づく感動や学びの体験を提供する

本地域の特徴は、我が国を代表する類まれな山岳景観や山岳と人との関わり・歴史である。

国立公園だからこそ守られてきた魅力的かつ貴重な自然環境や、自然と深く関わる土地の生活・文化こそが本地域の価値であり、利用者が訪れる際に、それらの Kita Alps Traverse Route ならではの本物の価値に触れ、感動と学びを得て自己の内面的変化をもたらすような利用体験を提供する。

松本・高山エリアのコアバリューは「ワンビジットで松本・高山を訪れることで、北アルプスと都市、自然と伝統文化の調和の階層的な変化を体験」できることにある。本地域はこの階層的変化を体験するための核心エリアであることから、公園内の8つの地区について、それぞれの立地の特徴や価値を活かし、その場ならではの特別な滞在体験を提供することでコアバリューの体現に貢献する。

さらに、Kita Alps Traverse Route 全体で「階層的な変化」を体験する観点から、例えば北アルプスを起源とした水と木に育まれた伝統文化・暮らしに着目することで、東西で異なる文化を形成してきた松本・高山の文化形成の営みから自然と密接に関わる文化・暮らし方を学ぶ利用体験を提供すること等により、本地域と松本・高山両市街地までのエリアとのつながりを明確にし、Kita Alps Traverse Route の魅力向上に貢献することを目指す。

そして、何よりも忘れてならないのは、「旅は動線」であるということである。日本政府観光局（JNTO）の発表によると、訪日外国人の平均滞在日数は16～18日であり、Kita Alps Traverse Route を訪れる多くの訪日外国人はその前後に東京又は京都を訪れていると推定される。訪日外国人は、東京では大都会、ポップカルチャー、ショッピング等の消費活動を体験し、京都では神社仏閣をはじめとした日本の歴史・伝統文化に触れた上で、さらに松本市街地あるいは高山市街地での滞在を経て、本地域の8つの地区に訪れるという客観的認識こそが重要である。そのため、8つの地区間でも旅行者の旅の動線を理解した上で、相互の関係性がWin-Winであることを目指す。

環境のみならず、社会・経済の観点からサステナブル・レスポンシブルな観光スタイルを確立することで、保護と利用の好循環に貢献するとともに、経済効果が地域全体に裨益する経済循環を構築することで地域課題の解決を図る

本地域では、「上高地を美しくする会」に代表される美化活動、マイカー規制、山岳し尿処理対策、温泉熱利用等、全国の国立公園に先駆けた環境保全の取組が行われており、乗鞍高原がゼロカーボンパーク国内第1号に登録される等、自然や地域文化の持続可能性につながる活動が根付いている。

今後も、ゼロカーボンパークの取組を進めるとともに、脱プラスチック、木材等の再生可能資源や再生品の利用、バイオマス資源の利用、地産地消、廃棄物の削減、生物多様性や環境に配慮した製品・材料の調達、環境負荷の少ないサービスの提供に取り組む等、先進的で持続可能な観光地づくりを進める。

また、国立公園の利用により生まれる対価を、周辺地域の自然環境保全や登山道等の利用施設の整備・維持に再投資する仕組みを地域の連携により構築する。その際、利用者にも一定の責任を求め、自然環境や地域社会の維持・継承に利用者自身も貢献できる仕組みづくりを進める。

滞在体験の高付加価値化により、収益性の高い形で観光客を受け入れるとともに、その効果が地域全体に裨益する循環経済を構築し地域の持続性を高めていく。地域内でサプライチェーンを構築することにより、地域に経済効果が波及し、ひいては地域の生活・文化や自然環境の維持・継承に貢献するなど、地域の課題解決に結びつけることを目指す。

【参考】訪日外国人の訪問先（周遊ルート）

松本市における令和4年度の訪日外国人の他旅行先別の年間旅行客数は、高山市が最も多く、次いで白川村であり、隣接県であることや、歴史、文化財、景観等の観光名所が豊富であることが周遊人数に影響していると推測される。

一方、上位50位までの市区町村には、東京都・愛知県・京都府・大阪府といった主要都市が多く、松本市への訪問前後にいわゆる「ゴールデンルート」を周遊していることが伺えることから、訪日外国人をはじめとした旅行者の旅の動線を踏まえ、本地域の滞在体験価値を他都市との対比によって発信していくことが重要である。

表 訪日外国人の他旅行先別の年間旅行客数

順位	市区町村	人数	順位	市区町村	人数
1位	岐阜県 高山市	145,599	26位	東京都 墨田区	23,421
2位	岐阜県 白川村	108,684	27位	大阪府 田尻町	22,056
3位	石川県 金沢市	81,517	28位	広島県 広島市中区	21,995
4位	富山県 立山町	63,836	29位	長野県 安曇野市	21,410
5位	千葉県 成田市	63,551	30位	京都府 京都市右京区	20,347
6位	東京都 台東区	62,687	31位	長野県 山ノ内町	18,992
7位	東京都 渋谷区	60,808	32位	長野県 大田市	18,358
8位	東京都 新宿区	59,768	33位	大阪府 大阪市北区	17,111
9位	愛知県 名古屋市中区	57,488	34位	栃木県 日光市	16,997
10位	東京都 千代田区	50,835	35位	京都府 京都市左京区	16,209
11位	東京都 港区	50,101	36位	岐阜県 中津川市	16,136
12位	愛知県 常滑市	49,985	37位	長野県 軽井沢町	15,965
13位	大阪府 大阪市中央区	49,083	38位	東京都 豊島区	15,544
14位	東京都 中央区	48,023	39位	広島県 廿日市市	15,518
15位	京都府 京都市下京区	41,307	40位	三重県 桑名市	15,187
16位	京都府 京都市東山区	40,753	41位	岐阜県 郡上市	14,985
17位	山梨県 富士河口湖町	37,485	42位	京都府 京都市南区	13,971
18位	愛知県 名古屋市中村区	36,589	43位	京都府 京都市伏見区	13,577
19位	奈良県 奈良市	36,457	44位	石川県 加賀市	13,220
20位	京都府 京都市中京区	34,272	45位	神奈川県 鎌倉市	12,762
21位	富山県 富山市	34,129	46位	石川県 小松市	12,173
22位	東京都 大田区	33,247	47位	長野県 塩尻市	12,077
23位	長野県 長野市	32,119	48位	静岡県 御殿場市	11,937
24位	神奈川県 箱根町	26,391	49位	岐阜県 岐阜市	11,895
25位	東京都 江東区	23,980	50位	大阪府 泉佐野市	10,958

[出典] 松本市ウェブサイト「令和4年度観光データ調査分析事業レポート」（令和5年5月23日時点修正版）
<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/74660.pdf>

3. 利用拠点における面的魅力向上のイメージと宿泊施設の構成要素

本地域では、令和5年度から、モデル観光地事業との合同でのワークショップ（ヤド・アシ分科会）、宿泊事業者を中心とした地域関係者ヒアリング、先進事例の視察・ヒアリング等を通じて、「宿泊施設を中心とした利用拠点における面的な魅力向上のイメージ（理想像）」や、「国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設の構成要素」について検討を行っている。

本基本構想では、これらの検討成果を踏まえ、第4章において、宿泊施設の高付加価値化の方向性を含む各地区の磨き上げの方向性を示す。

宿泊施設を中心とした利用拠点における面的魅力向上のイメージ（理想像）

〇感動体験の基盤となる自然環境の保全への貢献

地域固有の自然環境や文化の保全・継承のため、宿泊施設の収益の一部を持続可能な利用に還元する

〇中部山岳国立公園南部地域ならではの本物の体験ができるアクティビティの充実

地域の自然環境や文化を継承する伝え手や場所とつながり、旅行者に本物の交流や体験を提供する

〇利用者への情報発信

地域の語り部として、地域固有の自然・文化の魅力を旅行者に伝える

〇持続可能性を考慮した環境対策の推進

環境配慮の取組を推進し、サステナブルな観光地づくりに貢献する

〇地域社会の持続性への貢献

産業の継承・活性化、後継者の育成、新たな雇用創出等を通じて、地域課題を解決し、地域社会の持続性に貢献する

Kita Alps Traverse Route（広域観光圏）



利用拠点

宿泊施設

国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設
→国立公園に滞在しているという特別感が出せるようにその地域の価値・魅力（自然・文化）を活かした滞在空間（ロケーション・建物のデザイン・内装等）を演出

※以下はこれまでの分科会意見をふまえた取組例

その土地ならではの魅力・特徴を活かし、そこに訪れた旅行者だけに特別な体験を提供する

- 3,000m級の山岳景観
 - ・登山者のみが見ることができる絶景
 - ・視点場からの眺望・景観美
- 北アルプスの恵み（森林、木材）と木工・民藝
- 北アルプスの山々がもたらす伏流水
 - ・湧水、日本酒をはじめとした酒文化
- 古くから続く祭りや伝統芸能
- 森と水と伝統文化とのつながり
- 歴史ある街並み
- 豊富な温泉と湯治の歴史・文化
- 高山植物の宝庫（生物多様性）
- 登山文化（日本アルピニズム発祥の地、山小屋文化）
- 自然への信仰 等

その人自身の価値観や自己の内面に変化をもたらす宿泊体験を提供する

- 本物に触れることで五感を活性化
 - ・歴史的建造物への宿泊
 - ・山小屋を拠点とした登山・宿泊体験
 - ・民芸品や伝統工芸そのものや過程に触れる
 - ・祭りや伝統芸能とアートのコラボレーション
 - ・自然から得るインスピレーション等
- 自己の再発見につながる時間の過ごし方

北アルプスの森や水の恵みを活かした一貫したコンセプトのもと、ヤドの建築や設え、調度品等で特別感のある滞在空間を演出する

- 地域の魅力（自然・文化）を生かした滞在空間の演出
 - ・雄大な風景を鑑賞できる客室の設計等
- 地元の木材や伝統的な建築様式、伝統工芸品を使用
 - ・建築資材に地場産材を使用
 - ・アートとしての木工・民藝等を活かした空間演出
 - ・調度品に飛騨職人による工芸品を取り入れ

地域ならではの食文化（季節特有の食材、固有の食文化等）を味わい、楽しめるようにする

- ・ヤドで提供する飲食やお土産に地元食材を活用
- ・ローカルガストロノミー（生産者のこだわりや食文化の歴史背景、ペアリングで地元食材と酒の魅力等を伝える）

地域固有の自然環境や文化の保全・継承のため、宿泊施設の収益の一部を持続可能な利用に還元する

感動体験の場となる自然環境の保全が基本である姿勢を共有

保護と利用の好循環（利用への再投資）

- 事業費あるいは旅行者から協力金を徴収し、自然環境保全、利用施設整備・維持管理、情報発信活動に還元
 - ・ヤド独自の自然保全活動の実施・環境に配慮した土産物・記念品を保全協力金が含まれる形等で販売し、売上を還元→上高地寄付金型商品（稜線バタークッキー）
 - ・地域の保全活動への金銭的・非金銭的支援→北アルプストレイルプログラム、のりくら高原トレイルズ整備協力金等
 - ・利用施設（登山道・遊歩道・展望台・園地・広場等）の整備・維持管理
 - ・利用拠点の魅力向上の取組への協力（廃屋撤去や空き家の活用等）

感動体験の基盤となる
自然環境の保全への貢献

地域の自然環境や文化を継承する伝え手や場所とつながり、旅行者に本物の交流や体験を提供する

- ・ヤド独自または地域のガイド事業者と連携した高付加価値なガイドツアーの提供
 - プロの山岳ガイド、ネイチャーガイドによる案内
 - 五色ヶ原の森での少人数限定ガイド
 - 早朝や夜間、冬季などの限定ツアー（星空観賞、夜の氷瀑鑑賞スノーシューツアー等）
- ・ヤドで体験コンテンツを提供（伝統工芸品の制作体験、お祭り等の伝統文化の体験、伝統料理の調理体験等）
- ・地域のガイド事業者との緊密な連携・自立支援
- ・ヤド内でツアー等を予約・参加できる体制の整備（ツアーデスク設置、専属コンシェルジュの雇用、ヤド到着後にツアー等の予約が可能な体制の整備、ヤド専属ガイドの育成・雇用等）

中部山岳国立公園南部地域ならではの
本物の体験ができるアクティビティの充実

地域の語り部として、地域固有の自然・文化の魅力を旅行者に伝える

- ・自然・文化を背景とした場や宿の歴史・価値を宿泊者に伝える→氷壁の宿、温泉・湯治文化等
- ・ヤドが情報発信拠点として機能（ウェブサイトを通じた情報提供、パンフレット等の作成・配布、写真展・企画展等の開催、スタッフ等による利用のルールを含むガイダンス等）
- ・旅行者の興味関心やニーズに柔軟に対応→きめ細かなコンシェルジュサービス（ガイドや飲食店手配など）

利用者への情報発信

環境配慮の取組を推進し、サステナブルな観光地づくりに貢献する

- ・再エネの活用（小水力、温泉熱）
- ・脱炭素・脱プラ等の環境配慮の取組（省エネ、カトラリーやアメニティの脱プラ、節水、排水対策、ごみ減量・リサイクル等）
- ・星空保護
- ・生物多様性保全（敷地内や周辺の生物多様性保全、外来種対策、野生生物への配慮・適切な関わり等）
- ・環境に配慮した移動手段→マイカー規制（上高地、乗鞍畳平）、E-bike貸出（乗鞍高原）
- ・乗鞍ゼロカーボンパーク（エコボトル促進、外来種駆除、白樺の利活用、水力発電等）
- ・持続的な木材利用（地域材の認証制度）
- ・滞在体験を通じて環境保全に対する新たな気づきを与える仕組み（宿泊による環境負荷や地域への貢献度等の見える化）

持続可能性を考慮した環境対策の推進

産業の継承・活性化、後継者の育成、新たな雇用創出等を通じて、地域課題を解決し、地域社会の持続性に貢献する

地域社会への貢献

- ・地域の雇用創出への貢献
- ・持続的な農業に資する適正価格での買い取り
- ・地域資源のブランディング（地域材の認証制度等）
- ・ヤドで使用しているモノを宿泊者が購入できる仕組み（飛騨家具をヤド経由で注文、ヤドで提供している食材の加工品や酒類の販売等）
- ・ヤドを通じた伝統工芸等の普及・継承
- ・新規商品開発（アメニティ、お土産等）を通じた地域の産業の活性化や雇用創出

地域の取組への参画

- ・地域団体への参画（協議会、商工会、観光協会等）
- ・地域の取組への協力（泊食分離、ワーケーション促進等）
- ・地域の飲食店・物販店との連携・協力で、ヤド宿泊者の地域への周遊・滞在を促進

宿泊施設を中心に周辺地域で面的な魅力の向上を図り、地域社会の維持・継承に寄与する

- ・ヤド滞在と合わせて地域を周遊する拠点の整備
- ・ヤドの新規開業・リニューアルを契機とした飲食・物販等の新規進出

地域社会の
持続性への貢献

地域全体への裨益の流れ

収益性の高い形で
利用者数を増やすことで
消費単価と滞在日数を
増やす

地域製品の販売額や
サービス業の売上が
伸びるなど
総体的に外需獲得が進む

生産～消費までの
サプライチェーンが
なるべく地域内で
循環することで
地域に利益が残る

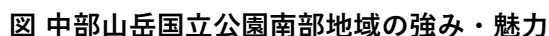
地域内の雇用・事業者・
取引等が増えることで
流入人口・収益が増大し
宿泊施設を中心に
地域全体が活性化する

感動体験の基盤となる
自然環境をはじめとして、
地域の生活や文化等への
収益還元が進むことで
地域全体の持続性が高まる

図 本地域における国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設の構成要素

本地域では、地域内の関係者間での認識を共有するインナープロモーションを目的として、令和元年に「中部山岳国立公園南部地域コンセプト普及方針」（以下「コンセプト普及方針」という。）を作成し、本地域の活用すべき強み・魅力となる要素やストーリー（＝コンセプト）を整理している。

上記のコンセプトは、本地域における日本式アルピニズム文化の発祥を広く国内外に周知するとともに、北アルプスの美しい自然をそこに住む人々と多くの来訪者が共に分かち合えることを願って設定したものである。



25

また、コンセプト普及方針では、前述のコンセプトを踏まえ、本地域の強み・魅力となる要素について、以下の4テーマに整理している。

① 急峻な山岳と生物多様性～三千メートル級の山々が織りなす極限の世界への冒険～

- ・ 槍・穂高連峰を中核とする急峻な山岳や活火山である乗鞍岳・焼岳及びその山麓に広がる広大な高原を含む、我が国を代表する山岳地帯である。
- ・ 山岳が急峻であるため、狭い範囲の中で大きな標高差と様々な地形が存在し、そこに変化に富んだ原生的自然が形成されている。
- ・ 風・水流・火山活動等により刻々と変化する“生きた自然”があり、訪れる者を飽きさせない。
- ・ 豊かな植物相とそれに応じた、多様な動物の生息が確認されている。ツキノワグマやニホンカモシカなどの大型哺乳類のほか、ライチョウ、ホシガラスなどの鳥類、様々な高山蝶類などが分布している。また、滝、清流、湖沼、樹氷など、多様な水資源も見ることができる。
- ・ こうした山岳がもたらす水や大地、空気などの恵みは、南部地域の暮らしをはじめ、遠く都会にまで恩恵を与えている。

② 山岳と人との関わりの歴史～山や自然に神を見出し恵みに感謝する山岳観とアルピニズムとの出会い～

- ・ 日本人の自然観では、山岳は信仰の対象であり、貴重な山の恵みを頂く場であった。こうした自然観は時代の変化の中で薄れつつあるが、神社や祭事、山での意識や行動の中にそれらが残っており、異文化から見ると魅力的な「和 (Japanese)」の要素となっている。
- ・ また、19世紀後半に宣教師ウォルター・ウェストンが訪れ、この地域を「日本アルプス」として世界に紹介。これをきっかけに狩猟や信仰目的ではなく、登ること自体を目的とする登山（アルピニズム）が日本でも普及した。

③ 暮らしと自然との境界での滞在～自然の豊かさや偉大さを気軽・安心・快適に体感できる贅沢～

- ・ 登山前後、あるいは自然散策や自然観察の拠点となる快適な滞在施設が南部地域には集積している。滞在施設には、ホテル、旅館、ペンション、ゲストハウス、キャンプ場など多様な選択肢があり、郷土食も含む多種多様な食事を楽しめる。
- ・ 険しい山岳に登頂しなくても、山岳の傾斜や四季折々の自然を活用したスポーツを楽しんだり、宿泊施設の傍で星空観察をすることもできる。
- ・ 火山活動の恵みである温泉の数や湯の種類においても日本有数の豊富さを誇っている。
- ・ 国立公園内に居住している人がおりコミュニティがあることも大きな特徴であり、生活しながら訪問者を受け入れることで、暮らしの中で大切にしている地域資源や体験を提供することも可能になる。

④ 利用と保全の好循環による持続可能性の担保

- ・ 貴重な自然が集積している地域であるが、利用者数も多く多様化しており、自然保全・保護活動にも力を入れることが必要である。
- ・ 地元の関係者が、保全・保護の活動を事業やボランティアとして行ってきた歴史があり、こうした活動により多くの受益者が参加していくことを南部地域のスタイルとして確立していくことが望ましい。

[出典] 中部山岳国立公園南部地域利用推進協議会「中部山岳国立公園南部地域コンセプト普及方針」(令和元年)より抜粋

今後は、これらの過年度の検討成果をもとに、利用者と共有したいテーマ・ストーリー、重要な資源、望まれる体験等について、地区ごとに深掘りを行い、それを活かした体験価値の創出と持続的な観光地経営を念頭に置いた、インタープリテーション全体計画の策定に取り組んでいく。

第4章 各地区の役割分担と磨き上げの方向性

1. 各地区の高付加価値化の方向性と役割分担

松本・高山エリアのコアバリューは、「松本・高山間の移動を通じて、北アルプスと都市、自然と伝統文化の調和の階層的な変化を体験」できることにあり、国立公園である本地域は、この階層的变化を体験するための核心的なエリアとして位置づけられているが、本地域の特徴の一つとして、自然探勝、登山、アクティビティ、温泉、ゲートと性格の異なる8つの地区が点在することが挙げられる。

そのため、本地域の利用の高付加価値化の実現には、各地区が本地域内で果たすべき役割を明確化するとともに、上高地・沢渡・平湯トライアングル検討や乗鞍岳統一プロモーションの検討（乗鞍岳BBPT）等に代表される地区間のつながりや関係性を踏まえた上で、それぞれの地区を磨き上げることが求められる。

地区の磨き上げに当たっては、地域関係者とともに各地区の立地の特徴や価値を深掘り・明確化し、その土地ならではの価値・特徴の発揮によって、国立公園ならではの感動と学びの体験を提供する方向性を地区毎に定めることで、利用の高付加価値化を目指した取組を推進することが重要である。

以上を踏まえ、本地域における各地区の高付加価値化の方向性と役割分担を以下に示す。

	地区	地区間のつながり・役割分担
自然探勝	上高地	国内屈指の観光地（＝旅の目的地）であるとともに、松本市側の山岳エリアへの入口として登山基地の役割も担う。さわんど温泉・平湯温泉経由でのアクセスが一般的。自然探勝の場である上高地とアクティビティ主体の乗鞍高原で、それぞれ楽しみ方が大きく異なる。
	新穂高温泉	奥飛騨温泉郷の最奥部に立地する温泉地であり、高山市側の山岳エリアへの出発点。新穂高ロープウェイによって、一般観光客も通年で2,150mの山岳景観及びロープウェイ駅周辺の自然景観を楽しむことができる。
	乗鞍岳	長野県と岐阜県の県境に位置し、松本市側は乗鞍高原を起点とする乗鞍エコーライン、高山市側は平湯温泉を起点とする乗鞍スカイラインが接続しているため、一般観光客でも3,000m級の山岳景観を気軽に楽しむことができる。本地域内では登山初心者向けの山としても位置付けられる。
登山	山岳エリア (槍・穂高連峰等)	入山には準備が必要な本格登山領域。自らの力で登ること自体や、登山を経て初めて出会える体験が、この山岳エリアの価値となる。上高地及び新穂高温泉が主な登山基地となっている。
アクティビティ	乗鞍高原	乗鞍岳の麓に広がる高原エリア。人々の営みと自然が作り出した風景の中で四季折々の体験・アクティビティを楽しむことができる。本地域内では最も人口が多く、人と自然が共生する観光地として、ワーケーションや二拠点生活といった長期滞在に対応可能な宿泊施設も多い。
温泉	白骨温泉	梓川支流の険しい谷の奥深くに位置する秘湯。特徴的な地質に由来する泉質と豊富な湯量を誇り、湯治場としての長い歴史を有する温泉地として、旅の目的地の役割を担う。
	平湯温泉	上高地のゲート機能を担う高山市側のマイカー規制の乗換拠点。新穂高温泉、乗鞍岳、さわんど温泉などにもバス路線が出ており、本地域全体のハブ機能も担う。さらに、平湯温泉は豊富な湯量を有しており、温泉地という旅の目的地としての役割も持つ。
	さわんど温泉	上高地のゲート機能を担う松本市側のマイカー規制の乗換拠点。乗鞍高原、白骨温泉、平湯温泉などにもバス路線が出ており、本地域全体のハブ機能も担う。

【山岳エリア（槍・穂高連峰等）】

登山

登山を経なければ味わうことのできない感動と学びの体験の提供

○本格登山領域に相応しいレギュレーションとガイダンスによる山岳利用の上質化を図る。
⇒北アルプスの登山文化を担ってきた山小屋を支える仕組みの構築
⇒山小屋らしい高付加価値利用の検討

【新穂高温泉】

自然探勝

北アルプスの玄関として幅広いターゲットが登山や自然体験を楽しめるエリア

○槍・穂高連峰等に登る拠点という性格を明確化。ロープウェイの駅ごとに特徴と魅力を持たせ、体験とターゲットの差別化を図る。
⇒ロープウェイと連携した宿泊施設及び駅ごとに特徴ある体験サービスの提供

【平湯温泉】

ゲート

温泉街

多様な利用者を受け入れ、より良い体験をバックアップする温泉郷

○交通結節点という好立地かつ、歴史ある湯治場、北アルプスへの眺望などの良好なロケーションを活かした地区の魅力向上を図る。
⇒温泉街・各宿泊施設の”平湯らしさ”を追求し、単なるゲートではなく、ここに泊まる意義の向上

【乗鞍岳】

自然探勝

アクセス性の高い3,000m級の高山帯における唯一無二の感動体験の提供

○高山帯でのみ体験しうる感動体験（眺望、雪渓、星空、ライチョウ等）を提供する。
⇒3,000m級の山岳地帯での特別な宿泊体験の提供
⇒高山帯としての特段の環境配慮

○：利用の高付加価値化の方向性
⇒：宿泊施設の方向性

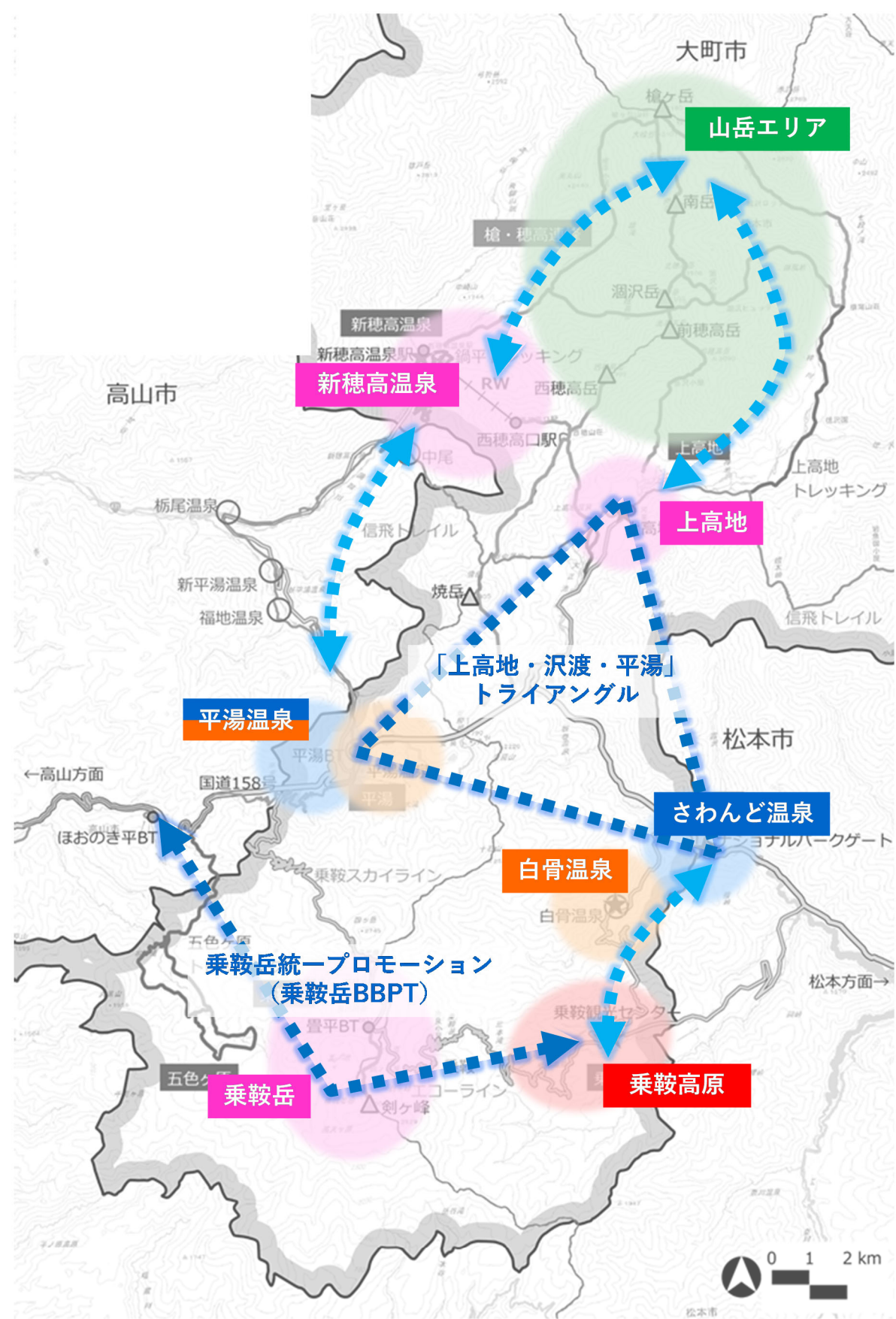


図 中部山岳国立公園南部地域における各地区の高付加価値化の方向性と役割分担

【上高地】

自然探勝

時代や国籍を超えて人々を魅了する場所であり続ける、上質な環境の維持・向上

○上高地は既に唯一無二の憧れの存在。今後も訪れる人を魅了する場所であり続けるため、地域の質の向上を目指す。
⇒土地の魅力を活かした多様な宿泊施設の磨き上げ（高付加価値化）と利用者へのさらなる訴求。

【さわんど温泉】

ゲート

フィールドへ出かける人や物の準備が整えられる、便利で特別感のある拠点

○National Park Gate を中心とした情報発信拠点。上高地のみならず、中部山岳国立公園南部地域の各地区への入口として、ゲート機能を極める。
⇒乗換拠点の近くに泊まる・住むことそのものを価値とした宿泊施設・機能の提供

【白骨温泉】

温泉街

「秘湯」を未来に継承し、自然の中で健康を取り戻す体験に富む滞在拠点

○秘湯としての雰囲気を持続しつつ、宿泊客の健康の維持、回復をキーワードとしたアクティビティの充実を図る。
⇒長期滞在できる湯治の温泉地として、温泉・食事・運動・睡眠を組み合わせた宿泊施設の提供

【乗鞍高原】

アクティビティ

乗鞍高原を愛する人々とともに、温故知新×サステナブルな滞在を満喫する拠点

○四季を通じた多彩なコンテンツの提供と持続可能な地域づくりに貢献する。
⇒のりくら高原ミライズのビジョンに共感し、乗鞍高原らしさを体現する宿泊施設の提供
⇒地域の課題解決にともに取り組む宿泊施設の提供

2. 各地区の磨き上げの方向性

本地域における各地区の高付加価値化の方向性と役割分担を踏まえ、8つの地区について、それぞれ磨き上げの方向性を示す。

上高地

■価値・特徴

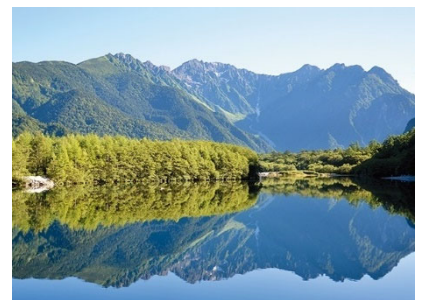
上高地は、槍・穂高連峰を中心とした、北アルプスの3,000m級の山々とそれらの山深くに開けた梓川の渓谷からなる地域である。梓川の清流、山麓一帯に広がる森林、河畔林、荒々しい岩稜が織りなす我が国屈指の山岳景観を呈する景勝地であり、特別名勝、特別天然記念物にも指定されている。

散策、自然探勝、トレッキング等を目的に多くの人々が訪れる自然景勝地であり、槍・穂高連峰へ登る玄関口でもある。

(1)傑出した山岳景観

河童橋から見た穂高連峰に代表される、荒々しい岩稜、梓川の清流、山麓一帯に広がる森林、河畔林、大正池・田代池・明神池の池沼などが見事に調和した、絶妙な山岳景観が形成されている。

槍ヶ岳、穂高岳、焼岳、常念岳、大天井岳など、北アルプスの3,000m級の山々が連なり、雄大かつ荘厳な山岳景観を呈している。



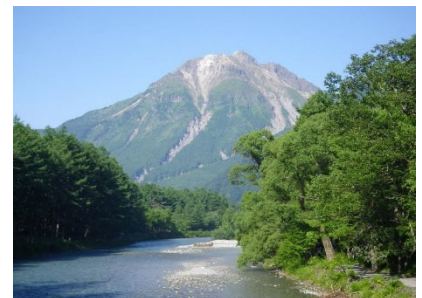
大正池と穂高連峰

(2)山岳環境に適応した特異な生態系

上高地とその周辺の山岳地は、112km²の流域面積を有しており、梓川流域の水源地を構成するなどして、下流域の県民・市民へ生態系サービスを提供する機能を発揮している。

梓川には、多様な河畔林や沖積錐などが形成されており、自然河川ならではの環境が残る極めて貴重な地域となっている。

河畔から山麓部に続く平地や緩斜面には、ハルニレなどの湿性林のほか、希少な針葉樹林の天然林も見られる。



梓川の河畔林と焼岳

(3)アルピニストの聖地

江戸時代の槍ヶ岳開山にはじまり、明治以降、ウェストン等による先駆的な登山をはじめとした近代アルピニズムが発展する中で、我が国の登山史の主要な舞台となってきた。

登山がレジャーとして定着した現代においても、北アルプスは登山者の憧れの山域であり、その登山基地である上高地は、アルピニストの聖地となっている。



徳沢キャンプ場

(4)隔絶された非日常の空間

古くから自然環境保全の意識が高く、昭和50年からマイカー規制が行われている。

交通アクセスの不便さ、深い谷からトンネルを通行して上高地に至ることも相まって、梓川沿いに広がる日本有数の風景地は、隔絶された非日常の特別な空間となっている。



梓川沿いの散策路

■現況・課題

(1)利用状況

上高地の利用者数は、平成 26 年以降、日帰り利用者は 90 万人程度、宿泊利用者は 30 万人程度で推移していたが、コロナ禍により令和 2 年の日帰り利用者は 30 万人程度と大幅に減少している。

令和 3 年以降の利用者数は回復傾向にあり、令和 5 年の日帰り利用者は 100 万人を超え、宿泊利用者もコロナ前と同水準に戻りつつある。

なお、宿泊利用者は利用者数全体の約 30～50%程度となっている。

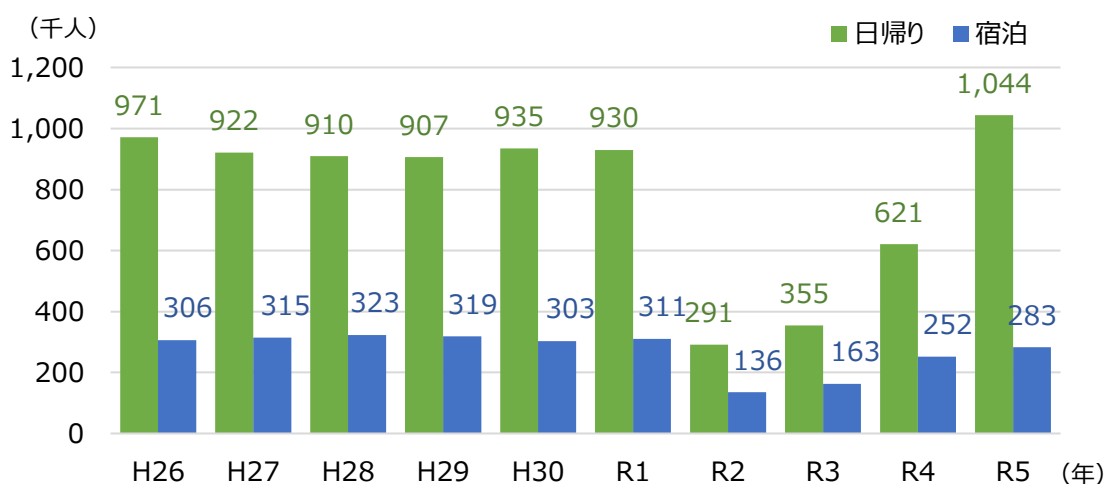


図 上高地の利用者数の推移（日帰り／宿泊別）

[出典] 長野県観光スポーツ部山岳高原観光課「観光地利用者統計調査」

月別の利用者数を見ると、11月中旬～4月中旬は冬季閉山しており著しく少ない。開山期では8月及び10月がピークで利用者数は月 25 万人前後となっている。

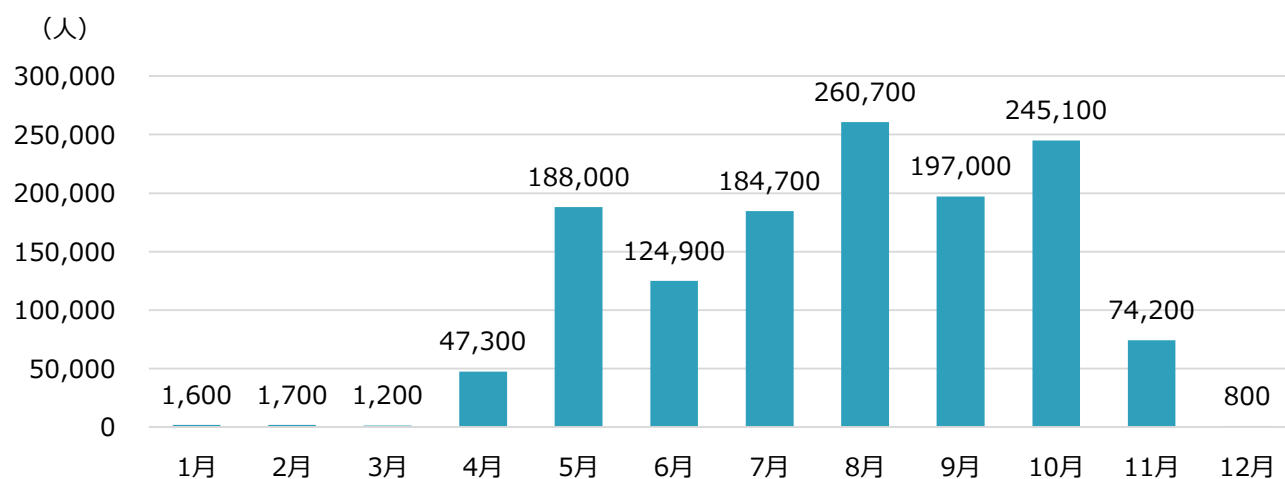


図 上高地の月別観光入込客数の推移（令和 5 年）

[出典] 松本市観光プロモーション課「松本市観光地延利用者数（観光入込客数）」

(2)社会状況

<冬季利用に関する考え方と課題>

毎年11月中旬から4月中旬にかけて冬季閉山となり、釜トンネル～上高地バスターミナル間の道路を冬季閉鎖とするほか、上高地エリアの多くの宿泊施設は冬季休館となる。

冬季入山者に対しては、平成22年に策定した「上高地地域冬期利用管理方針」に基づき、ルールを定めて自己責任での入山を呼び掛けているが、近年、スノーシュー等の日帰りや観光目的の冬山登山を目的とする入山者が増加傾向にあり、自然環境への影響、雪崩等の危険に対する安全確保、ゴミ・し尿処理といった問題等が懸念されている。

<世界最高水準の山岳公園づくりに向けた取組>

上高地の将来目標（ビジョン）やその実現に向けた多様な関係者の行動計画を示した「上高地ビジョン2014」（平成26年7月11日、中部山岳国立公園上高地連絡協議会）のもと、地域関係者による協働型の管理運営体制の構築とそれによる世界最高水準の山岳公園づくりを目指して取組を進めている。現在、同ビジョンは10年ぶりの改定に向けた検討が行われている。

また、「上高地マル集未来構想（上高地集団施設地区再整備基本構想）」（令和5年3月策定）の取組の一つとして、上高地観光旅館組合と環境省の連携により、令和6年度より有償で「上高地における手荷物配送サービスの実証実験」を実施している。同実証実験は、雨天時を中心に宿泊客の利用満足度を改善したいという地域の声と、国立公園における保護と利用の好循環を目指す検討の中で行われているもので、五千尺ホテル上高地、ザ・パークロッジ上高地、上高地ホテル白樺荘、上高地アルペンホテル、上高地ルミエスタホテル、上高地温泉ホテル、上高地帝国ホテル、西糸屋山荘の8施設が参画している。

(3)利用施設・コンテンツ等

上高地における主要な利用施設・コンテンツ等は以下の通りである。

利用施設	ビジターセンター、インフォメーションセンター、探勝歩道、公衆トイレ、宿泊施設、山小屋、野営場等 ※宿泊施設：ホテル・旅館 11 軒、山小屋 7 軒、野営場 2 箇所
コンテンツ	・ 散策 ・ トレッキング ・ 自然探勝 ※ガイドツアーあり ・ 温泉入浴 ※日帰り入浴あり ・ キャンプ
地域で活動している方々	・ 上高地町会 ・ 上高地観光旅館組合 ・ 上高地ネイチャーガイド協議会 ・ 宿舎事業者等の地域事業者、交通事業者、ガイド事業者など多数



図 利用施設等位置図（上高地）

(4)課題

<非日常空間の維持・向上>

上高地は自然公園法や文化財保護法による制約が多く、宿泊施設や従業員宿舎等の増築が容易でない。一方、制約が多いからこそ、上高地は非日常の特別感が醸成された空間が形成されている。

利用者の満足感をより高めるため、上高地へ入域することの期待感・特別感を喚起するような仕掛けが望まれる。

マイカー規制が行われているものの、業務用車両が利用者に近い場所を通行する場所もあり、歩車分離が完全ではない。

<登山基地としての機能強化>

現状、槍・穂高連峰や常念山脈等への登山者は上高地に宿泊せずに素通りしてしまうことも多い。

歴史ある登山基地である上高地は、登山利用とは切り離せない場所であることから、登山前の準備や下山後の楽しみとなるようなサービスの提供が求められる。

<コンテンツの充実、情報発信の強化>

上高地のアクティビティは散策による風景探勝が主であるため、子連れのファミリー層など利用者の属性・ニーズによっては、楽しみ方がわかりにくい場合がある。

また、現状は各宿泊施設が独自で情報発信を行っている状況で、エリア全体での情報集約、一元的な情報発信に課題がある。

特に大正池や明神、徳沢など、上高地インフォメーションセンターや上高地ビジターセンターから離れたエリアでは、各宿泊施設が情報発信拠点の機能を担っている現状があり、情報の集約・発信に課題がある。

急激な利用者数の増加に伴い、繁忙期には上高地へのゲート機能を担うさわんど温泉、平湯温泉において渋滞が発生するなど、上高地へのアクセス及び周辺エリアの利用・交通に課題が生じていることから、さわんど温泉の沢渡ナショナルパークゲートや平湯温泉の中部山岳国立公園奥飛驒ビジターセンター（以下「奥飛驒ビジターセンター」という。）や平湯バスターミナルなどの周辺施設も含めた連携・情報発信が必要である。

<冬季利用のあり方検討>

近年はSNS等の普及により無謀な冬山登山、無秩序な冬季利用が増加傾向にあることから、冬季の利用についてルールの明確化が必要な状況にある。一方で、冬の上高地には「国立公園ならではの感動体験の提供」に資する魅力があり、今後一定のルールのもとに限定的に利用を図っていくことも考えられる。

事業運営の面では、自然環境保全や施設メンテナンスの観点から一定期間フィールドを休ませる必要がある、との考えのもと、長年にわたり冬季閉山を基本としてきたが、年間稼働日が少ないため季節雇用となりやすく、従業員の安定雇用に課題がある。

また、上高地の営業状況は他拠点の利用状況にも影響し、特に上高地へのゲート機能を担うさわんど温泉、平湯温泉はその傾向が顕著であるため、上高地の冬季利用のあり方は、他拠点の冬季利用者数も左右すると言える。

上記の通り、上高地の冬季利用のあり方については、様々な視点・見方があることから、今後丁寧な議論が求められる。

■磨き上げの方向性（理想の姿）

時代や国籍を超えて人々を魅了する場所であり続ける、上質な環境の維持・向上

～眺める、歩く、学ぶ、自分に合った距離感で自然との直接対話ができる、あなただけの上高地～

上高地は既に唯一無二の憧れの存在。今後も訪れる人を魅了する場所であり続けるため、地域の質の向上を目指す。

創業から 100 年を超える宿も多く既に土地の魅力を活かした様々な宿泊施設がある。それらの磨き上げ（高付加価値化）と利用者へのさらなる訴求を目指す。

<磨き上げの方向性（理想の姿）のイメージ>



(1)望まれる体験・過ごし方

○唯一無二の上高地の眺望を堪能する（全ての利用者）

- ・様々なレベル、国籍の利用者がいる中で、全ての利用者にとって「憧れの上高地」を楽しめる場所でありつづける。

○上高地を眺めながらゆったりとくつろぐ（上高地での滞在を楽しみたい人）

- ・上高地を一望できる休憩所や宿泊施設等でコーヒーなどを飲みながらゆったりとくつろぐ。自然と自分だけの空間で何もしない贅沢な時間を過ごす。

○河童橋より先まで足を延ばして探勝する（自然への興味・関心が深い人）

- ・自然への興味・関心が高い人は、明神池、徳沢まで足を延ばして、大自然との対話を楽しむ。
- ・さらには岳沢や焼岳まで足を延ばして大景観を眺め下ろす体験をする。

○上高地の価値や魅力を深く学ぶ（自然への興味・関心が深い人）

- ・自然への興味・関心が高い人、学習意欲の高い人は、地形地質の特徴、火山防災に関する知識、開拓の歴史、希少な野生生物など、表面的には見えにくい土地の特性や魅力を、ガイドツアー等を通じて深く学ぶ。

○保護と利用の最先端モデルに触れる（自然への興味・関心が深い人、社会貢献意識の高い人）

- ・保護と利用のさらなる好循環に向けた取組に参加する。唯一無二の憧れの場所に訪れながらもその環境が継続できる活動や取組へ参加・支援を行い、地域・自然に対する貢献を行うことで、憧れの場所を自らの手で守る喜びを実感する。

○上高地を独り占めする（上高地での滞在を楽しみたい層）

- ・早朝、夜間、冬季など、利用者が宿泊客のみに限定される条件下で、上高地のレアな姿に触れるとともに、上高地を独り占めにする贅沢な経験をする。
- ・なお、冬季利用ほか現時点で使い切れていない資源については、宿泊者限定のコンテンツとすることも含め、さらなる活用を検討していく。

(2)宿泊施設の高付加価値化の方向性

○上高地の魅力を堪能できる上質なサービス提供と情報発信の強化

- ・バスターミナルから宿泊施設までの手荷物配送等、宿泊者限定の利便性向上サービスを提供する。
- ・早朝、夜間、冬季のツアー等と組み合わせての利用、宿泊者限定エリアの設定など、より上質な宿泊施設、サービスを目指す。
- ・なお、ツアー参加を必須とはせず、あくまで宿泊者の志向に応じた利用形態を尊重する。

○登山基地としても活用できる宿泊施設の維持

- ・槍・穂高連峰や常念山脈への登山者の利用も想定し、登山基地として登山準備や登山後の休息地として使用しやすい宿泊施設を維持していく。

(3)利用の高付加価値化に向けた取組

○来訪者と共に上高地の価値を高めるしくみづくり

- ・地域自治と共に自然景観を守り・親しむ取組を継続してきた上高地が、今後もその取組を続け、充実が図れるよう、入域料の導入等の利用者負担についても積極的に検討する。
- ・なお、利用者負担制度を導入する場合には、他の税金や協力金との重複感を与えないよう、用途を明確にするよう留意する。

○交通機関の予約制や運賃に対するダイナミックプライシングの導入

- ・多客期はバスやタクシー及び乗り換え駐車場の予約制を導入したり、料金を高くしたりするなどして、利用者数をコントロールすることで、来訪者の満足度を維持する。

○より上質な滞在空間を提供するためのゾーニング

- ・宿泊者やガイドツアー参加者限定のエリアを設定することで、ライト層とより深く楽しみたい層のゾーニング・すみ分けをするとともに、限定エリアの高付加価値化を図る。
- ・魅力ある景観を維持するため、自然環境に配慮しつつ草刈りや通景伐採を行う。
- ・カーレスリゾートの徹底のため、ゴミ収集などのバックヤード施設の一元化や歩車分離に取り組む。

○ツアーデスクの整備、情報の一元化

- ・大正池や明神、徳沢等も含めた上高地エリア全体の宿泊施設、ガイドツアー等の予約状況を一元管理するツアーデスクを整備する。

○周辺地区を含めた連携・情報発信

- ・上高地の拠点施設や宿泊施設をはじめ、各地区の拠点施設（沢渡ナショナルパークゲートや奥飛騨ビジターセンター、平湯バスターミナル等）においても、交通情報について情報発信を行う仕組みを構築する。

山岳エリア（槍・穂高連峰等）

■価値・特徴

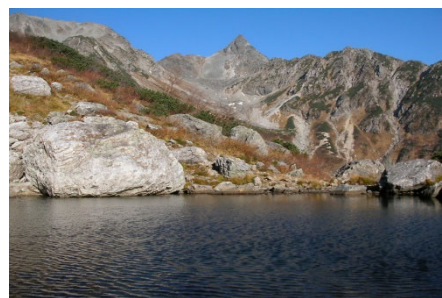
日本のマッターホルンとも呼ばれる槍ヶ岳をはじめ、北穂高岳、涸沢岳、奥穂高岳、前穂高岳など3,000m級の高峰が連なる山域である。槍穂高連峰の東側には、燕岳、大天井岳、常念岳、蝶ヶ岳等からなる常念山脈が南北に伸び、西側には笠ヶ岳や双六岳が位置しており、国内トップクラスの人気を誇る本格的登山エリアである。多様な登山ルートと山小屋・野営場など登山のためのインフラが整えられ、高山帯ならではの自然環境が多くの登山者を引き付けている。

（１）日本を代表する傑出した山岳景観

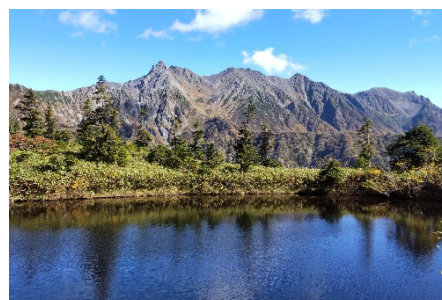
槍ヶ岳から穂高連峰を主体とし、活火山である焼岳に至る我が国でも屈指の山岳地域であり、3,000m級の高峰が連なる極めて優れた山岳景観を有するエリアである。

穂高連峰には圧倒的なスケールの岩壁の他、高山植物を含む亜高山から高山の豊かな生態系、紅葉、雪氷など季節ごとに魅力も多く、登山者を魅了している。

槍ヶ岳は氷河の浸食作用により山頂部が鋭く尖り、周囲にはU字谷が発達している。ヨーロッパアルプスのマッターホルンを彷彿とさせる山容から、多くの登山者の憧れの的となっている。



槍ヶ岳と天狗池



槍ヶ岳と鏡池



涸沢カール

（２）国内トップクラスの本格的登山エリア

日本を代表する傑出した山岳景観を要する本地域は国内トップクラスの人気を誇る本格的な登山エリアとなっている。

山域には多様な登山ルートのほか、山頂付近や稜線部などの奥深い山域にも山小屋が整備され、全国から多くの登山者が訪れている。

山小屋は、厳しい自然環境下で制約の多い中、登山者に宿泊と食事を提供することに加え、登山道の維持作業、登山者への情報提供・指導、遭難救助、トイレや水の提供など、山岳地の環境保全と安全登山を支える上で重要な役割を果たしている。

■現況・課題

(1)利用状況

令和元年以前の登山者数は、長野県側からのアプローチが約 20 万人前後、岐阜県側からのアプローチが約 5.5 万人前後となっている。コロナ禍の令和 2 年にいずれも半減しているが、令和 4 年にかけて漸増、回復傾向を示している。

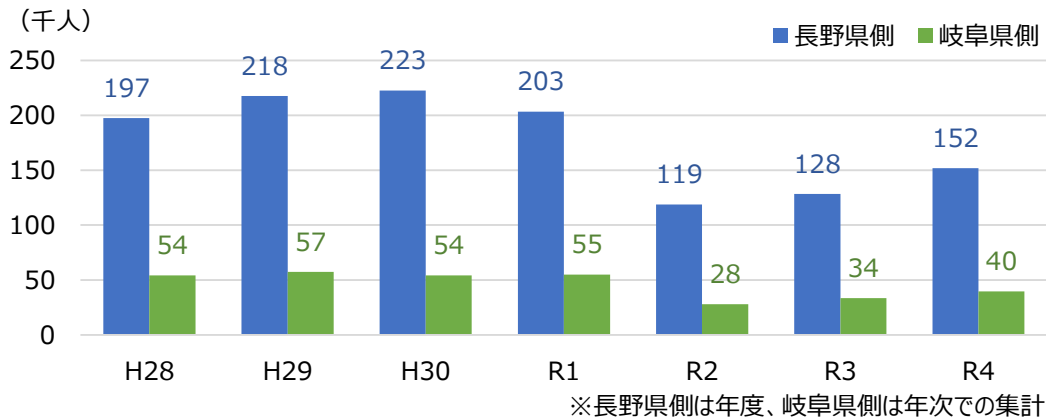


図 北アルプス（長野県・岐阜県）の登山者数の推移

[出典]長野県観光スポーツ部山岳高原観光課「登山計画書の届出状況」及び岐阜県北アルプス山岳遭難対策協議会「山岳白書」

山小屋の営業期間は、通年営業が 1 軒、その他の小屋は季節営業となっている。槍ヶ岳、穂高岳、常念山脈の残雪期登山の拠点となる山小屋は GW 期に営業を開始する。その他の小屋は 7 月上旬に営業開業する施設が多く、ほとんどの小屋が 10 月上旬から 11 月上旬まで営業している。

山小屋の利用者数を見ると、コロナ前は約 14～15 万人程度の利用があったが、令和 2 年には 5 万人ほどに落ち込んでいる。令和 3 年以降は、回復傾向にあるものの、感染症対策により宿泊定員を抑えているため、コロナ前の水準よりは少なくなっている。山域別では、令和 5 年度の槍・穂高エリアの利用者数は約 4.5 万人（うち外国人割合は約 12%）、常念山脈の利用者数は約 2.8 万人（うち外国人割合は約 9%）、その他エリアでは約 600 人（うち外国人割合は約 1%）であった。

野営場の利用者数を見ると、コロナ禍の令和 2 年に利用が落ち込んだものの、どのエリアでもコロナ前の水準に回復しており、常念山脈エリアではコロナ前よりも利用が増えている。

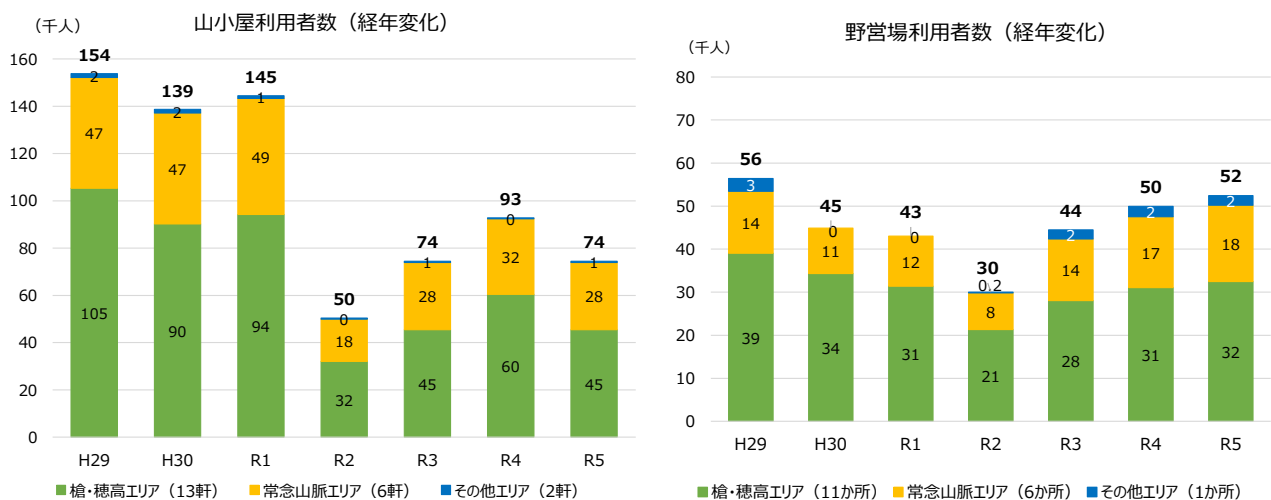
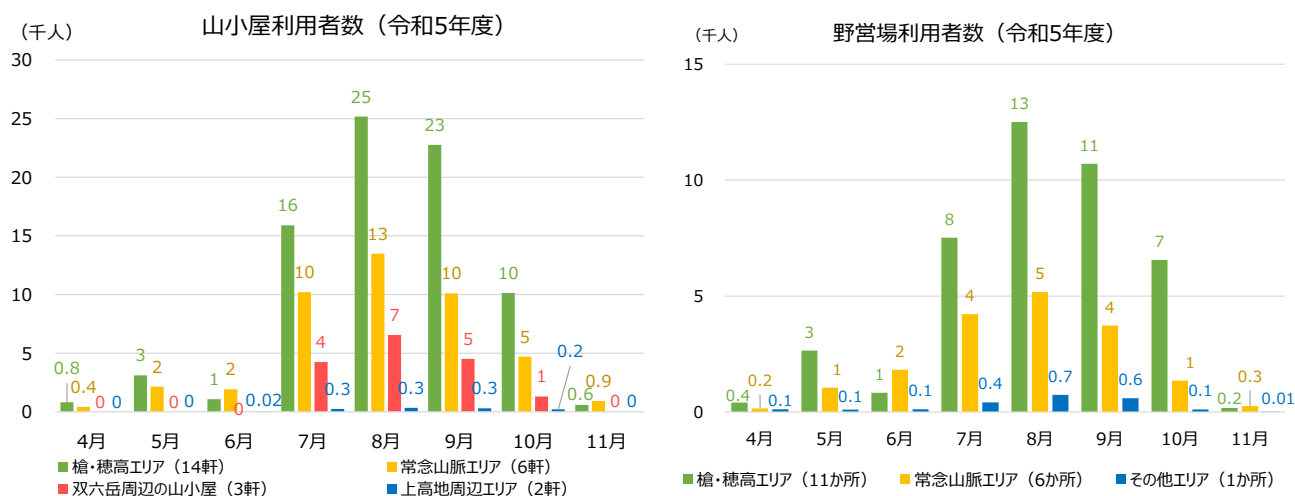


図 北アルプス南部地域の山域別の山小屋・野営場の利用者数推移（経年変化）

[出典]環境省調べ

季節別の利用者数をみると、山小屋・野営場はともに7～10月の利用が多く、どの山域でも同様の傾向がみられる。



※山小屋利用者数（令和5年度）：本データのみ飛騨側の山小屋利用者数を含むため、前項のグラフの軒数とは一致しない。

図 北アルプスの山域別の山小屋・野営場の利用者数推移（季節変化）

[出典]環境省調べ

(2)社会状況

<コロナ禍への対応>

山小屋はコロナ禍への対応として、予約制の導入、宿泊定員の制限、利用料の値上げ、間仕切り等の感染対策等を実施しており、従来よりもパーソナルスペースを確保した形での経営が行われるようになっていく。

<北アルプストレイルプログラム>

北アルプストレイルプログラムとして、これまで山小屋が担ってきた登山道の管理等について、利用者に現状を理解してもらった上で、利用者の協力や参加により登山道を維持していく新たな試みが開始されている。

<山小屋の通信環境改善>

通信衛星 Starlink を活用した、山小屋で利用可能な公衆 Wi-Fi サービスが普及しつつあり、山小屋におけるキャッシュレス決済の導入等への活用が期待されている。

(3)主な利用施設・コンテンツ等

山岳エリアにおける主要な利用施設・コンテンツ等は以下の通りである。

利用施設	・ 宿泊施設：山小屋 25 軒、野営場 ・ 登山道 ・ 避難小屋
コンテンツ	・ 登山 ・ 自然探勝
地域で活動している方々	・ 北アルプス山小屋友交会 ・ 飛騨山小屋友交会 ・ 遭難対策関係者 ・ ヘリ航空事業者 など



図 利用施設等位置図（山岳エリア）

(4)課題

<山小屋の持続的経営に関する社会・経済的課題>

山小屋は、国立公園事業執行の責務を担っているが、その持続的なサービスの提供については、社会的・経済的な課題が大きい。

○物資輸送

ヘリコプターに物資輸送を頼っている山小屋が多いが、ヘリ会社の撤退や輸送費の高騰等により、山小屋の経営に大きな影響が生じているケースがある。

○施設の維持

過酷な自然環境下にある山小屋の多くで老朽化が進んでいるが、大規模修繕には多大な費用が必要となることから、山小屋経営への大きな負担となっている。特に、小規模な事業者は経営が厳しく、補助金等を活用した改修にも踏み切りにくいケースがある。

○建築基準法等の法令対応

電気、水道、道路等のインフラが未整備であり、過酷な自然環境という特殊条件下にある山小屋においては、建築基準法等について平地と同様の対応が難しい場合が多く、改修等の支障となっている。

○人員確保

山小屋においても働き手の確保が重要な課題となっている。季節労働であるため、スタッフを安定的に雇用することが難しい。山小屋スタッフの業務は、施設や登山道管理など様々な技術を必要とするため、スタッフが定着しない場合は、技術や知見の継承が難しくなる。

また、特殊条件下にある山小屋では、季節、天候、トラブル等の状況により従事内容が異なり、労働時間等の条件を一律に適用することが山小屋の負担となっているケースがある。

○登山者指導に関する負担の増加

近年、登山の知識や装備が不足した利用者が増えつつあり、安全指導等に関する山小屋の負担が増加している。

<利用上の課題>

○情報発信

山岳エリアの情報は正確かつリアルタイムでの提供が重要であり、個別の山小屋の発信では限界があるため、山岳エリアのリアルタイム情報を統一的に集約・発信する仕組みが求められる。

特に、外国人登山者向けにルート（残雪、渡渉可否などのリアルタイム情報含む）、装備（アイゼン・ピッケル等の必要性）や山小屋のルール（予約制、早着等）を情報提供できていない状況があり、海外からの登山者目線でも統一した情報発信や問い合わせ先が必要である。

また、不慣れた登山者に対し、山の魅力や感動体験に加え、山の危険度や必要な備えについて情報発信が必要である。

○山小屋の予約制度の運用

山小屋の予約制の導入によりピーク期の混雑が緩和され快適性が向上している。一方で、個々の山小屋が独自の予約制を取っているため、長期の縦走登山が計画しづらくなったり、天候による行程の変更がしづらくなっている状況も見られる。また、予約キャンセルの運用も山小屋ごとに異なる。他の山小屋との重複予約を防止するためにキャンセル料を導入するケースもある。

現状の1ヶ月前からの予約受付の場合、海外からの登山者や時間をかけて事前準備をする利用者にとっては予約の確約が取れず、旅程を定めづらくなる。また、海外からの登山者は積雪等の状況を知らずに予約して、実際に山小屋まで到達できないようなケースなども生じているため、事前の情報発信の仕組みとあわせた予約制の運用方法の改善については引き続き検討していくことが求められる。

○利用者ニーズへの対応等

近年、山小屋に対して、個室化やパーソナルスペースの拡充、カフェ提供、キャッシュレス決済等のニーズが高まっている。今後の登山人口の減少が見込まれる中で山小屋経営の持続性を高めるためには、上記のようなニーズへの対応等を通じた新しい利用者層の獲得が必要となると考えられる。そのため、今後、山小屋で提供すべきサービスについて、守っていくべきことや、新しく取り組むべきことといった観点からの検討が必要である。

また、従来の縦走登山の経由地としての利用の他、例えば、山小屋に連泊で滞在して周辺の散策や小屋での喫茶を楽しむような新しい利用スタイルのあり方について検討すること、山小屋経営の持続性を高めることにつながると考えられる。

■磨き上げの方向性（理想の姿）

安易に利便性を追求しない、本格登山領域

～ 登山を経なければ味わうことのできない感動と学びの体験の提供 ～

圧倒的な山岳景観と山小屋での非日常体験が魅力の本格登山領域。ありのままの自然に踏み入り、その危険性も受けいれながら、自らの力で登ること自体や、そこで出会える景色や達成感が登山の本質的な価値といえる。

山岳エリアの価値は準備無しでは体験することが出来ないことから、安全登山や持続的な利用に必要なレギュレーションを設定するとともに、本地区の価値に関するガイダンス等を通じて、登山者に感動と学びを提供する上質な利用環境を構築する。

<磨き上げの方向性（理想の姿）のイメージ>

山岳エリア

本格登山領域 圧倒的な景観と山小屋での非日常体験



(1)望まれる体験・過ごし方

(登山者)

- 登山を経なければ味わうことのできない圧倒的な景観に心うたれる。
- 自らの力で歩き 3,000m の頂きに到達することで、他では得られない達成感に浸る。
- 日本アルプスの山々への挑戦を通じて人生に向き合ったり、生きる意味を考えたりするきっかけを得る。
- 3,000m級の稜線や湿原など絶好のロケーションでの宿泊を満喫する。
- 北アルプスの登山文化を支えてきた山小屋の歴史や苦労に思いをはせる。不便さも含め山小屋で過ごす特別な時間を楽しむ。
- 縦走登山だけでなく、山小屋に連泊して、周辺を散策したり、山々の眺めを楽しんだりしながら、のんびり過ごす。
- 入山時のレクチャーやガイドの解説等を通じて、貴重な自然環境が保全されていることや保全の仕組み、日本の登山文化発祥の地としての歴史などを学び、槍・穂高連峰等の山岳エリアに関する理解が深まる。
- あこがれの北アルプス登山に向けて、事前準備（情報収集、計画、トレーニング）をしっかりと行って入山する。そのこと自体が登山の楽しみ・満足として感じられている。

(登山初心者)

- 上高地～岳沢小屋や涸沢、焼岳、蝶ヶ岳、新穂高温泉～わさび平や鏡平、弓折岳、双六岳など比較的容易なルートの登山を通じて、槍・穂高連峰の素晴らしい景色に出会い登山の魅力を知る。そのことで、次に登りたい山が見つかるなど、段階的に登山のスキルを高め、山の楽しみ方を増やしていく。

(2)宿泊施設の高付加価値化の方向性

○山小屋を支える仕組みの構築

- ・山小屋は、山岳エリアの利用を支える役割を担っているが、その持続的なサービスを提供については、社会的・経済的な課題が大きい。そのため、高付加価値な利用を検討する前提として、まずは山小屋を支える仕組みの構築が必要であり、別途行っている山小屋のあり方検討等とあわせて、山小屋を支える取組を進めていく。

○山小屋らしい高付加価値利用の提案

- ・「登山を経なければ味わうことのできない体験」や「誰もが等しく自らの力で歩いて登るという体験」はこの山域が提供し続けてきた普遍的な価値であり、この価値に根差した山岳エリアの高付加価値な利用のあり方を検討することが重要である。この地の価値を棄損することがないように、山小屋として守るべきこと、高めていくべきことに留意しつつ、以下のような取組の実施に向けた検討を進める。

【利用の高付加価値化に向けた取組アイデア（例）】

- * 個室化などパーソナルスペースの拡充
- * シャワー導入（万全の排水対策、小規模水循環システムの導入等）
- * 滞在型（連泊）利用：小屋周辺の散策、アフタヌーンティーの提供等
- * ポーターによる荷物の運搬
- * 山小屋文化体験ツアー（小屋での講話、登山道整備体験、バックヤード案内等）
- * ヘリによる山岳部ツアー（高単価ツアーで収益の一部が寄付等で登山道維持や遭難救助等の山岳エリアの環境保全と適正利用の取組に充てる仕組み）の検討

（３）利用の高付加価値化に向けた取組

○我が国を代表する山岳エリアに相応しい利用のレギュレーションの設定による山岳利用の上質化

- ・ 本地域の価値は準備無しでは体験することが出来ないことから、安全登山や持続的な利用に必要な事項を利用者の責務として明確化したレギュレーション設定について下記事項等を検討する。

【利用のレギュレーションに関する検討事項（案）】

- * 入山時のレクチャー（地域の価値、特別な場所に入る利用者の責務やルールに関するインフォメーション）
- * 登山者の事前登録制
- * 山岳エリアの情報の集約・発信の一元化
- * 入域料等の導入による山岳エリアの保全管理の充実

○槍・穂高周辺の山岳エリアに精通したガイドとの連携による感動と学びの体験の充実

- ・ 圧倒的な大風景の背景にある山々の成り立ちや登山の歴史等を知ることは、より深い体験を促し満足度を高めることにつながることから、本地域に精通したガイドの利用を促進する仕組みを構築する。

乗鞍高原

■価値・特徴

乗鞍高原は、乗鞍岳東麓に広がる標高 1,200～1,800m の広大な高原である。自然と人との関わりから生まれた草原的景観や溶岩台地の末端から流れ落ちる瀑布が特徴的で、四季折々に楽しめるアクティビティの数々を提供している。

拠点内には 70 軒近い旅館・ペンション等が立地しており、温泉地としても知られる。

(1)乗鞍岳山麓の高原の自然

乗鞍岳から東麓に流出した熔岩によって形成された東西に細長い山麓高原である。乗鞍岳を源流とする大野川が谷を刻みながら流れ、三本滝、善五郎の滝、番所大滝は乗鞍三大名滝とされる。

概ね標高 1,700m 以上のエリアでは亜高山帯針葉樹林が見られる一方、高原エリアでは、シラカンバ、ミズナラ等の落葉広葉樹林や放牧のための草原が広がるなど、二次的自然の風景を中心に湿原・池沼が点在している。春の新緑とミズバショウ、夏のレンゲツツジ、秋の紅葉、冬の雪原と、四季折々の様々な風景を見られる。



善五郎の滝

(2)人々の営みと自然が作り出した高原の風景

乗鞍高原には縄文時代から人が住んでいたとされ、近世は林業・製炭業、近代はソバ栽培や林業、酪農などが行われてきた。

このような土地利用の変遷の歴史の中で、人と自然が関わり合いながら、シラカンバ林に囲まれた半自然草原という独特の風景が形成され、これらの二次的自然域が多種多様な動植物の生息・生育場となっている。

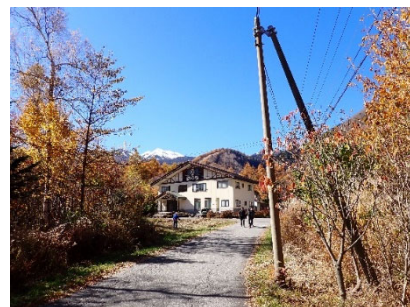


一の瀬の草原景観

(3)四季を通じて楽しめる多様なアクティビティ

夏は避暑地として、冬はウィンタースポーツの適地として古くから観光利用が進められ、スキーやサイクリング、トレッキング、スノーシュー、星空観察、シャワークライミングなど多様なアクティビティが展開されている。

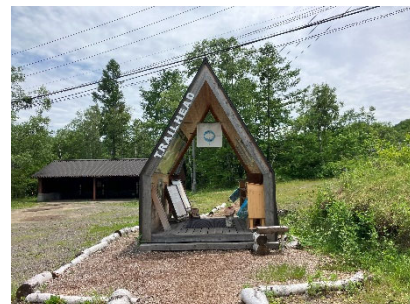
大正から昭和初期にかけて登山・スキー利用者向けの宿泊地としての民宿が始まり、現在は、ペンション・民宿等あわせて 70 軒近い宿泊施設が存在し、それぞれが個性を発揮して常連客に親しまれている。



ペンションと乗鞍岳遠望

(4)ゼロカーボンパーク第1号

令和3年に日本初のゼロカーボンパークとなっており、一の瀬における修景伐採と伐採木の循環利用、ハイキングやMTB利用を想定したモデルルートの設定、トレイル整備のための協力金の導入、旅行者に脱プラを体験してもらう給水スポットの設置等、脱炭素や保護と利用の好循環を目指した取組が行われている。



トレイルヘッド

■現況・課題

(1)利用状況

乗鞍高原は、鈴蘭地区中心部に立地する松本市乗鞍観光センターと近隣のバスターミナル・駐車場が利用・アクセスの拠点となっている。

乗鞍高原の利用者数は、平成26年以降、日帰り利用者数は約12万人前後で横ばい、宿泊利用者は約35万人から徐々に減少傾向で推移していたが、コロナ禍によって特に宿泊利用者が大幅に減少している。令和3年以降の利用者数は回復傾向にあり、令和5年の日帰り利用者数はコロナ前よりも増加した一方、宿泊利用者数は約20万人とコロナ前の水準に戻っていない状況にある。

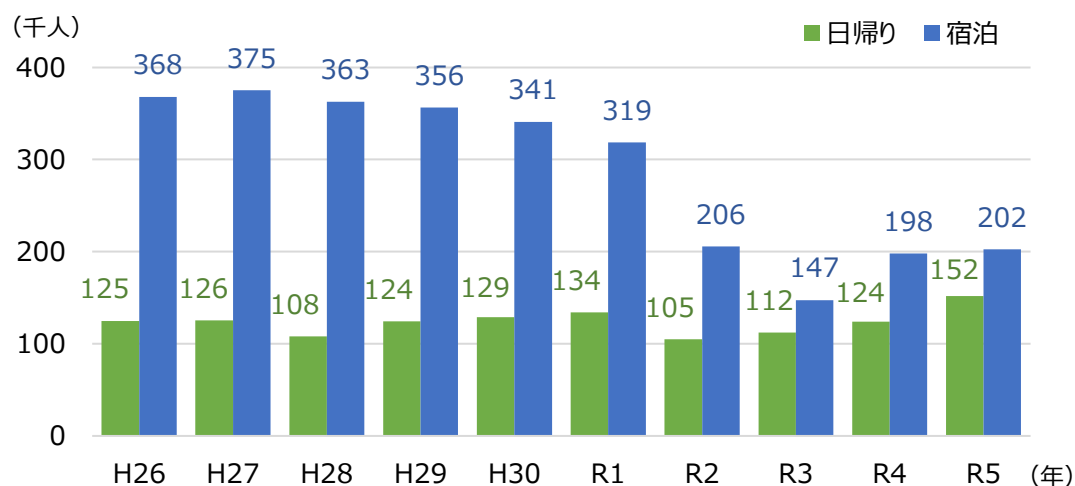


図 乗鞍高原の利用者数の推移（日帰り／宿泊別）

[出典] 長野県観光スポーツ部山岳高原観光課「観光地利用者統計調査」

月別の利用者数を見ると、7～10月の利用者数が多く、特に8月は年間を通じて最も利用者が多く、約10.6万人となっている。冬季は1～2月の利用が多いが、当該年度の積雪量によって利用者数の変動が大きいと推察される。

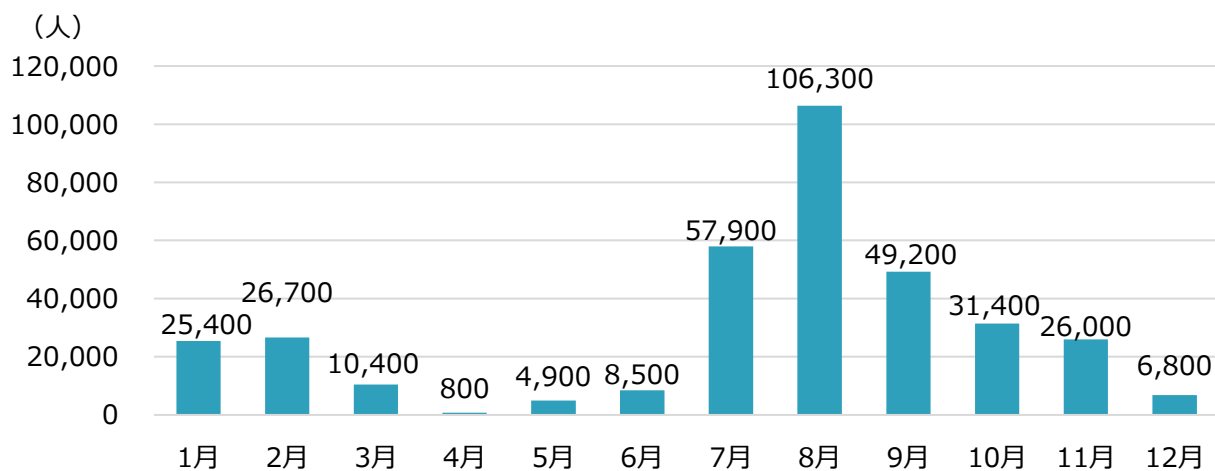


図 乗鞍高原の月別観光入込客数の推移（令和5年）

[出典] 松本市観光プロモーション課「松本市観光地延利用者数（観光入込客数）」

(2)社会状況

<のりくら高原ミライズに基づく地域の取組>

乗鞍高原では、多様な地域関係者の連携・協働をより一層進めるため、乗鞍高原の現状や課題、持続可能な地域づくりのあり方（目指すべき姿）、今後取り組むべき事項等を記載した地域ビジョンである「のりくら高原ミライズ」（令和3年3月、乗鞍高原ワーキング）を策定している。

のりくら高原ミライズでは、これまで培ってきた乗鞍高原らしさをいつまでも守り、後世へと引き継ぐべく、地域で共有する価値観として「自然を活かし、自然に生かされる、持続可能な暮らしづくり」を掲げ、4つの分科会（地域づくり分科会、草原再生・景観形成分科会、フィールド整備分科会、ワーケーション分科会）を設置し、「環境・暮らし・観光」の3要素を基盤とした持続可能な地域社会の形成に取り組んでいる。

<主要施設の老朽化と再整備に向けた検討>

乗鞍高原の中心部に位置する松本市乗鞍観光センターは、令和9年度中の供用開始を目指して「松本市乗鞍観光センター再整備基本構想・基本計画」（令和5年5月、松本市）が策定されている。同計画は老朽化した松本市乗鞍観光センターを観光案内・交流・バスターミナル施設として、周辺駐車場等と合わせ、建替え・整備を行うものであり、令和5年度に「松本市乗鞍観光センター周辺整備事業PPP/PFI導入可能性調査」を実施した結果、令和6年4月に従来方式にて事業を実施する方針が決定されている。

長野県乗鞍自然保護センターも老朽化が進行しているが、今後の再整備等の方針は未定である。

<移住促進に向けた取組>

新たな滞在の形として、ワーケーションやデュアルライフの取組が地域主体で進められており、拠点内の複数の宿泊施設において、ワーケーション・中長期滞在が可能となっている。

大野川小中学校では、令和5年度から新たな区域外就学制度「松本デュアルスクール」（保護者とともに松本市にお試し移住し、松本市の教育と住環境を体験することができる制度）が利用可能となり、令和5年度は5名の利用実績がある。

<人口減少と高齢化の進行>

大野川区町会では、人口・世帯数ともに減少傾向にあり、地域全体の過疎化が進行している。また、高齢化も進行しており、平成12年には18%であった高齢化率が、令和2年には46%にまで増加している。人口減少と高齢化は乗鞍高原特有の課題ではないが、8地区の中では最も顕著な傾向となっている。

令和5年9月に大野川区は地域住民と行政が一体となって積極的に移住者の受け込み支援を行う長野県移住モデル地区に認定され、三大首都圏で開催する移住セミナー等での紹介、長野県及び「楽園信州」のホームページでの地区の取組紹介等が行われている。

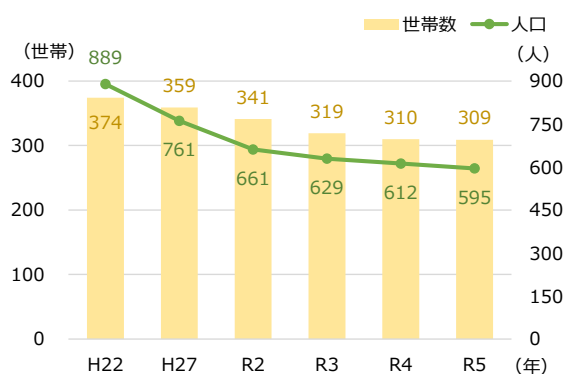


図 大野川区長会の世帯数及び人口推移

〔出典〕松本市統計資料

(3)利用施設・コンテンツ等

乗鞍高原における主要な利用施設・コンテンツ等は以下の通りである。

利用施設	松本市乗鞍観光センター（観光案内所、飲食施設含む）、長野県乗鞍自然保護センター、バスターミナル、駐車場、宿泊施設、トレッキング・マウンテンバイクトレイル等 ※宿泊施設：小規模な旅館、ペンション、民宿等約 70 軒
コンテンツ	・自然探勝、トレッキング ・自転車（サイクリング、マウンテンバイク、e-bike、ヒルクライム） ・スノーシュー、スキー・スノーボード ・星空観察 ・シャワークライミング ・ガストロノミー ・ワーケーション
地域で活動している方々	・大野川区 ・のりくら高原ミライズ分科会・プロジェクトチーム ・のりくら観光協会 ・ガイド・アクティビティ事業者、宿泊事業者 など多数 ※過去には乗鞍マイスターとして地域の人々を紹介する企画が行われたこともある。

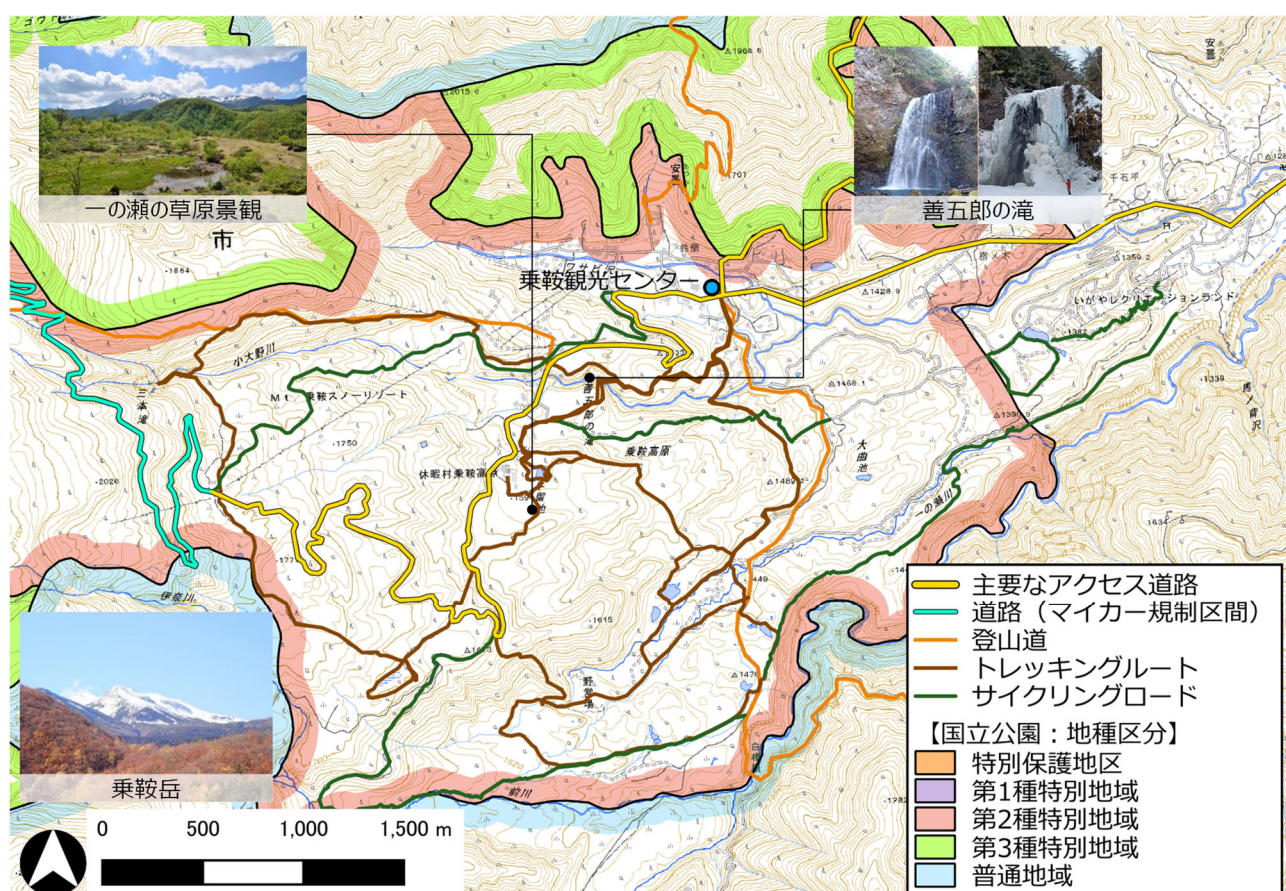


図 利用施設等位置図（乗鞍高原）

(4)課題

<宿泊施設の課題>

地域内には100軒近い民宿・ペンションが立地しているが、宿泊施設の種類や価格帯の幅が狭く（1万～1万5千円程度）、利用者にとって選択肢が少ない状況にある。

また、地域全体の高齢化の進行に伴い、宿泊施設のオーナーの高齢化も進んでおり、素泊まりのみの宿泊施設が増えている。松本市では、乗鞍高原におけるゼロカーボンパークの取組を推進するため、「松本市乗鞍地域温暖化対策設備設置補助金事業」を実施しており、補助事業による再エネ・省エネ設備の導入促進の取組が進められているが、実際の導入には一定の安定的な経営が必要となる。

今後、事業承継が難しく廃業する宿泊施設がさらに増加する可能性が懸念される。

<観光地としての課題>

拠点内に民宿・ペンションは多数立地しているものの、複数日滞在する利用者を対象とした飲食サービス（昼食を提供する飲食店や行動食を販売する商店等）が十分とはいえない状況にあり、泊食分離が課題となっている。

乗鞍岳にバスで日帰りでアクセスできることが魅力である一方、乗鞍高原での宿泊につながらないというジレンマがある。二次交通に関しては、松本市街地から乗鞍高原へのバスの本数が通年で固定化されており、交通事業者の採算性の面から繁閑に応じたダイヤ変更や増便が難しい状況にある。

また、乗鞍高原は、夏のアウトドアや冬のスノーアクティビティをはじめとして、自然資源を核とした観光地であるため、利用者数が台風や冬季の積雪量などの天候に大きく左右される。

観光地としてのPR・情報発信等はのりくら観光協会主導で行われているが、観光協会の専従スタッフはおらず、宿泊事業者が兼務しているため、マンパワー不足によって、旅マエ・旅ナカの情報発信に十分に対応できていない状況にある。そのため、地域のコーディネーター役を担う人材の確保が求められている。

<地域コミュニティの存続に当たっての課題>

地域としては、大野川小中学校の存続や高齢化に伴う交通弱者や冬の雪下ろしへの対応等、コミュニティの維持が課題となっている。

課題解決を目指し、地域ではワーケーション等による移住促進に取り組んでいる一方、移住希望者にとって、職住一体型の宿泊施設は建物規模が大きく、冬の暖房費等の光熱費や維持費もかかるため購入のハードルが高いという状況もある。

また、放牧の終了などの生活・産業の変化もあり、乗鞍高原らしい草原景観の維持も課題となっている。

■磨き上げの方向性（理想の姿）

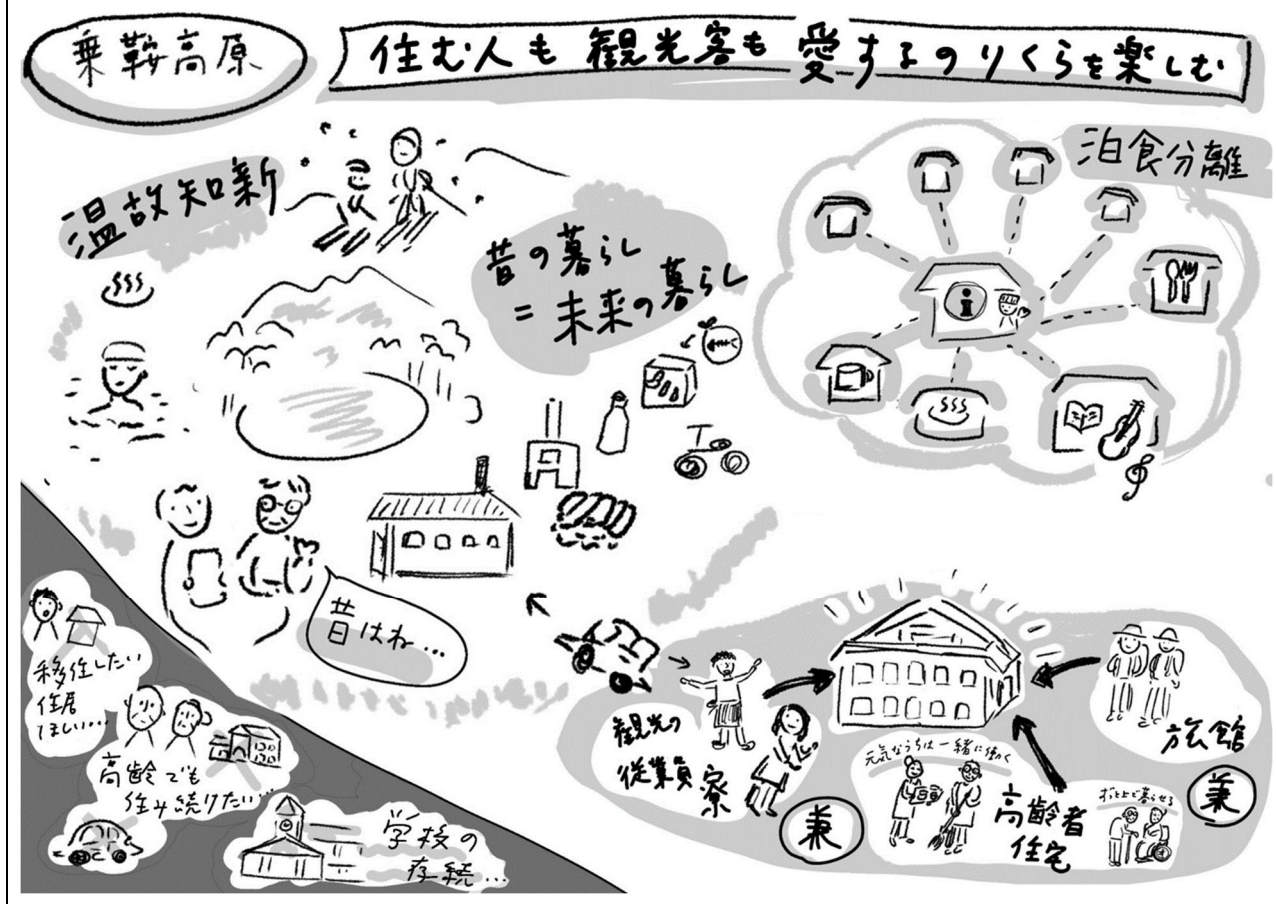
乗鞍高原を愛する人々とともに、温故知新×サステナブルな滞在を満喫する拠点

～乗鞍高原の楽しみ方は無限大！四季折々の自然と人がつながる豊かな暮らしがここにある～

乗鞍高原は、自然を活かし、自然に生かされながら、かつては杣の村として生活を営み、学生村やスキー、温泉や山岳観光など、時代の変遷に合わせて多くの利用者を受け入れてきた経緯を踏まえ、「人と自然が共生する山岳観光地」として、乗鞍高原を愛する人々が豊かに暮らし、手入れの行き届いた自然の中で、乗鞍高原の魅力に共感して訪れる利用者に、上質なアクティビティや地域素材を活かした食事、温泉を提供する。

乗鞍高原らしいサステナブルな滞在体験を通じて、乗鞍高原の暮らしに共感する人を増やし、乗鞍高原に関わる人、住む人、働く人を増やし、地域課題の解決を目指す。

<磨き上げの方向性（理想の姿）のイメージ>



(1)望まれる体験・過ごし方

○四季折々の自然の中でアクティビティを楽しむ（子どもから大人まで、初心者も上級者も）

- ・トレッキング、自転車、シャワークライミング、スキー、スノーシュー、アウトドアサウナなど、乗鞍高原の自然を最大限に生かしたアクティビティを楽しむ。
- ・アウトドア初心者は自然との付き合い方を学び、上級者は自分のペースで自由に楽しむ。

○自然の中でのびのびと自由に過ごす（ファミリー層、ワーケーション・二拠点生活をする人）

- ・親子で自然の中でのんびり過ごす、自然に囲まれた空間で仕事に集中する、音楽やアートなどの創作活動に取り組む、自然をフィールドに研究活動をするなど、都会では得難い時間を過ごす。

○自然とともに生きる乗鞍高原の人々とふれあい、人と自然との関係性に気づく（都会の人もインバウンドも）

- ・地域の方々とふれあいを通じて、先人が培ってきた自然と密接に関わる暮らしの知恵を学ぶなど、人と自然がつながる豊かな暮らしを体験する。

○のりくら高原ミライズのビジョンに共感し、乗鞍高原の持続可能な地域づくりにともに取り組む

- ・乗鞍高原ゼロカーボンラボラトリー（以下「乗鞍ゼロラボ」という。）などの地域の取組に参加し、滞在を通じて一緒に地域の課題解決に取り組む。

(2)宿泊施設の高付加価値化の方向性

○のりくら高原ミライズのビジョンに共感し、乗鞍高原らしさを体現する宿泊施設

- ・乗鞍高原らしい風景が感じられる立地に宿泊施設を配置し、乗鞍ゼロラボやのりくら高原トレイルズなど、乗鞍高原の人々とともに取り組む持続可能な地域づくりの体験をセットとすることで知的好奇心旺盛な利用者層をターゲットとした宿泊施設を検討する。
- ・乗鞍高原らしいサステナブルな滞在体験（＝自分と向き合い、自分を見つめ直せる機会）を提供し、自然とともに生きる乗鞍高原の暮らし（住まう価値）に共感する人を増やし、将来的には乗鞍高原に関わる人、住む人、働く人を増やすことを目指す。

○地域の課題解決にともに取り組む宿泊施設

- ・宿泊施設単体ではなく、移住希望者の住宅不足や大野川小中学校の存続、高齢化による交通弱者問題など、地域課題の解決とセットで宿泊施設のあり方を検討する。
- ・例えば、空き家や事業承継が難しい宿泊施設等をリノベーションによって小規模・分散型の宿泊施設とし、既存の宿泊施設も含めて、特定のアクティビティやアートなどのテーマ設定のもとに旅行者が集う場とするなど、宿泊施設それぞれの個性のさらなる発揮を目指す。

(3)利用の高付加価値化に向けた取組

○旅行者と地域をつなぐコーディネーター機能・情報発信機能の充実

- ・松本市乗鞍観光センター等の拠点施設に宿泊施設のチェックイン機能を持たせ、地域内の宿泊施設の受付とアクティビティ等の予約窓口の一括対応や観光情報を発信することで、地域の事業者と旅行者をつなぐ仕組みの構築を検討する。

○泊食分離に対応する飲食施設の提供

- ・新しい宿泊施設が地域の宿泊施設の食事提供を一体的に担うことで、既存事業者の負担を軽減するなど、飲食サービス充実のための取組を検討する。

乗鞍岳

■価値・特徴

乗鞍岳は標高 3,026m の剣ヶ峰を主峰とする火山群であり、山頂部一帯には火山地形・火口湖とハイマツや高山植物のお花畑が織りなす優れた高山風景が形成され、ライチョウの生息地としても知られる。

日本一標高の高い車道である乗鞍エコーラインや乗鞍スカイライン（観光ルート名称「乗鞍ライチョウルート」）を利用して、標高 2,702m の乗鞍岳畳平バスターミナルまでバス等によるアクセスが可能である。

ヒルクライム利用の歴史も長く、サイクリストの聖地とも呼ばれている。

(1)標高 3,000m の火山と高山帯の風景

乗鞍岳は標高 3,026m の剣ヶ峰を主峰とする火山群であり、山頂部一帯には火山活動の痕跡である火口壁や火口丘、火口湖がみられる他、権現池や五ノ池などの火口湖が点在し、ハイマツや高山植物群落と相まって極めて優れた景観を呈している。

また、高山の限られた地域でしか見られないライチョウが生息している。



鶴ヶ池

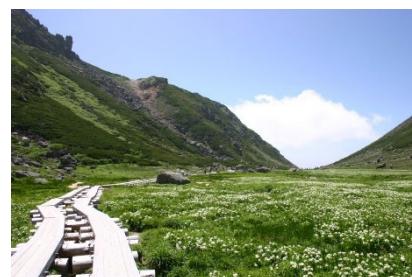
[出典]飛騨乗鞍観光協会ウェブサイト

(2)日本一標高の高い山岳道路によって実現する 3,000m 級の登山や散策利用

乗鞍岳は長野県と岐阜県の県境に位置し、長野県側は乗鞍エコーライン、岐阜側は乗鞍スカイラインが接続しており、バス停「標高 2716m」は、車で到達可能な日本最高所である。

乗鞍岳を構成する剣ヶ峰などの火山群では登山利用が行われているが、畳平周辺には散策路が整備されており、登山を伴わなくとも、火山地形や高山植物のお花畑等からなる 3,000m 級の高山の風景を味わうことができる。

また、公共交通機関でアクセス可能な立地を生かした「ライチョウ観察ガイドツアー」が行われている。



高山植物のお花畑と散策路

[出典]飛騨乗鞍観光協会ウェブサイト

(3)高山の地形・気候を活かしたアクティビティの展開

長野県・岐阜県の双方から畳平を経て一気通貫で観光できる「乗鞍ライチョウルート」が設定されており、ヒルクライムのフィールド・聖地となっている。

GW 頃にはバスにより雪の回廊（雪の壁）を楽しむことができるほか、乗鞍大雪渓は 8 月頃までスキー・スノーボードのフィールドとなるなど、高山の気候を活かしたアクティビティが楽しめる。

また、畳平に宿泊することで、ご来光や高標高の澄んだ空気ならではの満天の星空を望むことができる。



ヒルクライム

[出典]飛騨乗鞍観光協会ウェブサイト

■現況・課題

(1)利用状況

乗鞍岳の利用者数は、平成26年度で約13万人であったが、減少傾向にあり、令和元年には約10万人にまで減少している。

コロナ禍の令和2年に年間約1万人にまで減少した後は回復傾向が見られ、令和4年度の利用者数は約6.5万人となっている。

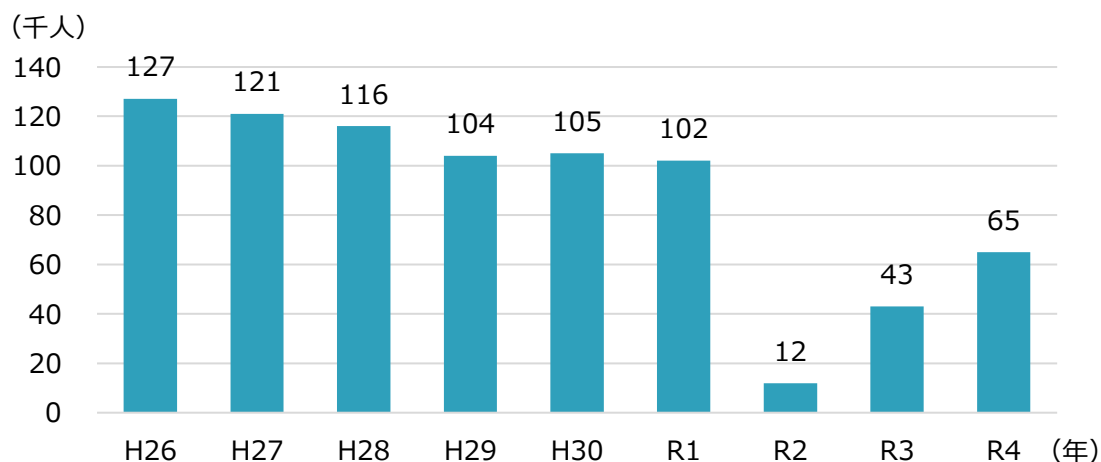


図 乗鞍鶴ヶ池集団施設地区利用者数の推移

[出典] 環境省自然環境局「自然公園等利用者数調（令和4年）」

(2)社会状況

<マイカー規制と乗鞍環境保全税>

平成15年からマイカー規制が行われており、岐阜県では同年に乗鞍環境保全税（法定外目的税）を導入し乗鞍鶴ヶ池駐車場の自動車運転者に対し利用ごとに課税している。税収は乗鞍環境自然保護員活動等の環境保全事業に使用されており、マイカー規制開始以降は、高山植物やライチョウの生息環境が回復していると言われる。利用者数の減少に伴う税収の減少は、環境保全事業の活動原資の不足につながっている。

<道路・施設等の状況>

乗鞍エコーラインの通行期間は7月上旬から10月末まで、乗鞍スカイラインの通行期間は5月中旬から10月末までで、同じくマイカー規制が行われている上高地に比べて開山期間が短い。

令和4年9月に乗鞍スカイラインの一部区間が崩落し、長らく通行止めとなっていたが、令和6年8月に仮設道路が完成・開通した。現在、令和9年度の迂回ルートの完成を目指して工事が開始されている。

自然科学研究機構 乗鞍観測所（以下「コロナ観測所」という。）は令和6年度から取り壊しが行われている。

<乗鞍岳統一プロモーション BBPT>

県境を越えて各種利用推進事業を具体化していくため、関係者一同が会して情報共有・意見交換を行う場として、令和3年に「乗鞍岳 Beyond Border Project Team」（以下「乗鞍岳 BBPT」という。）が設立され、以降定期的に開催されている。同会議体には今年度より「乗鞍岳ライチョウ 保護と利用の好循環を生み出すための検討会議」も合流し、保護と利用の好循環に向けた一層の取組が期待される。

また、岐阜県側では、岐阜県中部山岳国立公園活性化協議会において、乗鞍岳を中心としたエコツーリズム推進全体構想をはじめ、奥飛騨ビジターセンターを拠点に、自然環境保全の取組のもと、観光・体験・保養・学習・研究などを総合的に楽しむ取組が進められている。

<ライチョウの保護と利用>

環境省では平成24年からライチョウの保護増殖事業を開始し、現在、「第二期ライチョウ保護増殖事業実施計画」に基づき、令和2年度から5年計画でライチョウの保全に取り組んでいる。乗鞍岳はライチョウの一大生息地であることから、保護増殖事業の重要な拠点となっている。

利用者にとってライチョウ観察は魅力である一方、観察等によるライチョウへの接触が過剰となりすぎることでライチョウの繁殖活動等に悪影響を及ぼすおそれがある。そのような状況の改善に資するものとして、ライチョウ観察のルールやマナーの明文化とともに、山岳ガイド等がライチョウ観察を主体としたツアーを実施するきっかけになることを目指し、令和2年10月に（一社）日本アルプスガイドセンターと共同で「ライチョウ観察ルールハンドブック」が作成されている。

乗鞍岳ではガイド養成研修が行われており、研修を受講したライチョウガイドによる「ライチョウ観察ガイドツアー（参加費にはライチョウ保全費も含まれる）」が開催されるなど、保護と利用の好循環を目指した取組が進められている。

<乗鞍岳登山の今後のあり方>

山麓の乗鞍高原では、令和2年から年に数回の登山道整備講習会を経て、地元有志によって乗鞍山守隊が結成され、登山道の実踏調査や近自然工法による登山道整備といった活動が行われている。

また、長野県側の4つの山小屋（乗鞍岳頂上小屋、乗鞍岳肩ノ小屋、位ヶ原山荘、冷泉小屋）では、令和6年8月末から北アルプストレイルプログラムを導入し、協力金収受箱の設置等を開始しており、岐阜県側に位置する畳平周辺については、今後、地域関係者との調整を行い本格導入に向けた準備を図ることとなっている。

近年、乗鞍岳では畳平からの登山利用が主流であり、岳人入門の山として利用者に親しまれているが、上記のような取組を背景に、山麓からの乗鞍岳登山が再評価される可能性が期待される。

(3)利用施設・コンテンツ等

乗鞍岳における主要な利用施設・コンテンツ等は以下の通りである。

利用施設	道路、歩道、宿泊施設、山小屋等 ※宿泊施設：旅館2軒、山小屋4軒（うち1軒は宿泊利用不可）
コンテンツ	・登山 ・自然探勝 ・散策（畳平周辺） ・自然観察（高山植物、ライチョウなど高山ならではの動植物の観察） ・自転車（ヒルクライム、e-bike 含む） ・雪の回廊・雪の壁・春スキー ・星空観察 ・ご来光鑑賞
地域で活動している方々	・飛騨乗鞍観光協会 ・乗鞍観光協議会 ・宿泊事業者（銀嶺荘、白雲荘など） ・交通事業者（アルピコ交通、濃飛バス）など



図 利用施設等位置図（乗鞍岳）

(4)課題

<自然保護を前提とした適正な利用>

乗鞍スカイライン通行止めの影響及び観光スタイルの変化による団体利用の減少によって、乗鞍岳の利用者数は長期的に見て減少傾向にあり、乗鞍岳の山頂エリアの施設の運営は厳しい状況にある。

一方、乗鞍岳には、麓の平湯温泉や乗鞍高原との連携、岐阜県側・長野県側と一気通貫での利用を確立することで本地域の階層的な風景の変化の体感と滞在日数の増加につなげられる可能性がある。

現在も標高 3,000m 級の高山ならではの風景、気候、地形とアクセス性を活かした様々なアクティビティが行われているが、今後も高山の脆弱な環境の保全・維持を前提として、適正な利用を推進していく必要がある。

新たに宿泊施設を整備する場合、食事の提供（特に水の提供）が大きな課題であるとともに、開山期間が短いことから、宿泊事業者にとって採算性が厳しい地域であることが想定される。

<マイカー規制の取り扱い>

乗鞍岳では、自動車利用の適正化を図るため、長野県側では「乗鞍岳自動車利用適正化連絡協議会」、岐阜県側では「乗鞍自動車利用適正化協議会」を設立し、マイカー規制を実施しており、乗鞍自動車利用適正化協議会（岐阜県）では、乗鞍スカイラインにおいて EV レンタカー実証実験を実施していたが、開山期間が短い、EV レンタルの拠点を地元で用意できない等の理由でレンタカー業者の採算が合わず撤退した経緯がある。一方、交通事業者からは、物流の 2024 年問題の影響でバスの運行計画に支障が出る可能性について指摘されている。

そのような状況を背景に、地域からは車で特別に乗鞍スカイライン・乗鞍エコーラインを通行できることには価値があることから、EV に限定してマイカー規制を解除し、平日限定かつ高い料金を設定することで、その収益を除雪費等に充当できないかといった意見が出ている。

なお、乗鞍スカイライン及び乗鞍エコーラインは世界に誇る日本一の山岳道路であり、地域関係者からは、この山岳道路を自ら車で運転することで得られる爽快感や達成感、バスやタクシーによるアクセスでは体験し得ないものであるとの意見もある。

■磨き上げの方向性（理想の姿）

アクセス性の高い 3,000m 級の高山帯における唯一無二の感動体験の提供

～子どもから高齢者まで誰でも自分の体力や好みのスタイルで雄大な自然を満喫しよう～

日本一標高の高い山岳道路という乗鞍岳ならではの特性を活かし、今後も自然環境の保全を大前提としつつ、子どもから高齢者まで幅広い層を受け入れながら、散策や自然観察、春山スキーやヒルクライム、3,000m級の登山など、利用者の体力や好みに応じて、乗鞍岳でしかできない貴重な自然体験を提供する。

さらに、絶好のロケーションを活かした宿泊施設について検討を行い、3,000m 級の山岳地帯における特別な滞在体験の提供を目指す。利用の高付加価値化によって得られた収益を自然保護へ還元することで、保護と利用の好循環に貢献していく。

<磨き上げの方向性（理想の姿）のイメージ>



(1)望まれる体験・過ごし方

○乗鞍岳登山にチャレンジする（登山初心者から上級者まで）

- ・乗鞍岳は比較的気軽に高山を楽しめる日本一優しい3,000m級の山としての特性を活かし、子どもも体力に自信がない人も、初心者から上級者まで、自分のレベルに合わせて3,000m級の登山に挑戦する。

○期間限定の春山観光を楽しむ（一般観光客、春山スキーを楽しみたい人）

- ・開山期間が短い乗鞍岳におけるさらに特別な体験として、雪の回廊や春山スキーを楽しむ。

○ご来光や満天の星空を堪能する（乗鞍岳での滞在を楽しみたい人）

- ・乗鞍岳に宿泊した人だけの特権であるご来光や星空観賞を堪能する。
- ・夏季はご来光バス（早朝バス）で、美しいご来光や雲海を眺める。

○e-bikeで乗鞍ヒルクライムに挑戦する（アクティビティを楽しみたい人）

- ・乗鞍岳はヒルクライムの聖地として知られていることから、自転車だけではなく、体力に自信のない方もe-bikeでヒルクライムに挑戦する。

○ライチョウやお花畑など高山帯に生息する動植物を見て、自然環境保全について学ぶ

（自然への興味・関心が深い人）

- ・乗鞍畳平は高山植物の宝庫であるため、自然観察によってその魅力を楽しむとともに、ライチョウの保護活動等の生物多様性保全についても学びを深める。

○高所トレーニングに取り組んだり、健康増進プログラムに参加する

（スポーツのトレーニングをしたい人、健康づくりに関心のある人）

- ・乗鞍岳ではオリンピック出場選手がトレーニングを行った実績があることから、高標高の立地を活かした高所トレーニングに取り組み、鍛錬する。
- ・健康増進プログラムに参加して、美しい自然の中で体を動かす。

(2)宿泊施設の高付加価値化の方向性

○絶好のロケーションに立地する完全オフグリッド・トレーラーハウス型の宿泊施設

- ・トレーラーハウス型かつ完全オフグリッドの宿泊施設とすることで、自然を極力傷つけず、より絶景を楽しめるポイントでの宿泊体験を提供する。
- ・その際、乗鞍岳では通年営業が困難であることから、例えば冬季は他地区のロケーションのよい場所にトレーラーハウス型の宿泊施設を移動することも検討する。
- ・また、食事の提供などの宿泊施設のオペレーションの一部を既存の宿泊施設と一体的に実施することで、地域に裨益する事業スキームであることが望ましい。
- ・トレーラーハウス自体も完全オフグリッドでありつつ、内装や調度品にこだわり、特別な空間を演出できるとよい。また、サウナなど宿泊を最大限楽しめるような仕掛けでさらに付加価値を高めることが望まれる。

○3,000m級の山岳地帯での特別な滞在体験の提供

- ・360度のパノラマに広がる満天の星空、大海原のように広がる雲海など、宿泊者限定の特別な体験は唯一無二の価値。この価値を高める宿泊施設の上質化やアクティビティをセットにした宿泊体験を提供する。

○高山帯として特段の環境配慮がなされた宿泊施設の整備

- ・新たに宿泊施設を整備する場合、眺望や景観を損なわないこと、生物多様性に影響を及ぼさないこと、電気・水等のインフラについても再エネ利用や循環型を大前提とする。

(3)利用の高付加価値化に向けた取組

○観光バス以外のアクセス方法の導入・拡大（マイカー規制の限定解除）

- ・旅行スタイルの多様化に応じて、例えば、排気ガスを排出しない EV での乗鞍岳への乗り入れなど自然環境に配慮した形での観光バス以外のアクセス方法の導入・拡大について研究する。
- ・なお、乗鞍岳におけるマイカー規制は、道路交通法に基づき車種の別なく一律に規制が行われていることから、乗鞍岳自動車利用適正化連絡協議会（長野県）及び乗鞍自動車利用適正化協議会（岐阜県）において議論を重ねた上で、公安委員会及び道路管理者との協議が必要となる。

○収益を自然保護や維持管理に還元する仕組みづくり

- ・高付加価値な利用で得られた収益を自然保護や維持管理に還元し、保護と利用の好循環を図る。

白骨温泉

■価値・特徴

白骨温泉は、梓川支流の険しい谷の奥深くに位置し、古くから文人墨客にも愛された温泉保養地である。特徴的な地質に由来するカルシウム質が豊富な泉質で知られており、谷のそこかしこに特別天然記念物に指定されている噴湯丘や球状石灰石等を見ることができる。

白骨温泉を取り巻く自然環境は、ブナ、ミズナラ、トチノキ、サワグルミ等の落葉広葉樹林を主体とし、梓川及び湯川が急峻な溪谷美を構成している。

(1)長い歴史・文化を持つ湯治場

白骨温泉は湯治場として発祥し、600年の歴史を持つと言われる温泉である。その長い歴史においては多くの文人墨客が滞在したことから、数多くの紀行文や歌が残されている。また、かつては乗鞍岳を目指す学校登山の宿泊地とされていたこともある。

現在使用されている源泉は17源泉といわれており、そのほとんどが自噴泉で、温泉宿には宿ごとに異なる温泉の質に由来した色とりどりの「湯号」がついているなど、豊富な湯量を誇るとともに、飲泉や温泉粥等の多様な温泉体験を提供している。



カルシウム質豊富な温泉



飲泉所

(2)石灰岩の基盤が生んだ特別天然記念物や特異な植生

白骨温泉が誇る多様な湯は、温泉一帯の台地に石灰岩（炭酸カルシウム）が分布することに由来し、この石灰岩が乳白色の温泉水や、「隧通し（ついとおし）」と呼ばれる天然のトンネルなどの景観を作り出している。

温泉現象によって形成された噴湯丘と、球状の形を呈する方解石である球状石灰石は、全国的に見て希少で、学術的価値が高いことから、国の特別天然記念物に指定されている。

石灰岩地特有の植物（アオチャセンシダ、イワウサギシダ、トガクシデンダ等）も分布しており、これらは中部山岳国立公園の指定植物となっている。



白骨温泉の噴湯丘

(3)地域が一体となったまちづくりの実施

長い歴史の中で、温泉と自然環境との調和、その中に点在する特別天然記念物の保護等、国立公園内の温泉施設として、白骨温泉では、周囲の自然環境に配慮した施設整備（宿泊施設、道路整備等）が行われている。

この他、白骨の歴史や温泉地らしい景観創出のために協議を行う「白骨温泉まちづくり委員会」、CO₂排出量の削減を進める「白骨温泉「地域エコ・小」プロジェクト」などが立ち上がるなど、地域が一体となったまちづくりが進められている。

■現況・課題

(1)利用状況

白骨温泉の利用者数は、令和元年以前は年間20～26万人で推移していたが、コロナ禍の影響により15万人以下に減少したものの、徐々に回復傾向にある。

利用者の約9割が宿泊利用者であり、日帰り利用者は約1割程度である。日帰り利用者についてはコロナ禍による影響はほとんど見られなかった。

また、月別の利用者数を見ると、最も利用が多い月は8月で、次いで10月、5月と大型連休や紅葉シーズンに利用者が増える傾向にある。なお、冬季の12月～4月にも7,500～10,000人程度の利用がある点は白骨温泉の特徴である。

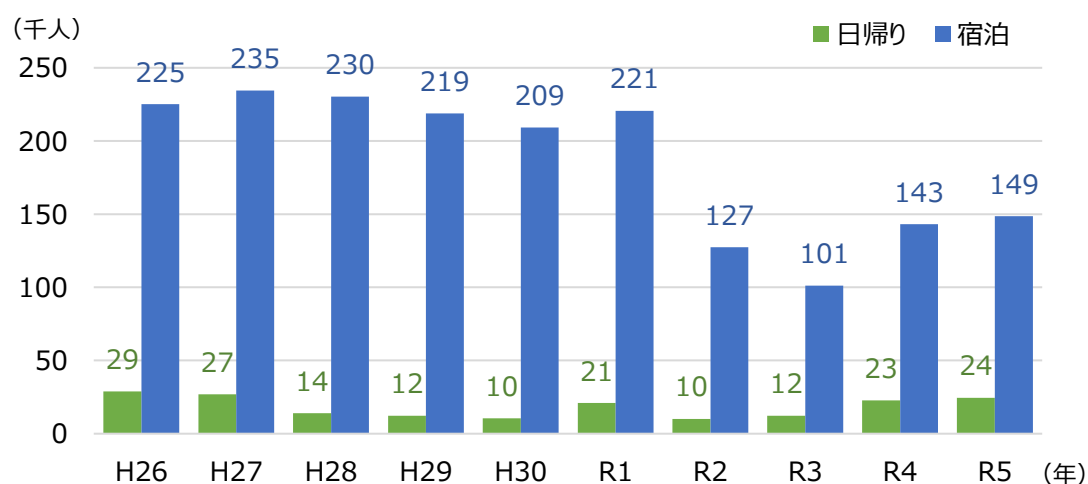


図 白骨温泉利用者数の推移（日帰り／宿泊別）

[出典] 長野県観光スポーツ部山岳高原観光課「観光地利用者統計調査」

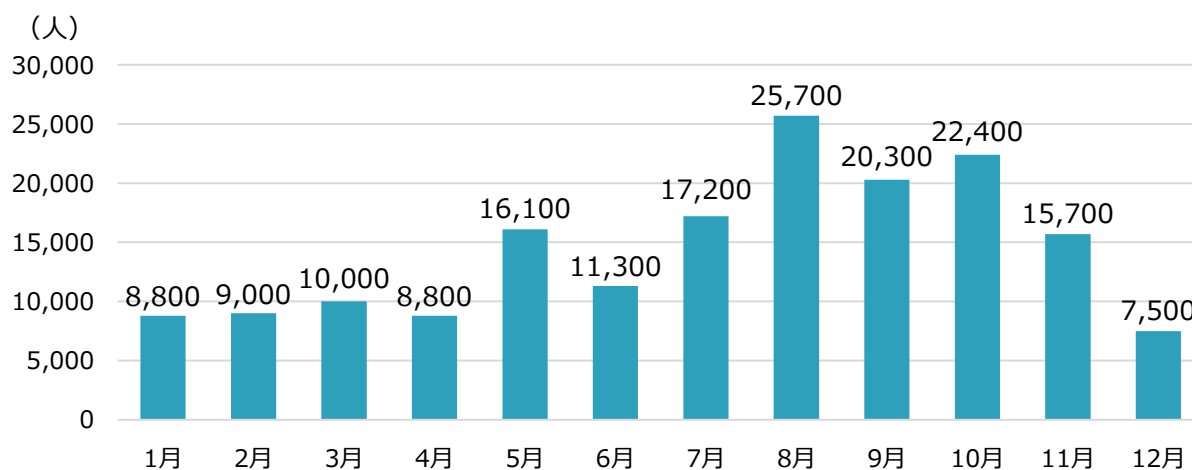


図 白骨温泉の月別観光入込客数の推移（令和5年）

[出典] 松本市観光プロモーション課「松本市観光地延利用者数（観光入込客数）」

(2)社会状況

<白骨温泉をめぐるまちづくりの計画>

「白骨温泉国民保養温泉地計画書」（令和2年9月、環境省）には、基本方針として、「①恵まれた自然環境を大切にし、人との調和を図る」、「②限りある資源である温泉を守り、地域の文化と伝統を後世まで伝える」、「③温泉地を訪れる人々に安らぎとくつろぎのときを提供する」が掲げられ、自然環境と宿泊施設が調和したまちづくりの推進、特別天然記念物の保存のための取組、温泉資源保護の推進、温泉の公的利用の推進等の取組が進められている。

また、地域主導で作成された「白骨温泉まちづくり委員会事業推進計画」（令和2年2月、白骨温泉まちづくり委員会）のビジョンには、「いつまでも変わらない自然回帰の湯・白骨」が掲げられている。

<特別天然記念物の保存と活用>

「特別天然記念物白骨温泉の噴湯丘と球状石灰石保存活用計画」（令和2年3月、松本市教育委員会）には、日本有数の温泉地として観光による地域振興を図ることが記されており、地域関係者が主体となり、白骨温泉の特徴を利用した体験プログラム等を企画開発することにより、宿泊や入浴以外の楽しみ方を来訪者に提供することとされている。

<湯治場としての歴史を生かす来訪客の健康への貢献>

白骨温泉では、過去の学術調査等を通じて信州大学や松本市教育委員会とのつながりが構築されている。今後、連携を強化していくことで、エビデンスのある健康をテーマとした体験を充実させていくことが可能と考えられる。具体的な取組として、例えば、ドイツ発祥のクアオルト（心筋梗塞や狭心症のリハビリ、高血圧の治療法として、地形や冷気・風など気候の要素を活用したウォーキングを取り入れた気候性地形療法®であり、ドイツでは健康保険の適用対象となっている）の推進等が想定される。

<白骨温泉の人口動態>

白骨温泉がある松本市安曇白骨（旧安曇村白骨）の人口は減少傾向にあり、令和2年に100人未満となっている。また、20歳未満の比率が減少するとともに、高齢化率が高まり、令和2年には高齢化率は32%まで増加している。

(3)主な利用施設・コンテンツ等

白骨温泉における主要な利用施設・コンテンツ等は以下の通りである。

利用施設	・宿泊施設、日帰り湯、食事・土産物屋等 ※宿泊施設：旅館等 11 軒（うち 6 軒は日帰り湯営業あり）
コンテンツ	・温泉入浴 ※日帰り入浴あり ・温泉街散策 ・湯めぐり ・自然探勝（噴湯丘と球状石灰岩、竜神の滝、散策路） ・文化的資源（医王殿（薬師堂）、文学碑）の見学） ・胃腸病の湯治場としての歴史（日本初の飲泉カップ） ・温泉粥（温泉鍋）等
地域で活動している方々	・白骨温泉旅館組合 ・信州大学 ・リトルピークス（古道散策ツアーで連携）等

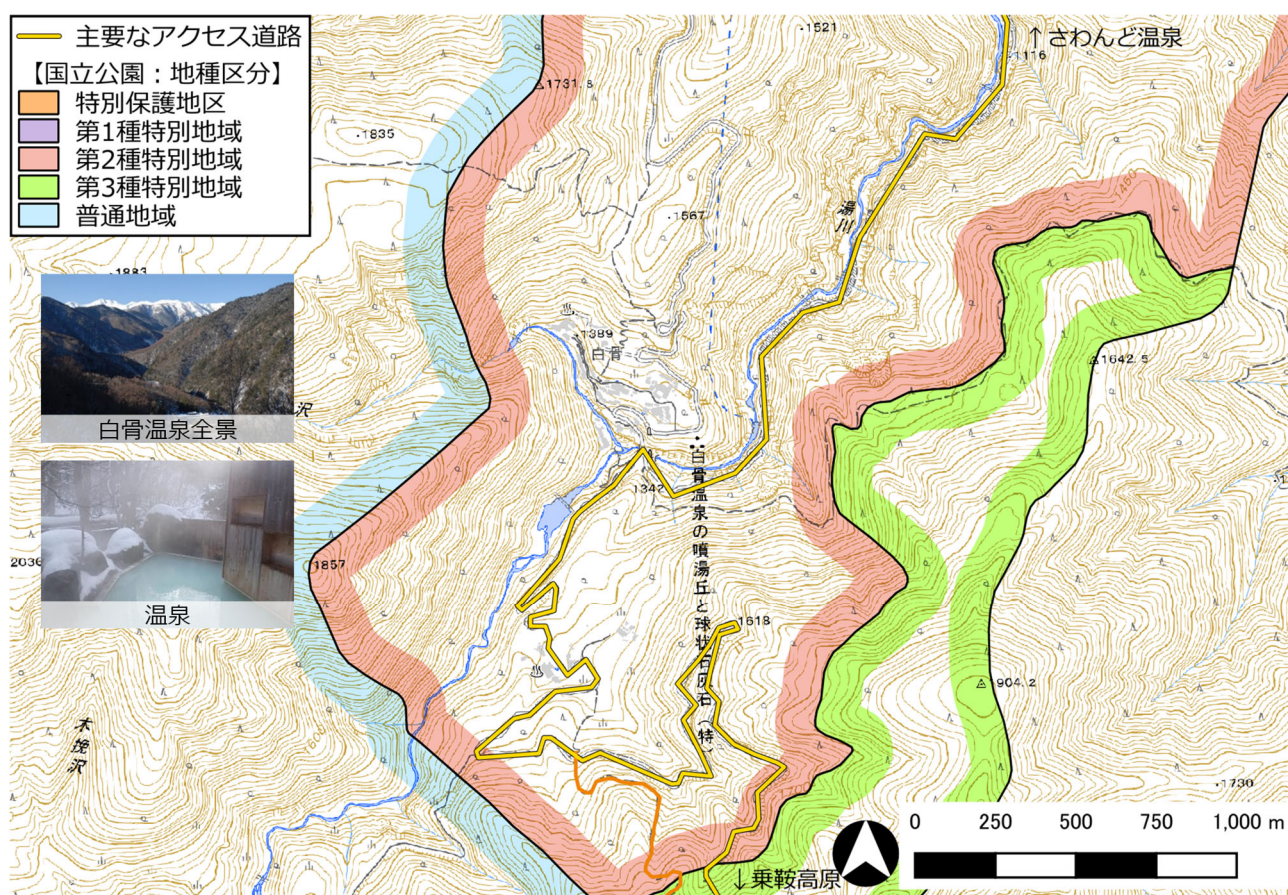


図 利用施設等位置図（白骨温泉）

(4)課題

<ソフト面の課題>

国内のみならず、本地域内にも温泉は数多くあることから、温泉地としての競合は多様化しており、他の温泉地との差別化が大きな課題となっている。そのため、今後は、交流人口や宿泊者の増加に向けて、宿泊者が参加できるアクティビティを増やし、連泊による滞在日数を増やすことが重要である。

一方、白骨温泉周辺には、長期滞在を促すことのできる資源のバリエーションが少なく、現状はアクティビティもほとんど実施されていないため、湯治場であった歴史、胃腸に効くと言われる泉質といった特徴を活かし、長期の滞在拠点としての機能強化や、滞在体験のバリエーションを持たせる等の対応が必要である。

温泉以外では、食に関するバリエーションが少ない、利用者が滞留できる足湯等の拠点や消費が生まれるキャッシュポイントが不足している等の課題があるが、特に地域の中心部に立地する野天風呂（現在は市管理）の活用が課題となっている。

<ハード面の課題>

長期滞在にふさわしい温泉街の景観形成に向けては、利用者が滞在したいと思える魅力的な景観形成が必要であり、そのため、まちの景観ガイドラインの設定等を検討する必要がある。

一方、限られた土地利用の中では、新たな遊歩道の整備や駐車場の整備が困難であることから、現況の資源を活用しながら、より効率的かつ多様な空間利用が求められる。

また、利用者にもわかりやすい、温泉街の正面（顔）となる景観形成が必要である。

<二次交通の確保>

白骨温泉は、乗鞍高原とさわんど温泉の間に位置しているが、立地の特性上、交通の便が良いとは言えない状況にある。これまでもそのアクセス性の難点をブランド化することで、秘湯として人気を集めてきたものの、本地域の周遊ルートとしては、現状選択されづらい状況にある。

一方、近年は利用者の高齢化や若者のライフスタイルの変化に伴い、自動車離れがみられるようになってきており、送迎サービスの合理化や、利用者に交通・アクセス手段の情報を確実に届ける必要性が高まっている。

交通事業者による増便対応も期待されるが、白骨温泉への送迎路線の採算性の確保が不確定であるため、対応が難しいとされている。

<受け入れ態勢の課題>

地域の少子高齢化、人口減少が進んでいることから、地域に誇りと愛着がわく事業ビジョンを策定し、地域が一体となることで、人手不足や若者の減少の課題解決につなげていく必要がある。

また、従業員の確保は、乗鞍高原との連携等、周辺地区と一体的に検討することも必要である。

■磨き上げの方向性（理想の姿）

「秘湯」を未来に継承し、自然の中で健康を取り戻す体験に富む滞在拠点
～ 日々をがんばるあなたに、いたわりの食と隠れ家を提供します ～

近隣農民の湯治場をルーツに、登山者の疲れを癒してきた温泉地、文人墨客の逗留地としての歴史を伝える、引き継ぐことを通じて高付加価値な滞在拠点としての維持・向上につなげる。

将来に向けて秘湯の雰囲気を持続し、利用者の健康づくり等、ニーズに応じた多様なアクティビティの提供を目指していく。

高付加価値化の実現に向けては、「白骨温泉まちづくり委員会事業推進計画」のもと、地域で取り組んでいる事業を支援する形で、段階的に進めていくものとする。

<磨き上げの方向性（理想の姿）のイメージ>



(1)望まれる体験・過ごし方

○「秘湯」の雰囲気を楽しむ（子どもから大人まで、初心者も上級者も、Big Bridge 旅行者）

- ・白骨温泉の特徴的な湯を楽しみ、秘湯の雰囲気にひたることを楽しむ。
- ・日常とは異なる空間を衣・食・住で体感する。白骨温泉についたら、普段の洋服は浴衣・作務衣に着替えて、温泉粥など、エビデンスのある健康に良い食を楽しみ、歴史を感じられる、また和の雰囲気に浸れる旅館の内観、外観、集落内の道を楽しむ。

○憧れの温泉の雰囲気を楽しむ（温泉地の雰囲気を味わいたい若年層、Big Bridge 旅行者、海外からの観光客等）

- ・温泉体験、白骨の伝統的な食事や温泉粥等を日帰りで気楽に楽しむ。
- ・上高地等の他地区の天候が悪く、山に登れない場合の代替の目的地として、温泉や自然散策等を楽しむ。

○湯治体験をする（日本の文化に興味関心がある若年層、Big Bridge 旅行者、海外からの観光客等）

- ・3日以上湯治体験ツアーに参加する。ガイドによる地域と湯治の歴史や湯治の方法の解説等を受けつつ、かつての湯治をアレンジした現代版湯治を体験する。

○健康づくりを追求する（中高年層、癒しを求める人）

- ・宿泊前の健康診断（アンケートなど）を行い、気になる体の不調に対する宿泊プランを選んで宿泊する。
- ・宿泊施設や飲食店で、健康に良い食事や地元の伝統食、長寿食等を選んで食事をする。また、宿泊施設や飲食店で、健康食、伝統食の料理教室を開催し、同時にレシピの提供や地元食材をお土産として購入する。
- ・自然の中で幅広い運動強度（温泉めぐり、まち歩き、クアオルト、健康ウォーキング、見晴山登山）等のアクティビティを選択して楽しむ。
- ・自分の不調に合う寝具を試せる、睡眠計測をやってみる。適切な睡眠時間を提案してもらう。

(2)宿泊施設の高付加価値化の方向性

○憧れの秘湯のイメージと多様な選択肢の維持・拡大

- ・1週間程度滞在できる湯治の温泉地として、各宿泊施設の方針に応じて、歴史や和の雰囲気を感じられる宿泊施設の内観、外観を維持し、アクティビティやツアー、健康に良い宿泊プラン等、多様な選択肢を確保する。
- ・信州大学等と連携した食や宿泊前診断、連泊できる宿泊プラン作り等を進め、滞在することで、健康になれる宿泊施設として、「現代版湯治場」としての実績とイメージを形成する。

(3)利用の高付加価値化に向けた取組

○白骨温泉の正面（顔）づくり

- ・白骨温泉を象徴する、顔となる場所を作るため、市管理の野天風呂の効果的活用（例：無料の足湯への転換）を検討する。
- ・集落の景観ガイドラインを設定し、宿泊施設と調和したまちの景観形成を進める。

○各種人材との連携

- ・信州大学の医師や日本クアオルト研究所、乗鞍高原のガイド人材と連携し、幅広い運動強度、目的（自然、文化、食等）を選べるアクティビティ及び、ツアーづくりを進める。宿泊者の連泊対応が基本であるが、空きがあれば日帰り客も利用可能にすることで、アクティビティの多様性を確保する。
- ・また、従業員の確保については、乗鞍高原やさわんど温泉に住まい、白骨温泉で働く等の働き方、住まい方を乗鞍高原やさわんど温泉とともに検討する。
- ・また、乗鞍高原における地元野菜の栽培と白骨温泉への提供、地元野菜としての通販等、周辺地域との物質、人材との連携を進める。

○二次交通の改善

- ・秘湯の雰囲気を維持するため、駐車場の拡大よりも、今後進むと考えられる自動車離れへの対応として、松本駅や新島々駅からの送迎、首都圏からの高速バスの沢渡ナショナルパークでの乗り換え、沢渡ナショナルパークゲートとの送迎等、各種二次交通のあり方について検討する。
- ・特に冬季の白骨温泉へのアクセス方法については、さわんど温泉の冬季利用と調整しつつ、連携を進める。

○高付加価値化に向けた段階的な進行

- ・地域の考えるまちづくりの方向性に合わせ、段階的に白骨温泉の高付加価値化の取組を進める。

新穂高温泉

■価値・特徴

新穂高温泉は岐阜県高山市に位置し、奥飛騨温泉郷の5つの温泉地の一つで、その最奥部に位置し、槍ヶ岳・穂高連峰、笠ヶ岳や双六岳、鏡平などの玄関口となっている。湯量豊富な蒲田川沿いに広がる温泉保養地であり、開放的な露天風呂が多いことが特徴である。

蒲田川は中崎尾根を境に右俣と左俣に分かれ、それぞれの登山道では、新緑、紅葉、雪景色など、四季折々の景観を楽しむことができる。冬でも気軽に槍・穂高連峰の眺望を楽しめる右俣側の新穂高ロープウェイには、年間を通じて多くの観光客が訪れている。また、左俣側では登山道がよく整備され、わさび平の見事なブナ原生林を散策したり、清流の絶景を楽しむことができる。

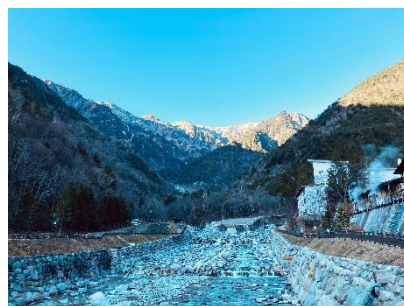


左俣の清流の絶景

[出典]飛騨山小屋友交会提供

(1)北アルプスを望む温泉宿泊地

新穂高温泉は平湯、栃尾、福地、新平湯とあわせて5つの奥飛騨温泉郷を成す温泉地の一つである。標高約1,000mの蒲田川沿いに立ち並ぶ温泉宿は、北アルプスの山岳景観を遠望しつつ、紅葉など谷あいの四季折々の風景を楽しめる景観や、色とりどりの湯を楽しめる等、宿ごとに特徴を備えている。



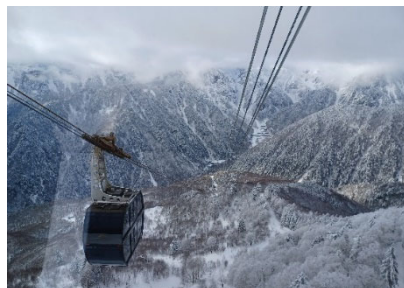
蒲田川

(2)ロープウェイによる山岳地へのアクセスと四季を通じた自然体験

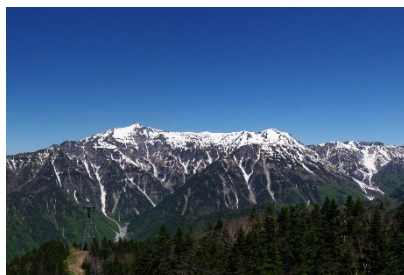
新穂高温泉は主に蒲田川流域の谷あいのエリアであるが、新穂高温泉から鍋平高原を経て千石平を結ぶ新穂高ロープウェイが整備されており、標高約2,156mの西穂高口駅まで登山を介さずに到達することが可能である。

新穂高ロープウェイは通年営業をしているため、終点駅までの移動中及び駅周辺でも四季折々の北アルプスの風景を楽しむことができる。ロープウェイ終点駅から徒歩約1時間の位置に立地する西穂山荘も本地域内の山小屋では、唯一通年営業を行っている。

終点駅である西穂高口駅周辺の展望施設（頂の森）では、壮大な北アルプスの山並みを望むことができ、中間駅がある鍋平高原にはビジターセンター（令和6年度より休館・リニューアル検討中）があり、ウォーキングやスノーシューハイクなどのアクティビティも行われている。



ロープウェイからの眺め（冬季）

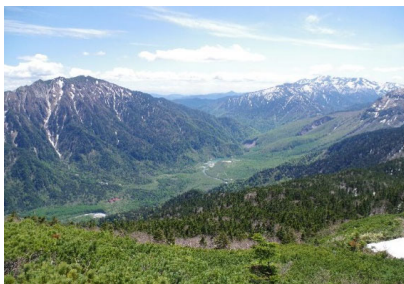


西穂高口駅から見た笠ヶ岳

(3)北アルプス登山の玄関口

新穂高温泉は、岐阜県側から槍・穂高連峰や笠ヶ岳、双六岳、鏡平などに向かう登山利用の拠点となっている。

新穂高ロープウェイにより西穂高口へアクセスすることができることから、西穂高岳登山の入口にもなっている。



西穂山荘付近稜線からの眺望

■現況・課題

(1)利用状況

新穂高温泉を含む奥飛騨温泉郷の利用者数は、令和元年度までは概ね 60 万人前後で推移していたが、コロナ禍の影響で令和 3 年度に約 20 万人と大幅に減少した後、令和 4 年度には回復傾向に転じている。

新穂高ロープウェイの利用者数は平成 26 年から令和元年までは年間 30 万人台で推移していたが、コロナ禍で減少し、回復傾向が見られた令和 4 年の利用者数は 21.4 万人となっている。

新穂高ロープウェイの令和元年（コロナ禍以前）の季節ごとの利用者数を見ると、最も利用者数が多いのは 7 月～9 月の約 11 万人、最も少ないのが 4 月～6 月の約 7.3 万人であり、冬季の 1 月～3 月にも約 8.7 万人の利用があり、雪見ツアーなどのインバウンド観光の割合が多い点が特徴的である。

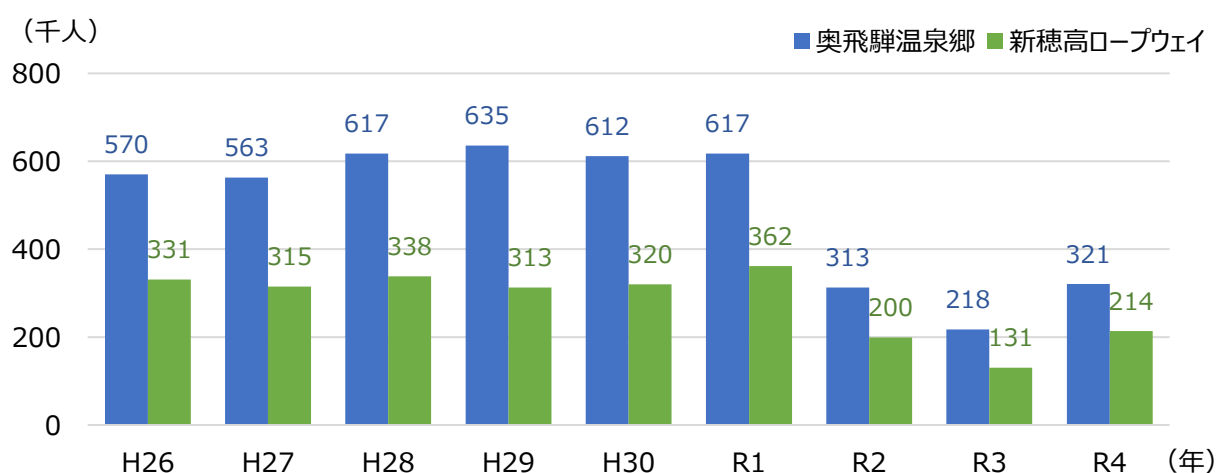


図 奥飛騨温泉郷及び新穂高ロープウェイの観光入込客数の推移

[出典] 岐阜県観光国際部観光国際政策課「岐阜県観光入込客統計調査」

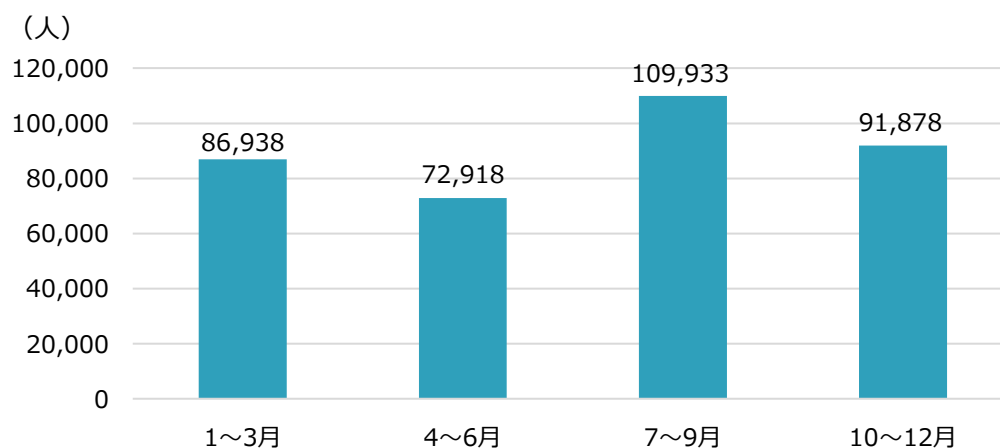


図 新穂高ロープウェイの四半期別観光入込客数の推移（令和元年）

[出典] 岐阜県観光国際部観光国際政策課「岐阜県観光入込客統計調査」

(2)社会状況

<新穂高温泉地区に関わる計画>

「奥飛騨温泉郷活性化基本構想」(令和4年3月、高山市)では、新穂高地区に係る主な事業として山岳観光のための駐車場整備(駐車場新設と既存駐車場の機能向上、駐車料金体系の検討、駐車状況の事前確認システムの検討、パークアンドライド方式の検討)が挙げられている。

「中部山岳国立公園南部地域利用推進プログラム2025」においては、新穂高温泉エリアにおけるプロジェクトとして「新穂高ロープウェイ関連施設の整備・リニューアル」が位置付けられており、上質なサービス・施設の提供という観点からの取組が進められている。令和2年にはしらかば平駅のリニューアルが行われ、令和4年には千石平園地(西穂高口駅付近)にて風景鑑賞・散策を楽しむ「頂の森」が整備された。

<新穂高温泉地区の人口動態>

新穂高温泉がある奥飛騨温泉郷神坂の人口は令和6年3月時点で約89人(66世帯)であり、平成12年から平成27年にかけてはほぼ横ばいで推移していたが、近年はやや減少している。高齢化率も概ね横ばいであったが、総人口が減少した令和2年は高齢化率も下がり、10%となっている。

(3)主な利用施設・コンテンツ等

新穂高温泉における主要な利用施設・コンテンツ等は以下の通りである。

利用施設	ロープウェイ、ビジターセンター、観光案内所、新穂高登山指導センター（新穂高臨時派出所）、駐車場、散策路、宿泊施設等 ※宿泊施設：旅館4軒
コンテンツ	・新穂高ロープウェイ（通年）※期間限定で星空観賞便の運行あり ・トレッキング ・スノーシュー、雪見 ・温泉（足湯含む） ・千石平園地「頂の森」 ・新穂高ビジターセンター「山楽館」（令和6年度より休館・リニューアル検討中） ・ロープウェイで行ける標高約2,200m ・登山基地
地域で活動している方々	・奥飛観光開発株式会社 ・名古屋鉄道株式会社 ・新穂高温泉観光協会 ・町会 ・西穂山荘 ・わさび平小屋 ・新穂高登山指導センター（登山届提出場所）



図 利用施設等位置図（新穂高温泉）

(4)課題

<宿泊者向け体験・アクティビティの多様化>

年間を通じて多くのロープウェイ利用者がいる一方で、ロープウェイ周辺、特に中間駅である鍋平高原駅・しらかば平駅におけるアクティビティが少なく、麓の新穂高温泉の宿泊利用者数の増加や長期滞在につながっていない状況にある。

一方、谷あいの狭い土地が多い本地区内には、ロープウェイの鍋平高原駅及び西穂高駅のいずれについても比較的広く平坦なエリアがあるため、ロープウェイで移動し、景観を楽しむ以外のアクティビティ等を提供するポテンシャルがあると考えられる。

<槍・穂高連峰、笠ヶ岳、双六岳、鏡平などの玄関口としてのより一層の活性化>

新穂高温泉は、長野県側の上高地から槍・穂高連峰を経て、新穂高温泉までの登山ルートの主要な拠点であり、また、岐阜県側の槍・穂高連峰、笠ヶ岳、双六岳、鏡平などに向けた登山基地としての役割がある。そのため、冬季にも利用できる登山基地、年間を通じた周遊拠点の一角としての位置づけを明確化することで、より高付加価値な体験の提供が可能と考えられる。

「登山」を楽しむ拠点としての機能強化を図るためには、登山情報の提供や温泉により疲れを癒す機能は新穂高温泉駅近傍に集約する必要がある。

また、新穂高温泉では駐車場の不足による路上駐車が増加が課題となっていることから、ロープウェイを核とした周辺施設や駐車場の整理・リニューアルや、ロープウェイと連携した宿泊施設を通じて、高付加価値化を図ることで、新穂高温泉が本地域の周遊拠点のひとつとなる仕掛けが必要である。

<ガイドや従業員の確保>

地域の人手不足は深刻であり、宿泊施設の従業員が業務の合間に、ガイドやアクティビティを提供しているが、アクティビティの利用者数の不安定さから、ガイド等の人材を常時確保することが難しい状況にある。

ソフトコンテンツ（アクティビティの提供）に関しては、本地域全体での連携を基本とし、窓口の一元化によって安定したアクティビティ提供と人材確保が望まれる。窓口の一元化に当たっては、外部事業者の参入や飛騨山脈ジオパーク構想との連携も検討していく必要がある。

また、アクティビティの多様化や魅力向上のため、地域における資源探しが必要である。

新穂高温泉～槍・穂高連峰、笠ヶ岳、双六岳、鏡平などの玄関として幅広いターゲットが登山や自然体験を楽しめるエリア

幅広いターゲットが「山に登ること」や「自然と触れ合うこと」を楽しむことのできる拠点とし、麓の温泉地を含めた宿泊者層の増加を目指す。ハードな登山体験ができる槍ヶ岳や笠ヶ岳、また、登山道がよく整備されており、山小屋の間隔が近く比較的登りやすいわさび平～鏡平～双六岳などへの登山拠点として、初心者や家族連れから上級者まで多様な利用者層に登山の楽しみを提供する。また、新穂高ロープウェイによって一般観光客の受け入れも可能であることから、ロープウェイの駅ごとに特徴と魅力を明確化し、体験とターゲットの差別化を図るものとする。

＜磨き上げの方向性（理想の姿）のイメージ＞



(1)望まれる体験・過ごし方

○気軽に北アルプスの絶景を楽しむ（子どもから大人まで、初心者も上級者も）

- ・ロープウェイを使って、日常では見られない雄大な山の景色（槍・穂高連峰）を眺めることを楽しむ。
- ・家族で記念写真を撮り、思い出作りを楽しむ。

○宿泊することで得られる特別な体験をする（本地域を周遊する旅行者、Big Bridge 旅行者、アジア圏からの観光客等）

- ・登山や自然観察、星空散策、キャンプ、スノーシューピクニックなど、この地域特有の体験をし、ゆっくり麓の温泉につかって旅の疲れを癒し、余韻に浸ることを楽しむ。
- ・西穂高口駅から、槍・穂高連峰を眺め、周辺を短時間で回る周遊ツアーを楽しみ、高付加価値な山小屋宿泊体験を楽しむ。
- ・夜は新穂高温泉に宿泊し、翌日は北アルプスの宿泊地へ向かうといった山岳地帯の周遊ツアーを楽しむ。

○北アルプス登山に挑戦する（北アルプスへの本格登山を楽しみたい人、冬山登山の醍醐味を味わいたい人等）

- ・新穂高温泉駅周辺で、登山前に登山届を提出し、周辺のフィールドの天候や混雑状況などの情報を収集し、行程を調整・検討する。
- ・北アルプスから下山して、次の目的地への出発・帰宅前に軽食をとったり、お土産を買ったり、日帰り温泉を楽しんだりしながら、山歩き・旅の余韻に浸る。

○多様なアクティビティを楽しむ（初心者も上級者も）

- ・本地域一帯のアクティビティ等の情報を容易に入手して、HP で事前予約または当日現地の窓口で申込を行い、林間ハイキングからザイルワークまで、多様なアクティビティを楽しむ。
- ・種類の多様さだけでなく、初心者から上級者まで自分の活動レベルに合わせて、アクティビティを選んで参加し、楽しむ。

(2)宿泊施設の高付加価値化の方向性

○新穂高温泉では多様な温泉を楽しめる多様な宿泊施設

- ・北アルプスの山岳景観を遠望しつつ、紅葉など谷あいの四季折々の風景を楽しめる景観や、色とりどりの湯を楽しめる宿泊施設、宿泊価格帯も多様な宿泊施設を維持する。
- ・下山してきた来訪者（日帰り客含む）を癒す日帰り入浴サービス、飲食サービス、お土産等の充実を目指す。

○アクティビティとセットで滞在空間を楽しむ宿泊施設

- ・鍋平高原駅や西穂高口駅周辺の比較的広く平らな土地を活用し、ガイドツアーやハイキングコースを体験しながら、最高級の山小屋体験など少人数での限定的な体験を演出できる宿泊施設を検討する。

(3)利用の高付加価値化に向けた取組

○アクティビティ体験の窓口の一元化

- ・林間ハイキングからザイルワークまで、多様なアクティビティの提供のため、ガイドやツアーなどの窓口の一元化を進める。
- ・鍋平高原駅発のガイド付きツアー（五色ヶ原の森のネイチャーガイド、飛騨山脈ジオパーク構想と連携したコースづくりとアクティビティの内容検討）、新穂高ビジターセンター「山楽館」を情報発信センターとして機能強化する。
- ・登山ガイドと連携し、丸山・独標登山、西穂高岳クライミング、上高地への縦走登山、西穂山荘宿泊ツアー等、複数の体験レベルの登山ツアーを提供する。

○多彩なソフトコンテンツを提供する体制づくり

- ・長野県側から岐阜県側の北アルプス、平湯温泉、乗鞍岳などの広域周遊を含むイベント・アクティビティの体制づくりを進める。

○新穂高温泉における登山出発地、到着地としての機能強化

- ・登山届の提出や登山前、及び下山後の滞在環境の整備（登山前や登山後に一息つける場所、日帰り温泉、足湯等）を進める。
- ・駐車場のゾーニング、ルール整備等を行い、日帰り利用者、長期利用者など、駐車場の利用時間帯・利用時間に応じてゾーニングすることで、より便利な登山基地を目指す。

平湯温泉

■価値・特徴

平湯温泉は、奥飛騨温泉郷の中で最も山深く、戦国時代に白猿に導かれた武将が発見したという伝説を持つ温泉保養地である。40の異なる源泉を各旅館が温泉として独自に供給している。

高山市側からの本地域への玄関口であり、上高地をはじめ松本市側や富山県側への交通拠点にもなっている。

(1)変化に富んだ地形地質・植生

焼岳から乗鞍岳にかけての火山群の山腹、高原側が深い谷間を形成しており、平湯温泉付近は段丘堆積物、扇状地堆積物等の平坦な地形となっている。

落葉広葉樹林から亜高山帯針葉樹林と変化に富んだ植生が見られる。



平湯大滝

(2)湯量豊かな山間の温泉郷

平湯温泉は、乗鞍岳の北麓、標高 1,250m に位置する温泉郷で、地域内には約 40 もの井戸・源泉があり、毎分約 13,000 リットルもの豊富な湯が噴出している。

温泉街北部は、古くからの旅館、売店等が中心部に密集しており、落ち着いた温泉街の雰囲気となっている。

奥飛騨温泉郷として、温泉法に基づく国民保養温泉地にも指定されている。



平湯の湯

(3)上高地や乗鞍岳への乗換・中継拠点

平湯温泉は安房峠の岐阜県側の玄関口に位置するが、安房トンネルの開通により、松本市側へのアクセスが向上し、現在は乗鞍岳、上高地、新穂高、高山などの観光地を結ぶ交通の要衝としてにぎわっている。

温泉街南部のエリアには、平湯バスターミナル、駐車場、保養所等の施設があり、平湯温泉の中心として重要なエリアとなっている。また、平湯バスターミナルは本地域の高山市側の玄関口的な存在でもある。



平湯バスターミナル

温泉利用の他、キャンプや自然散策、スキーも楽しむことができる。

■現況・課題

(1)利用状況

平湯温泉の利用者数は、平成26年から令和元年までは年間20～23万人程度で推移している。コロナ禍で一時減少したが、令和3年には回復傾向にあり、令和4年には約16万人まで回復している。

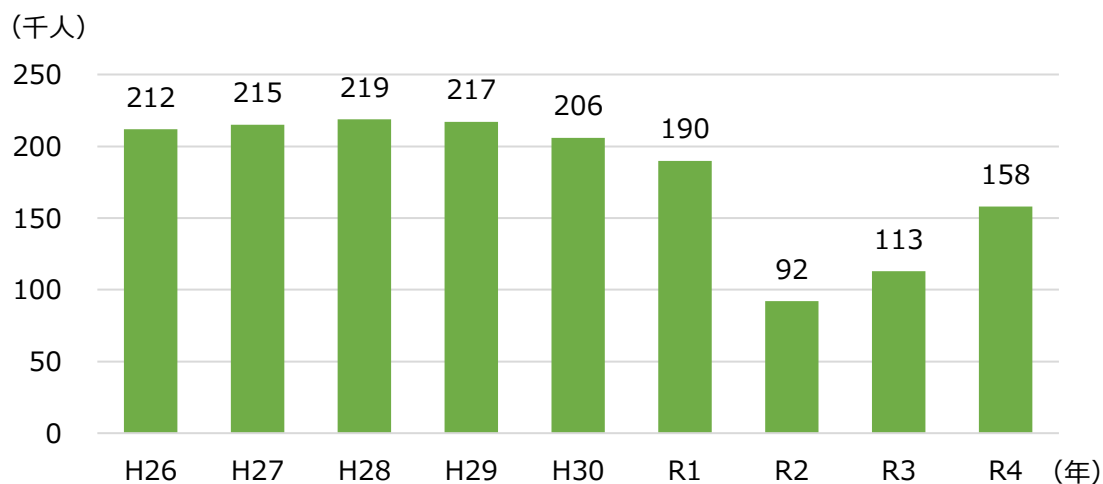


図 平湯温泉集団施設地区利用者数推移

[出典] 環境省自然環境局「自然公園等利用者数調（令和4年）」

新穂高温泉を含む奥飛騨温泉郷の利用者数は、コロナ禍以前は概ね60万人前後で推移しており、平湯温泉の利用者数は、奥飛騨温泉郷全体の利用者数の約3～4割を占める。

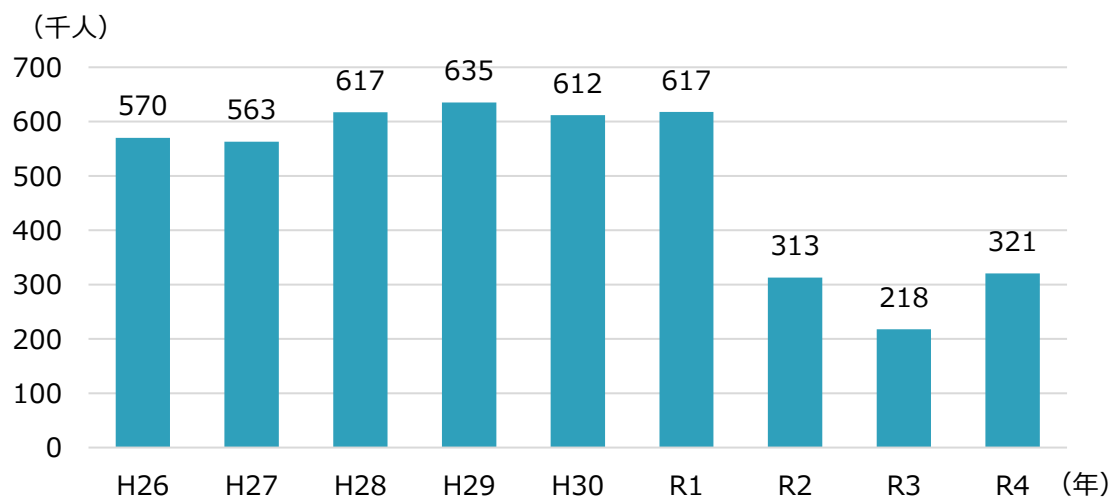


図 奥飛騨温泉郷観光入込客数推移

[出典] 岐阜県観光国際部観光国際政策課「岐阜県観光入込客統計調査」

上高地の開山／閉山に伴い宿泊者数が増減するが、近年は1～2月にも雪景色の鑑賞を目的とした外国人観光客が訪れている。

環境省が実施した利用者アンケートによると、同じくマイカー乗換拠点であるさわんど温泉と比べて、平湯温泉は滞在日数が少ない傾向にある。

(2)社会状況

<平湯温泉の人口動態>

平湯温泉（高山市奥飛騨温泉郷平湯）の人口は、平成12年から令和2年にかけて若干減少しているものの、ほぼ横ばいで推移している。

高齢化率は上昇傾向にあり、平成12年には15%だったが、令和2年には25%まで上昇している。

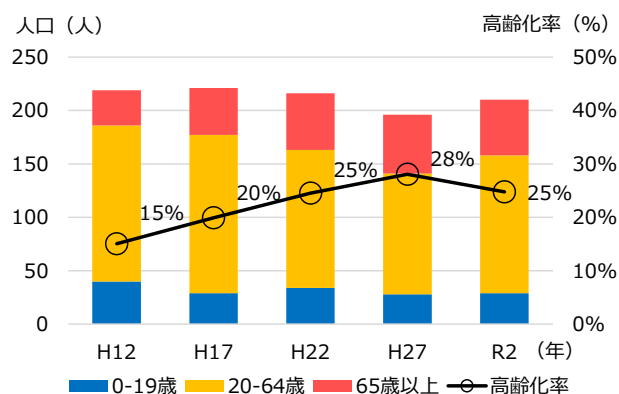


図 平湯温泉における人口推移

[出典] 国勢調査（平成12～令和2年）

<平湯温泉の活性化に向けた動き>

「奥飛騨温泉郷活性化基本計画」（令和4年3月、高山市）では、平湯温泉における事業として、平湯大滝公園の整備、交通拠点としての駐車場整備（平湯バスターミナル周辺の駐車場新設、交通拠点としての機能強化、飛騨・北アルプス自然文化センターとの連携）が位置付けられ、既に一部実施されている。

令和6年7月には、中部山岳国立公園奥飛騨ビジターセンター（旧 飛騨・北アルプス自然文化センター）がリニューアルオープンした。

平成19年に外部民間事業者の共立リゾートが参入しているが、令和6年9月には星野リゾートが手掛ける温泉施設「界 奥飛騨」がオープンした。

令和7年には、松本～高山を結び平湯温泉もコースに含まれる信飛トレイルがオープン予定である。

これらの動きと並行して、利用拠点整備改善計画の作成、平湯バスターミナル及び駐車場改修が検討されている。

(3)利用施設・コンテンツ等

平湯温泉における主要な利用施設・コンテンツ等は以下の通りである。

利用施設	奥飛騨ビジターセンター、平湯バスターミナル、園地、野営場、スキー場、宿泊施設 ※宿泊施設：旅館 18 軒、民宿ビジネスホテル 2 軒
コンテンツ	・温泉入浴 ※日帰り入浴あり ・サイクリング (e-bike)、四輪バギー ・天体観測 ※足湯×天体観測もあり ・散策 ※ガイドツアーあり ・スノーシュー、バックカントリースキー ・ジオサイト ・ネイチャークラフト
地域で活動している方々	・平湯温泉まちづくり委員会 ・平湯温泉観光協会 ・平湯温泉旅館協同組合 ・奥飛騨温泉郷観光協会 ・濃飛乗合自動車株式会社 ・一般財団法人飛騨山脈ジオパーク推進協会 ・宿泊事業者等の地域事業者、交通事業者 など ・(株) オーエイチ (アクティビティやイベントの企画、平湯温泉観光協会と連携)



図 利用施設等位置図（平湯温泉）

(4)課題

<地域の魅力の洗い出し>

拠点内には多数の観光資源があるものの、有効活用されていないものもあるため、地域の価値や魅力を言語化するとともに、ソフトコンテンツの充実、アクティビティ事業者との連携等が求められる。

<魅力発信の強化>

平湯温泉は、本地域の交通結節点としての役割と温泉街としての滞在拠点としての役割を有していることから、平湯温泉の楽しみ方に加え、他拠点への案内も含めた総合的な案内機能が求められる。

令和6年7月にリニューアルオープンした奥飛騨ビジターセンターにおける情報発信も期待されるが、マイカーやレンタカーで上高地へ向かう場合、あかんだな駐車場でバスに乗り換えて上高地へ直行してしまう利用者が多い点は課題である。また、繁忙期には、あかんだな駐車場へ向かうマイカーやレンタカーが地域の交通に大きな影響を及ぼしている。

<地域内のゾーニング、動線整理>

温泉街が国道・旧国道で分断されており、全体的に車両優先のゾーニングとなってしまうことから、滞留拠点が少なく温泉街の正面がわかりにくいことから、温泉街ならではの地域内をそぞろ歩きするような利用がなされていない状況にある。

そのため、温泉街らしい風情を感じられる空間づくり、利用者が安心して歩ける環境づくりが求められる。

■磨き上げの方向性（理想の姿）

多様な利用者を受け入れ、より良い体験をバックアップする温泉郷

～郷から山へ、山から郷へ、自然・歴史・文化の魅力が詰まった国立公園ならではの体験を～

交通結節点という好立地かつ、歴史ある湯治場、北アルプスへの眺望などの良好なロケーションを活かした地区の魅力向上。

温泉街・各宿泊施設の“平湯らしさ”を追求し、単なるゲートではなく、ここに泊まる意義を高める。

<磨き上げの方向性（理想の姿）のイメージ>



(1)望まれる体験・過ごし方

○フィールドへ出かける人、物の準備を整える（登山者）

- ・お腹を満たす、体調を整える、安全登山のための情報を得る、旅のワクワク感を高めるなど、これからフィールドへ出かける人自身の準備を整える。
- ・食糧を調達する、登山用品（ガスボンベやトイレットペーパーなどの消耗品を想定）を調達する、現金を準備する、荷物を発送する・預ける等、フィールドへ出かける際に必要な物の準備を整える。

○山の疲れを癒し、人里の温かさに触れる（登山者）

- ・下山後、温泉に浸かって山歩きの疲れを癒すとともに、この土地ならではの食文化に触れ、山では味わえない人里の温かさ、豊かさに触れる。

○歴史ある湯治場で地域の食と文化を楽しむ（一般観光客）

- ・日常から離れて温泉や地域の食文化を楽しむ、地域の暮らし・歴史を知る。

○温泉をきっかけにフィールドへ出かける（一般観光客）

- ・奥飛騨ビジターセンターや宿泊施設で上高地や乗鞍岳、新穂高など各フィールドの魅力に触れることで、フィールドへ足を延ばして大自然の魅力に触れる。

(2)宿泊施設の高付加価値化の方向性

○上質な滞在空間を提供する宿泊施設の維持・拡充

- ・平湯温泉・奥飛騨温泉郷らしさを味わえる雰囲気のある温泉宿を維持・拡充する。
- ・湯治や湯めぐり等の温泉文化、地域の食文化など、景観のみならず五感で地域の文化が感じられる宿泊施設を目指す。

○交通結節点・ゲートという立地面での利便性をウリとした登山客向けの宿泊施設の維持

- ・登山基地として使用しやすい、日帰り温泉施設、宿泊施設を維持していく。

○奥飛騨ビジターセンターと宿泊施設が連携した情報発信の強化

- ・一般観光客をフィールドへいざなう仕掛けとして、奥飛騨ビジターセンターでの情報発信に加えて、奥飛騨ビジターセンターから宿泊施設に対して情報提供を行い、各宿泊施設のロビー等でも自然利用に関する情報発信ができるようにする。
- ・一般観光客にフィールドへの興味・関心を深めてもらうため、飲食提供時に地域の食文化と自然環境や気候風土とのつながりを説明するなど、宿泊施設でのサービス提供においてもインタープリテーション要素を盛り込む。

(3)利用の高付加価値化に向けた取組

○地域資源の再認識と魅力発信

- ・地域内に多数ある観光資源を洗い出し、地域の魅力発信やソフトコンテンツの充実につなげる。

○温泉街らしい雰囲気・まちなみの向上

- ・老朽化が進む施設の修繕、廃屋の撤去等を進め、景観を改善するとともに、宿泊施設に限らず日本家屋が立ち並ぶ温泉街らしい雰囲気・まちなみを継承していく。
- ・笠ヶ岳をシンボルとした温泉街の正面を定める、ナイトコンテンツを提供するなど、温泉街内の周遊を想定した人の流れ（モデルルートなど）をつくる。

○多彩なソフトコンテンツを提供する体制づくり

- ・長野県側から岐阜県側の北アルプス、平湯温泉、乗鞍岳などの広域周遊を含むイベント・アクティビティの体制づくりを進める。

さわんど温泉

■価値・特徴

さわんど温泉は、かつては飛騨国と信州国をつなぐ宿場町であり、20世紀後半に温泉地として発展した。

松本市側からの本地域への玄関口であり、上高地をはじめ、乗鞍高原や白骨温泉、高山市側等へアクセスできる交通拠点でもある。

(1)国内有数の景勝地への入口～沢渡ナショナルパークゲート～

さわんど温泉は、本地域における長野県松本市側からの交通アクセスの拠点となっている。

特に、マイカー利用者は本地区内でバスやタクシーに乗り換えて上高地へ向かうことから、さわんど温泉は国内有数の景勝地である上高地への入口とも言える。

沢渡ナショナルパークゲートは、バス・タクシーへの乗換機能のみではなく、本地域の東の玄関口として、公園利用のルールやマナー啓発、気象や道路状況の他、本地域の価値や特徴など様々な情報を提供・発信している。



沢渡ナショナルパークゲート

(2)上高地開発の歴史と温泉・溪流

さわんど温泉は、安房トンネル開通に伴って湯引きが始まった梓川沿いの温泉地である。現在は複数の温泉宿があり、日帰り入浴が可能である。また、湯の郷公園では足湯も利用できる。

飛騨を経て越中へと続く古道「鎌倉街道」の道筋が残され、歴史を感じる散策が可能であり、付近にはミズバショウや食虫植物などが自生する池尻湿原もある。

「沢渡」という地名は「水が集まる場所」を意味し、水資源が豊富な地区である。梓川沿いに立地していることから、イワナやヤマメなどを対象とした釣り客も訪れる。

梓川沿いには上高地が観光地として発展するきっかけとなった霞沢発電所があるなど、温泉と合わせて近代の開発の歴史を垣間見ることができる場所でもある。



梓川沿いの温泉地

■現況・課題

(1)利用状況

沢渡駐車場の利用者数は、平成 28 年から令和元年まで 15 万人程度で推移していたが、コロナ禍の影響により令和 2～3 年は利用が落ち込んだ。

令和 4 年は 18 万人にまで利用が回復し、コロナ前の 1.2 倍程度となっている。

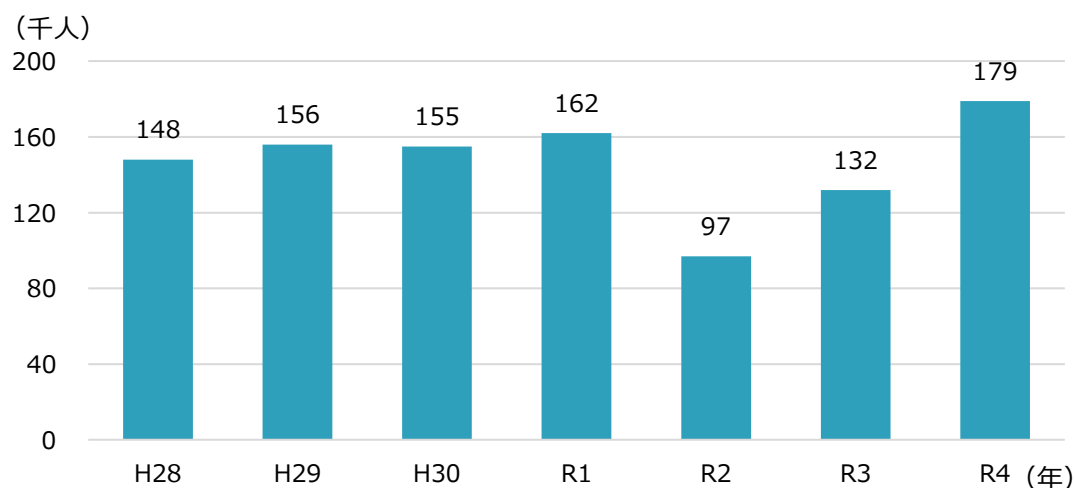


図 沢渡駐車場利用者数推移

[出典] 環境省「中部山岳国立公園南部地域利用者数カウント」

沢渡ナショナルパークゲートの利用者数は、コロナ前までは約 8 万人で推移しており、コロナ後の令和 3 年以降、回復傾向にある。令和 5 年度は 15.6 万人の利用者が訪れており、コロナ前の約 2 倍の利用者数となっている。沢渡ナショナルパークゲートの利用者数は、令和 5 年度を除き、駐車場利用者数の約半数前後に留まっており、沢渡ナショナルパークゲートの利用促進に課題があるといえる。

また、上高地の開山／閉山に応じて利用者数が大きく増減し、冬季は利用が落ち込む。

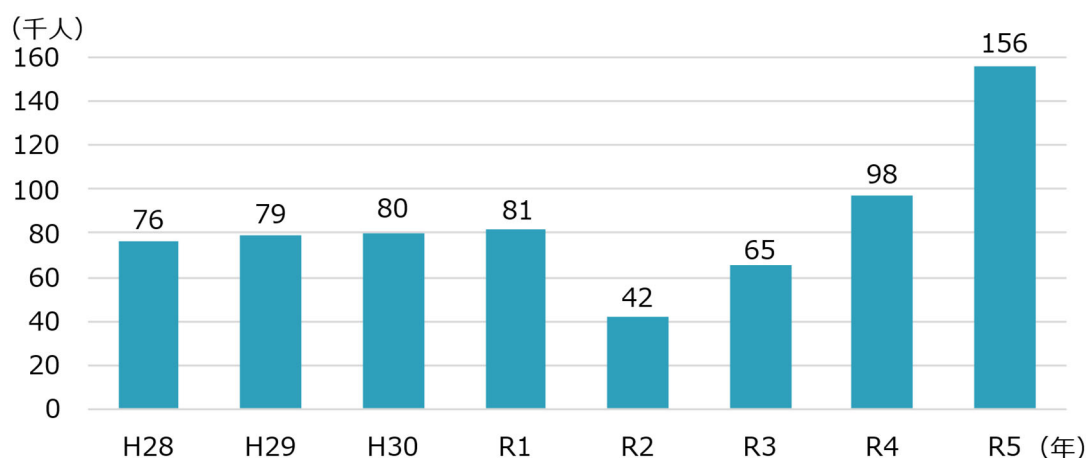


図 沢渡ナショナルパークゲート利用者数推移

[出典] 環境省調べ

(2)社会状況

さわんど温泉が位置する安曇沢渡（旧安曇村沢渡）の人口は、近年徐々に減少傾向にある。また、人口減少とあわせて高齢化率も上昇傾向にあり、平成12年の時点で既に38%だった高齢化率は令和2年には43%に上昇している。

地区内とその周辺地域は、駐車場の他公有地（国有林、松本市有地）も多く、民間事業者が活用可能な土地が限られている。

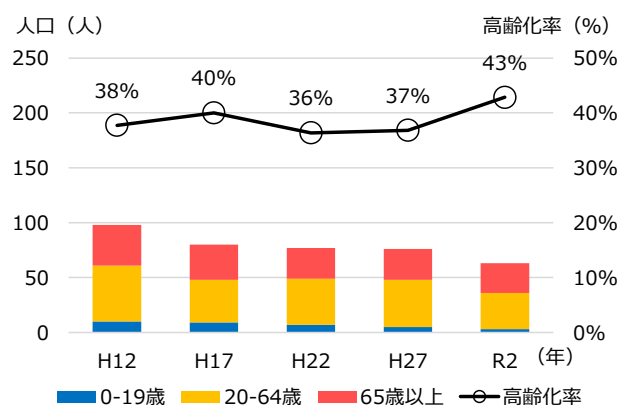


図 さわんど温泉における人口推移

[出典] 国勢調査（平成12～令和2年）

(3)利用施設・コンテンツ等

さわんど温泉における主要な利用施設・コンテンツ等は以下の通りである。

利用施設	沢渡ナショナルパークゲート（駐車場、案内所）、さわんどバスターミナル、宿泊施設 ※宿泊施設：旅館、ペンション等4軒
コンテンツ	- 温泉入浴 ※日帰り入浴や足湯あり - 散策 - 溪流釣り
地域で活動している方々	- さわんど温泉観光組合 - 一般財団法人ピアーズさわんど（沢渡ナショナルパークゲート管理者） - 沢渡駐車場組合 - 交通事業者 - 松本市

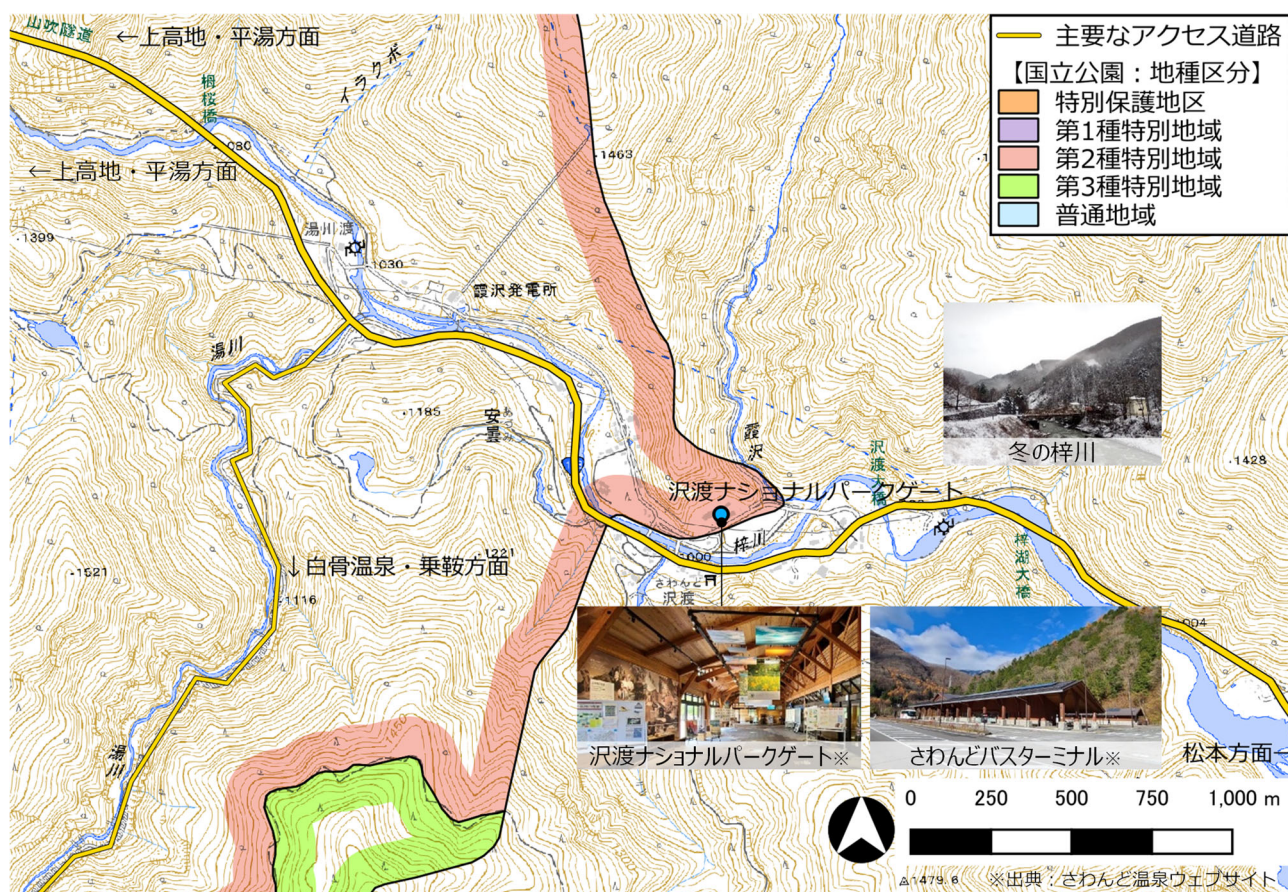


図 利用施設等位置図（さわんど温泉）

(4)課題

<ゲート機能の強化、滞在時間の延長>

これまでさわんど温泉では、沢渡ナショナルパークゲートや容量の大きな駐車場など、本地域のゲート機能を担うべく各種施設整備が行われてきたが、地区内に民間駐車場が点在していることから、沢渡ナショナルパークゲートに立ち寄らない利用者も一定数おり、国立公園の入口としての役割を活かしきれていない状況にある。

首都圏から国道 158 号を通過して高山等に向かう高速バスの中には、さわんど温泉には停車せず、通過してしまうバスもある。

また、さわんど温泉内は歩道が少ない、利用者がゆっくり滞在できる施設が少ない、アクティビティ等のコンテンツが少ないなどの理由から、交通の拠点としての立地という他に、さわんど温泉に滞在するきっかけが少ない。バスの発着時間帯は駐車場の出入りが集中するため、下山後に上高地の余韻に浸ってもらえる空間の提供など、拠点内の滞在空間の創出・充実ができると良い。

<繁忙期の深刻な交通渋滞>

上高地にマイカーやレンタカーで訪れる利用者は、沢渡駐車場でバスやタクシーに乗り換える必要があるが、繁忙期には慢性的に沢渡から国道 158 号が渋滞する状況にある。道幅が狭くカーブも多い国道 158 号での大渋滞は、緊急車両の通行にも支障をきたすことから、地域住民の生活への影響も大きく、社会問題となっている。

<駐車場の利便性向上、収益確保>

繁忙期は早朝（一部では深夜未明）から駐車場が満車となり、マイカーからバスへの乗り換えができなくなるため、午後以降はバスを運行しても乗客がいない状態となる場合がある。

さわんど温泉内の各駐車場は、立地条件や機能面でそれぞれメリット・デメリットがあるが、現状は全て一律料金となっている。そのため、登山者が早朝に利便性の良い区画に駐車し、数日間利用することで、日帰り利用者が不便な区画の利用を余儀なくされたり、駐車できなくなったりする場合がある。また、現在、さわんど温泉内の駐車場は車中泊禁止のため、キャンピングカー等による車中泊のニーズを受け入れる環境がない状況にある。

こうした利用者のニーズや特性を踏まえ、駐車場の利便性向上のため、駐車場の利用ルールの再整理やゾーニングが求められる。

さわんど温泉の駐車場は、冬季も上高地への入山者等により一定の利用があるが、冬季の駐車場料金は無料のため、地域の裨益につながっていない状況である。今後、上高地の冬季利用のあり方等とあわせて、さわんど温泉の冬季の駐車場料金の設定についても検討が必要と考えられる。

なお、市営駐車場の料金は松本市営沢渡駐車場条例により定められており、駐車場の機能拡大や高付加価値化、それに伴う料金の変更には条例改正が必要となる。

<地域の魅力向上と他拠点との連携による通年利用の促進>

現状、さわんど温泉の利用者は上高地の開山／閉山に応じて大きく増減し、特に上高地が閉山する冬季の利用は非常に少なくなっているため、今後は上高地に依存しない通年利用も期待される。

一方、上高地をはじめとする周辺の拠点とは切り離せない関係性にあり、上高地や乗鞍高原の冬季利用の高付加価値化、乗鞍高原、白骨温泉、平湯温泉の魅力向上等が図られることで、その相乗効果によって、さわんど温泉のゲート機能も強化されることが考えられる。

<さわんど温泉及び周辺の拠点の魅力向上に資する社会基盤の整備>

さわんど温泉は上高地や槍・穂高連峰方面への玄関口であり、ハイカー・登山者にとっては入山前最後の集落地だが、飲食、物販施設、医療施設、託児所、銀行等の社会基盤が不足している。

また、上高地で働く人にとってもさわんど温泉は最寄りの集落地であり、利用者・従業員双方の目線から、従業員寮やコンビニ、ファーストフード店、カフェ、通信環境等の整備による利便性向上や魅力向上が望まれる。

■磨き上げの方向性（理想の姿）

フィールドへ出かける人や物の準備が整えられる、便利で特別感のある拠点へ

～ここで乗り換えなくてはならない、ではなく、ここから山へ入りたい、と思えるゲートへ～

沢渡ナショナルパークゲートを中心とした情報発信拠点として、上高地のみならず、中部山岳国立公園南部地域の各地区への入口として、ゲート機能を極める。

乗換拠点近くに泊まる・住むことそのものを価値とした宿泊施設や商店、飲食施設等の社会基盤を整える。

<磨き上げの方向性（理想の姿）のイメージ>



(1)望まれる体験・過ごし方

○フィールドへ出かける人、物の準備を整える（登山者）

- ・お腹を満たす、体調を整える、安全登山のための情報を得る、旅のワクワク感を高めるなど、これからフィールドへ出かける人自身の準備を整える。
- ・食糧を調達する、登山用品（ガスボンベやトイレットペーパーなどの消耗品を想定）を調達する、現金を準備する、荷物を発送する・預ける等、フィールドへ出かける際に必要な物の準備を整える。

○当日の天候や混雑状況等に応じて行程を調整する（登山者、一般観光客）

- ・周辺のフィールドの天候や混雑状況などの情報を収集し、行程を調整・検討する。
- ・必要に応じて、コンシェルジュと相談しながら行程を検討する。

○フィールドから帰ってきた人に、山歩き・旅の余韻に浸ってもらう（登山者、一般観光客）

- ・フィールドから帰ってきた際には、沢渡ナショナルパークゲートの展示を見てフィールドで見てきたものの復習をしたり、次の目的地への出発・帰宅前に軽食をとったり、お土産を買ったり、日帰り温泉を楽しんだりしながら、山歩き・旅の余韻に浸る。

○自然と都会の間にある、里の暮らしでリフレッシュする（地域内で働く人）

- ・自然に近いところにありながら、快適な従業員寮、買い物や憩いの場などが揃った住みよい里としてのさわんど温泉を生活の拠点とし、国立公園内で働く従業員も自然の中で働く不便さや緊張感から解放され、のんびりとしたオフの時間を過ごす。

(2)宿泊施設の高付加価値化の方向性

○ゲート機能の一翼を担う宿泊施設の整備

- ・上高地行きバスの始発便に乗りたい利用者を対象とした安価な宿、車中泊を想定したスペースを設けるなど、乗換拠点近くに泊まれることそのものを価値とした宿泊施設・機能を提供する。

○情報発信拠点としての機能強化

- ・沢渡ナショナルパークゲートにおいて各フィールドの基礎情報を提供するとともに、周辺の宿泊施設等にも情報を共有し、乗換拠点（＝バスの発着地）近くに宿泊する価値を高める。

(3)利用の高付加価値化に向けた取組

○滞在環境の整備

- ・上高地のみならず、白骨温泉、乗鞍高原、平湯温泉など、本地域全体のゲート機能を担う情報発信拠点とする。
- ・ただ乗り換える、ただ情報を得るだけでなく、国立公園というフィールドへ出る前後に一息つける場所、出発に向けて気持ちを高めたり余韻に浸ったりできる場を提供する。

○駐車場のゾーニング、ルール整備

- ・日帰り利用者、長期利用者など、駐車場の利用時間帯・利用日数に応じてゾーニングすることで、より便利で快適な乗換拠点を目指す。
- ・車中泊を想定したキャンプエリア、RV パーク等を設定し、より多様な利用ニーズに応えることで、利用者の利便性と満足度を向上させる。
- ・多客期と閑散期で駐車場料金を変更するなど、ダイナミックプライシングを導入する。

○駐車場の高付加価値化

- ・駐車場利用者に対して、屋根付き駐車場、洗車・メンテナンスサービス、荷物の配送サービス、車・自転車の回送サービスなどを提供し、車や荷物を預けることにメリットを付加する。

○働く人も過ごしやすい環境の整備

- ・さわんど温泉で働く人、中部山岳国立公園南部地域で働く人のための従業員寮を整備するとともに、コンビニやカフェを整備するなど、住みよい環境の整備を目指す。

○冬季利用の促進

- ・上高地の冬季利用のあり方とあわせて、さわんど温泉内の駐車場についても冬季の利用ルールや料金等について検討する。

○交通渋滞対策

- ・さわんど温泉には、市営と民営合わせて約 2,000 台分の駐車場があるが、現状は混雑状況をリアルタイムで把握・情報発信する仕組みがないことから、さわんど温泉より手前のエリア（松本 IC ～新島々駅間など）で満車情報や渋滞情報を発信する仕組みを検討する。
- ・また、リアルタイム情報の発信のみでは繁忙期の交通渋滞対策として十分ではないことから、本地域のゲートとしての利便性向上を目指し、立体駐車場の整備による駐車台数の確保や、国道 158 号におけるさわんど温泉内の渋滞発生箇所の 3 重線化、さわんど温泉内での滞留道路の確保などについて検討する。

3. 利用拠点選定の考え方と目指す方向性

(1) 利用拠点選定の考え方

宿泊施設を中心とした国立公園の面的魅力向上に大きく資する可能性があると考えられる利用拠点について、総合的に評価し、以下に示す考え方を踏まえ、利用拠点を選定する。

利用拠点選定の考え方

① 推進体制の構築状況

- 関係地方自治体の積極的な参画・協力が得られること
- 国立公園満喫プロジェクト地域協議会等における合意が得られる見込みがあり、**地域の気運が醸成されている**こと
- 現地における**地域協働体制、事業実施体制の構築が見込める**こと。
特に、利用拠点の面的な魅力向上に向けた取組に関するリーダー又はコーディネーターとなる者が存在すること。
- 令和6年度から利用拠点における具体的な取組に着手できること
- これら推進体制の構築状況を踏まえ、実現可能性が高いと認められること

② 国立公園としての滞在型・高付加価値観光推進のポテンシャル

- 基本構想（案）の検討を通じて、当該公園の利用拠点において、**自然を活用した滞在型・高付加価値観光を進めるポテンシャル**が示されていること
- 基本構想（案）において、当該地域の**利用の高付加価値化の方向性が示されており、有効と認められる**こと
- 松本・高山エリアの自然や伝統文化の**階層的变化を体験する**という観点から、**立地の価値・特性、そして他地区との結節を活かした観光地経営が期待**できること
- 宿泊施設を中心とした面的魅力向上の取組が、**地域課題の解決や経済効果などの地域裨益につながる**こと

[出典] 環境省自然公園局国立公園課「宿舎事業を中心とした国立公園利用拠点の面的魅力向上に向けた取組方針」
(令和5年6月)より抜粋・加筆

(2)高付加価値化を目指すに当たっての各地区の現状・課題と今後の対応方針

地域関係者との意見交換等を踏まえ、高付加価値化を目指すに当たっての各地区の現状・課題と今後の対応方針を以下に示す。

■上高地

現状・課題	夏は本地域を代表する景勝地であり、冬の利用も高い体験価値が認められる。一方、冬は一般供用しない休息期間と整理された中で、無秩序な利用がなされている。 →冬季利用の適正化を図ることができれば、さらに高付加価値な滞在体験を提供できるポテンシャルがある。 →相乗効果により他地区の通年利用にもつながる。
今後の対応方針	○本地域の利用拠点における面的魅力向上のイメージと宿泊施設の構成要素に示す内容について、既に先端的な取組の着手・実行が行われている。 ⇒ モデル事業の利用拠点とはしない。「上高地ビジョン」改定の検討等とともに、上高地の特別感を高める仕組みづくりを引き続き進める。

■山岳エリア（槍・穂高連峰等）

現状・課題	山岳エリアの利用を支える山小屋は、公園事業執行の責務を担っているが、持続的なサービスを提供する上で、社会的・経済的な課題は大きい。 →北アルプスの登山文化を担ってきた山小屋を支える仕組みの構築が必要。
今後の対応方針	○登山文化の享受・山小屋体験自体が唯一無二性のある特別な体験であり、立地・役割等の性質上、宿泊施設の新規参入は現実的ではない。 ⇒ モデル事業の利用拠点とはしない。別途行っている山小屋のあり方検討等と合わせて、必要な取組を進める。

■乗鞍高原

現状・課題	環境、観光、社会のそれぞれの課題解決のための「のりくら高原ミライズ」の構想実現が求められる。 →「のりくら高原ミライズ」が目指すビジョンの実現に共感する事業者とともに社会課題を解決していくことが望まれる。 →乗鞍高原のアクティビティ事業の充実や住まう価値の向上が、他地区のソフトコンテンツの充実に寄与すると考えられる。
今後の対応方針	○地域が培ってきた価値観や地域が掲げるビジョンに共感し、持続可能な地域づくりにともに取り組む事業者とのマッチングによって、地域の面的魅力向上と社会課題解決の同時実現につながる可能性がある。 ⇒ モデル事業において磨き上げを行う利用拠点として、今後さらなる検討を進める。

■乗鞍岳（乗鞍畳平）

現状・課題	アクセス性の良さ、限定体験が提供できる社会環境の利点が活かし切れていない現状を鑑み、高山帯でこそ享受できる価値を活かすべきである一方、供用期間は短い。 →3,000m級の山岳地帯での特別な宿泊体験の提供により、地域の利用ポテンシャルを引き出していく必要がある。 →「乗鞍岳エコツーリズム推進全体構想」のもと、ガイドの活躍の場の提供、ガイドの育成を行うことが望ましい。
今後の対応方針	○絶好のロケーションを活かした宿泊施設が地域の利用ポテンシャルを引き出し、牽引する核となる可能性がある。 ⇒ モデル事業において磨き上げを行う利用拠点として今後さらなる検討を進める。

■さわんど温泉

現状・課題	夏は上高地のゲート、冬は休業状態だが、未活用の豊富な温泉資源を有している。 →上高地、乗鞍高原の冬季利用の高付加価値化が進めば、通年のゲートとなれる。 →乗鞍高原、白骨温泉、平湯温泉の魅力向上との相乗効果によって、上高地だけのゲートではなく、本地域全体のゲートとなれる可能性がある。 →立地上、南部地域で働く人の生活拠点としてのポテンシャルも有している。
今後の対応方針	○通年で情報集約・発信の機能の充実、宿泊基地としての高付加価値化、国立公園内で働く人の住環境整備等を実現させることで、他地区とつながる国立公園のゲートとしての機能が充実する可能性がある。 ⇒隣接地区と連携したプロジェクトとして立案できるよう、モデル事業において磨き上げを行う利用拠点として今後さらなる検討を進める。

■白骨温泉

現状・課題	二次交通の充実が望まれている。地域が目指す長期滞在利用には食事のバリエーションが必要である。また、野天風呂は魅力ある活用が図れていない状況にある。 →野天風呂の立地を活かした再整備により、温泉地としての顔の復活が望まれる。 →長期滞在者のニーズを満たす食事のバリエーションのため泊食分離の検討が必要。 →日帰り利用者のニーズに応じ二次交通が充実できれば、相乗効果として、乗換拠点であるさわんど温泉、白骨温泉と隣接する乗鞍高原の充実が期待される。
今後の対応方針	○湯治・健康を中心とした長期滞在の実現と、温泉地の顔となる空間形成と活用機会の提供が目的地としての誘引力を高め、白骨温泉全体の高付加価値化につながる。 ⇒隣接地区と連携したプロジェクトとして立案できるよう、モデル事業において磨き上げを行う利用拠点として今後さらなる検討を進める。

■平湯温泉

現状・課題	外部資本の参入もあり、今後、地域の街並み整備への取組が開始される。地域資源を活かしたソフトコンテンツづくりが求められている。 →地域の魅力や滞在価値を言語化するとともに、ソフトコンテンツの充実、アクティビティを提供するガイドとの連携が必要。 →令和6年7月にリニューアルオープンした奥飛騨ビジターセンターの活用が期待される。
今後の対応方針	○現在、利用拠点整備改善計画の策定に向けて地域主体の取組が進められている。高付加価値化に向けてアクティビティ等ソフトコンテンツの充実が求められている。 ⇒モデル事業の利用拠点とはしない。利用拠点整備改善計画の立案支援、ソフトコンテンツの充実化を図るための体制づくりの支援を行う。

■新穂高温泉

現状・課題	冬季利用もできることから、通年で利用者の目的地となっているが、高付加価値層へのサービス提供の充実化に課題を有する。 →立地を活かした本物の価値を提供するため、ソフトコンテンツの開発やガイドとの連携が必要。
今後の対応方針	○既存事業者において、宿泊施設を中心とした魅力向上を目指した取組が進められている。一方、ソフトコンテンツの充実が求められている。 ⇒モデル事業の利用拠点とはしない。ソフトコンテンツの充実化を図るための体制づくりの支援を行う。

(3)モデル事業として選定する利用拠点と目指す方向性

本地域では、利用の高付加価値化に向けた基盤づくりとして、通年利用の推進、アクティビティの充実、二次交通の活性化、従業員等の雇用確保や住環境整備等が求められている。これらの地域課題は、地区単体への宿泊施設の誘致によって解決されるものではなく、複数の地区を面的に一つのエリアとして捉え、地区間の一体的なつながりの中で解決を図ることが重要である。

その中でも、松本側の国立公園のゲートであるさわんど温泉から、山麓の滞在拠点として多様なアクティビティを提供する乗鞍高原と温泉地である白骨温泉を経て、アクセス性の高い3,000m級の山岳景観を有する乗鞍岳に至るルートは、乗鞍岳山麓から山頂までの植生などの自然環境の移り変わりや、各地区が培ってきた自然と人との関わりの歴史等の階層的な変化を体験することができるとともに、旅の動線としても一連につながるエリアである。

また、これらの4地区は利用の高付加価値化を目指すに当たって、それぞれ課題を抱えているが、地区単体での解決は難しい状況にある。

乗鞍岳では、アクセス性の良さや限定体験を提供できる地区の強みを活かし切れず、供用期間も短いことから、3,000m級の山岳地帯での特別な宿泊体験の提供により、地域の利用ポテンシャルを引き出していく必要がある。また、「乗鞍岳エコツーリズム推進全体構想」のもと、ガイドの活躍の場の提供とガイド育成を行うことが望ましい。

乗鞍高原では、環境、観光、社会のそれぞれの課題解決のための「のりくら高原ミライズ」の構想実現が求められるが、マンパワーや資金不足から当該地区のみでの実現が難しい状況にある。そのため、「のりくら高原ミライズ」が目指すビジョンの実現に共感する事業者とともに社会課題を解決していくことが望まれる。また、乗鞍高原のアクティビティ事業の充実や住まう価値の向上が、他地区のソフトコンテンツの充実にも寄与すると考えられる。

白骨温泉では、二次交通の充実が望まれており、長期滞在利用の推進には、食事のバリエーションが必要であるが、当該地区のみでは対応が難しい状況にある。また、野天風呂の魅力ある立地を活かし切れしていない。そのため、野天風呂の立地を活かした温泉地の顔となる施設の充実・体験の充実を図ることや、長期滞在者のニーズを満たす食事提供のため、泊食分離の検討が必要である。また、日帰り利用者のニーズに応じ二次交通が充実できれば、相乗効果として、乗換拠点であるさわんど温泉、隣接する乗鞍高原の利用の充実が期待される。

さわんど温泉では、夏は上高地のゲートとして高い需要があるが、冬は休業に近い状態にある。未活用の豊富な温泉資源を有していることから、他地区の冬季利用の高付加価値化が進むことによって、通年のゲートとしての機能発揮が期待される。また、他地区の魅力向上との相乗効果によって、上高地だけではなく、本地域全体のゲートとなれる可能性がある。立地上、本地域で働く人の生活拠点としてのポテンシャルも有している。

そこで、本地域では、今後、乗鞍岳及び乗鞍高原において、当該地区の利用を牽引する核となる宿泊施設の誘致を含む魅力向上について、隣接する白骨温泉や、交通結節点であるさわんど温泉と一体的な検討を進めるため、以下に示す4つの地区全体をモデル事業として選定する利用拠点とする。

モデル事業として選定する利用拠点

乗鞍岳・乗鞍高原・白骨温泉・さわんど温泉

乗鞍岳の山麓から山頂にかけて連続する4つの地区を一体的な利用拠点と捉え、それぞれの地区の磨き上げと、その相互作用によって高付加価値な滞在体験を提供するとともに、その効果が波及することで利用拠点とした地域全体が抱える課題解決への貢献を目指す。



図 複数の地区におけるモデル事業推進の相互作用による面的魅力向上のイメージ

また、モデル事業の推進によって4地区の一体での磨き上げに取り組むとともに、他地区においても利用の高付加価値化に向けて取組を推進することで、その相互作用によって、本地域全体として以下の示す方向性の実現を目指す。

■4地区の一体的な磨き上げとその相互作用によって、本地域全体で実現したいこと

○利用拠点としての乗鞍岳の魅力向上による両県一気通貫での利活用促進

長野県と岐阜県の県境に位置する乗鞍岳において、絶好のロケーションを活かした宿泊施設が存在することで、乗鞍岳のみならず、山麓の乗鞍高原や平湯温泉を含む「乗鞍ライチョウルート」全体の利用ポテンシャルが引き出され、一気通貫の利活用促進が期待される。

○旅の目的地としての魅力向上による二次交通の充実

乗鞍高原や白骨温泉では、二次交通に課題を抱えており、地域からは繁閑に応じたダイヤ変更や増便等の要望があるものの実現が難しい状況にあるが、各地区において、価値・特徴の磨き上げに取り組むことで、旅の目的地としての需要が高まれば、二次交通の充実につながり、利用者の移動手段としても、地域住民の生活のアシとしても、利便性が高まる可能性がある。

○上高地の冬季利用の整理による他地区を含む通年営業・繁閑平準化

上高地は本地域の利用を牽引する国内屈指の観光地であり、上高地の営業状況は他地区にも影響する。中でも上高地へのゲート機能を担うさわんど温泉と平湯温泉はその傾向が顕著であり、地域では雇用確保の観点も含めて、利用の平準化が求められている。また、近年は上高地の無秩序な冬季利用が増加傾向にあり、ルール of 明確化が必要な状況にある。

上高地の冬季利用の適正化を図ることができれば、その相乗効果によって、周辺地区の冬季の利用活性化に資する可能性がある。

また、このような取組と並行して、例えば、商業施設や従業員宿舎をさわんど温泉に誘致することで本地域の働く価値・住まう価値が高まり、安定的な従業員の雇用確保も期待される。

○乗鞍岳エコツーリズム推進全体構想に基づくソフトコンテンツ・アクティビティの充実

高山市側では、岐阜県中部山岳国立公園活性化基本構想・基本計画に基づき、乗鞍岳一帯をコアエリアと周辺地域を対象とする「乗鞍岳エコツーリズム推進全体構想」のもと、今後、自然資源の保護と適正利用を両立するエコツーリズムがより充実することが期待されている。

奥飛騨温泉郷（平湯温泉・新穂高温泉）は、宿泊事業者の新規参入や既存事業者による宿泊施設のリニューアル、街並み景観の改善といったハード面の動きがある一方、ソフトコンテンツの開発やガイド事業者との連携が課題となっている。

今後、同構想や信飛トレイルといった施策と連携し、各地区とガイド事業者との関係構築を図ることで、ハード・ソフト両面での魅力向上が期待される。

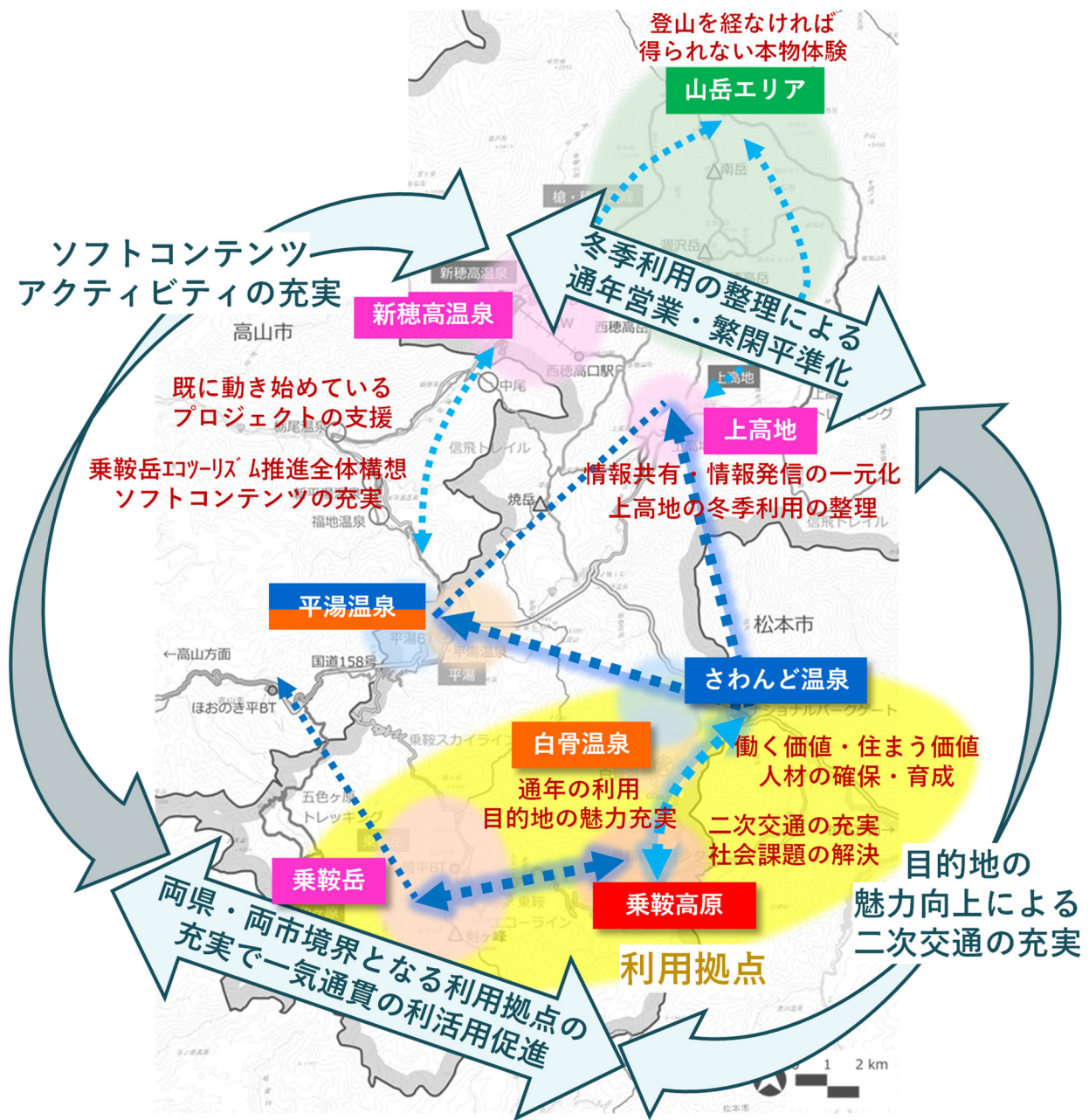


図 モデル事業として選定する利用拠点と本地域が目指す方向性

第5章 推進体制・スケジュール

1. 推進体制

(1) 基本的な考え方

利用拠点における推進枠組みの構築に当たっては、高付加価値化全体の方向性を考えて取組を調整・牽引するリーダーや、企画・調整を行うコーディネーター、地域において取組を実施する人材や実行組織の確保が必要となる。

各地区において、地域のプレイヤーとなり得る人材・事業者の有無等の状況はそれぞれ異なることから、今後、利用拠点マスタープランの検討や民間提案の取り入れを通じて、どのような事業スキームが各地区にとって適切かを見極めつつ、推進体制への参画が期待される主体への働きかけや、当該地区において望ましい推進体制の検討を行う。

(2) 推進体制の構築の流れ（イメージ）

具体の事業開始までは、事業構想の検討、事業化に向けた検討、事業者選定（誘致）といった手順で検討を進めることが想定されるが、各検討段階に応じて必要となる推進体制や、その役割、推進体制への参画が期待される主体は変化していくものと考えられる。そのため、以下のような流れで推進体制の構築を図る。

■事業構想検討段階（利用拠点マスタープランの検討・策定）

利用拠点に関する施設整備及び情報・サービス提供、利用から得られる利益を自然環境の保護に再投資する仕組み等、ハード・ソフト両面から検討を行い、4つの地区で一体的な利用拠点マスタープランの検討を行う。

<フェーズ1：地域が目指す姿とその実現のために必要な企画の立案>

利用拠点マスタープランの検討においては、まず、各地区の既存会議体（乗鞍岳：乗鞍岳 BBPT 会議、乗鞍高原：のりくら高原ミライズ会議、白骨温泉：白骨温泉まちづくり委員会、さわんど温泉：沢渡会議）を活用しながら地域との丁寧な対話を重ね、地域が目指す姿、その実現のために必要な企画立案（ハード・ソフトの両面から検討）、望ましい外部民間事業者のあり方等について検討を行う。

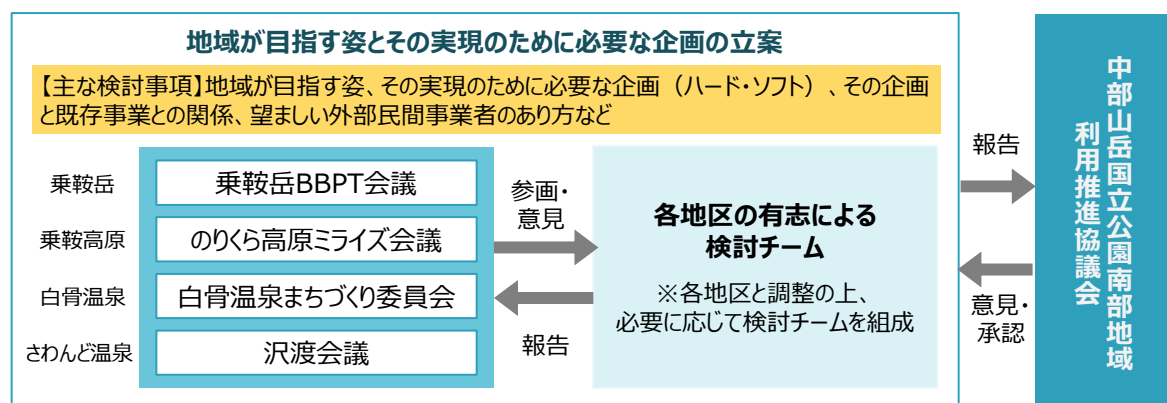


図 利用拠点マスタープランの検討体制イメージ（フェーズ1）

<フェーズ2：地域が目指す姿に賛同する外部民間事業者の協力を得ながら事業化に向けて検討>

事業化にあたっては、その事業内容に応じて、事業候補地の選定、事業スキームの検討、事業計画の策定（事業の採算性等の検証）、資金調達、建築計画・設計等、専門性が求められる検討を行う必要がある。そこで、各地区において、必要な事業が整理された段階で、サウンディング調査を実施し、民間提案の取り入れを行うとともに、外部民間事業者の検討体制への参画の意向を把握する。

地域が目指す姿に賛同する外部民間事業者の協力を得ながら、4地区を統括する検討体制とともに、事業化に向けて、地域が立案した企画の市場性や実現可能性等について詳細な検討を進め、利用拠点マスタープランを策定する。

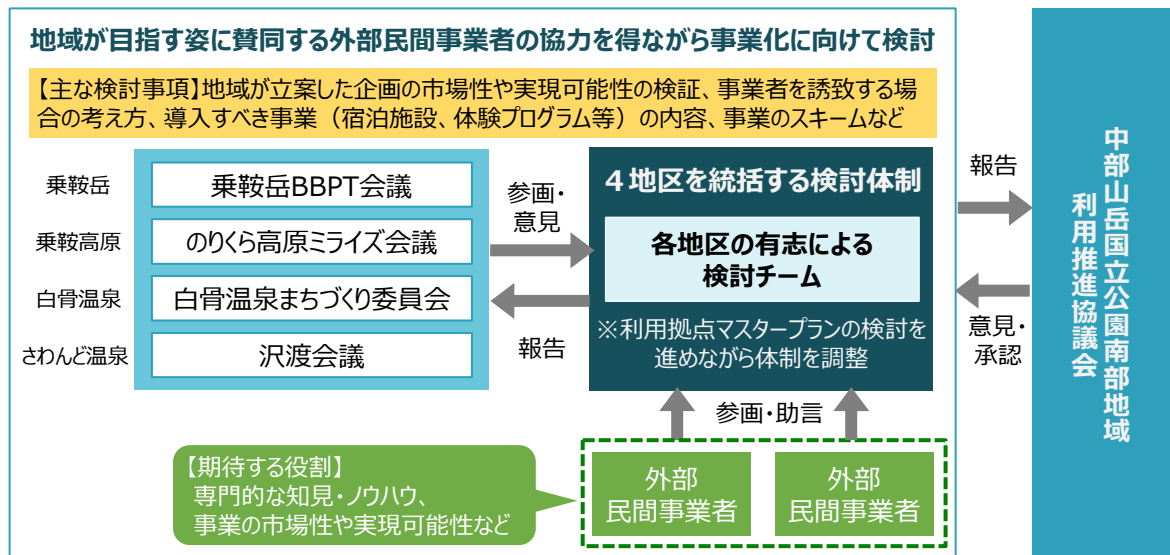


図 利用拠点マスタープランの検討体制イメージ（フェーズ2）

■事業化検討段階（事業スキームの構築・事業計画の策定）

利用拠点マスタープランに基づく事業の実現に向けては、当初は、少人数であっても地域を良くしていきたいという志と当事者意識を持つメンバーが事業を立ち上げ、パートナーを募って連携し、事業を拡大しながら、点から面へと地域全体にネットワークを広げていくことが重要である。

一方、事業の実効性を高める事業スキームの構築や、事業内容に応じて、各領域の専門家との連携による精度の高い事業計画を策定することが求められるが、同時に、地域の様々なステークホルダーの利害を調整しながら一体的に事業を進めていくため、推進体制として、まちづくり会社のような観光地経営を担う実行組織が必要と考えられる。

そのため、利用拠点マスタープランの検討体制に加えて、地元自治体、観光協会・商工会等の地域関係団体、地元金融機関や資金調達に関わるメンバー、各種民間事業者等と連携しながら、以下のよう事業の推進体制の構築を図る。

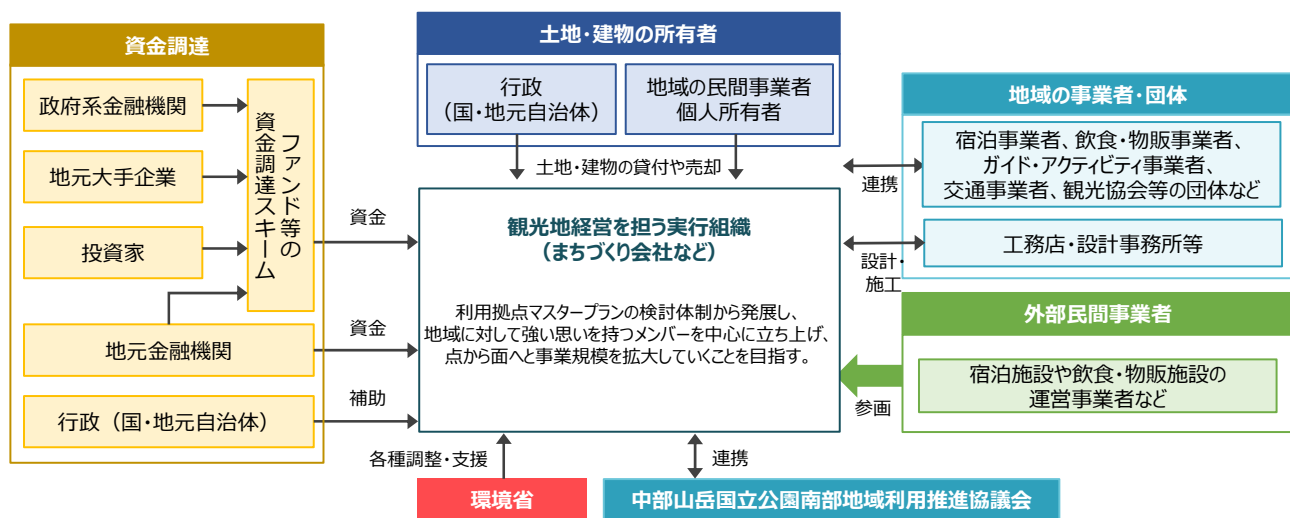


図 事業の推進体制のイメージ

なお、「松本・高山 高付加価値化マスタープラン」では、地域経営のマネジメント・実行体制の将来構想として、以下の体制を構築できるように検討を進めていくこととしている。本モデル事業は、同マスタープランにおけるヤド領域の取組としても位置づけられていることから、地域経営主体の構築に向けて連携を図ることとする。

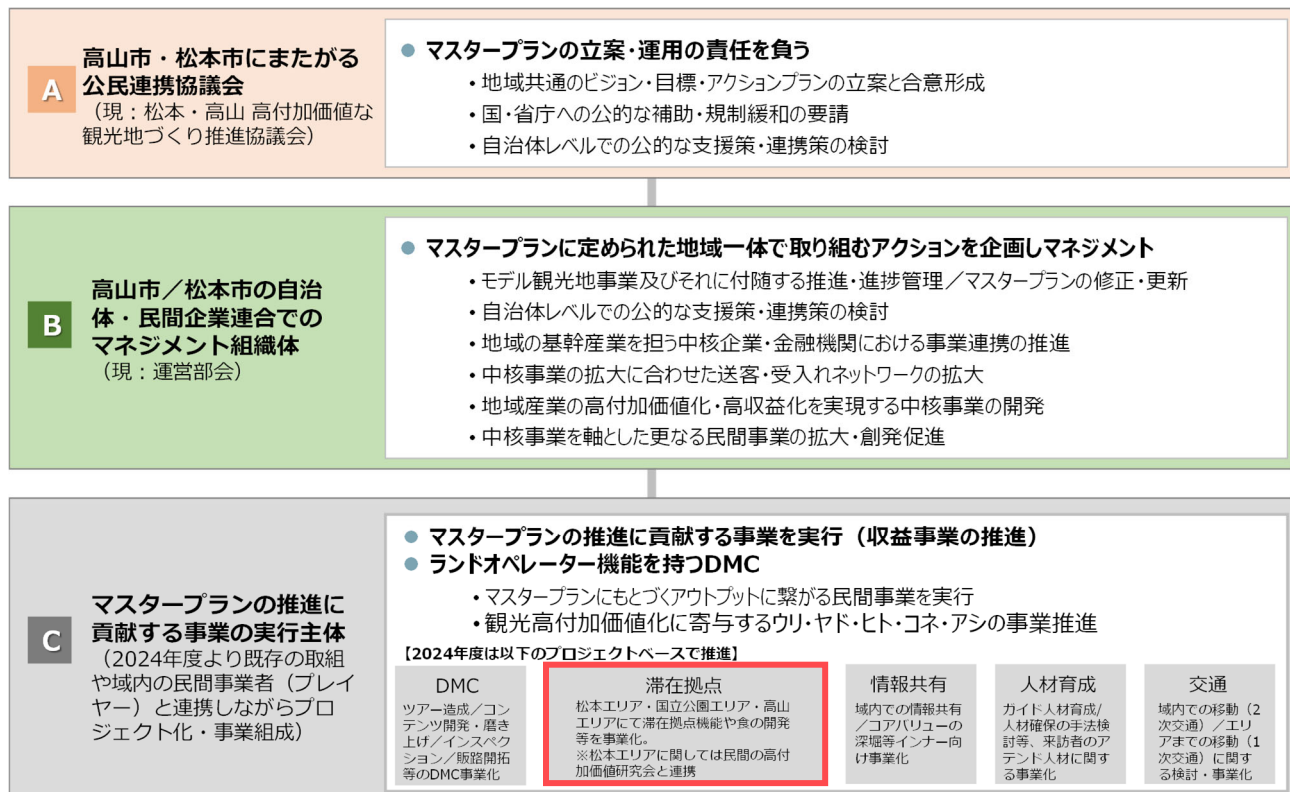


図 地域経営主体と本事業の推進体制との関係

[出典] 松本・高山 高付加価値な観光地づくり推進協議会「松本・高山 高付加価値化マスタープラン」（令和6年2月29日）

2. スケジュール

本地域における滞在体験の魅力向上に資する取組は、下記のスケジュールに沿って推進する。

取組の進捗にあわせて、必要な見直しを行うとともに、利用拠点マスタープラン策定以降の取組の進め方についても必要な時期に検討を行う。

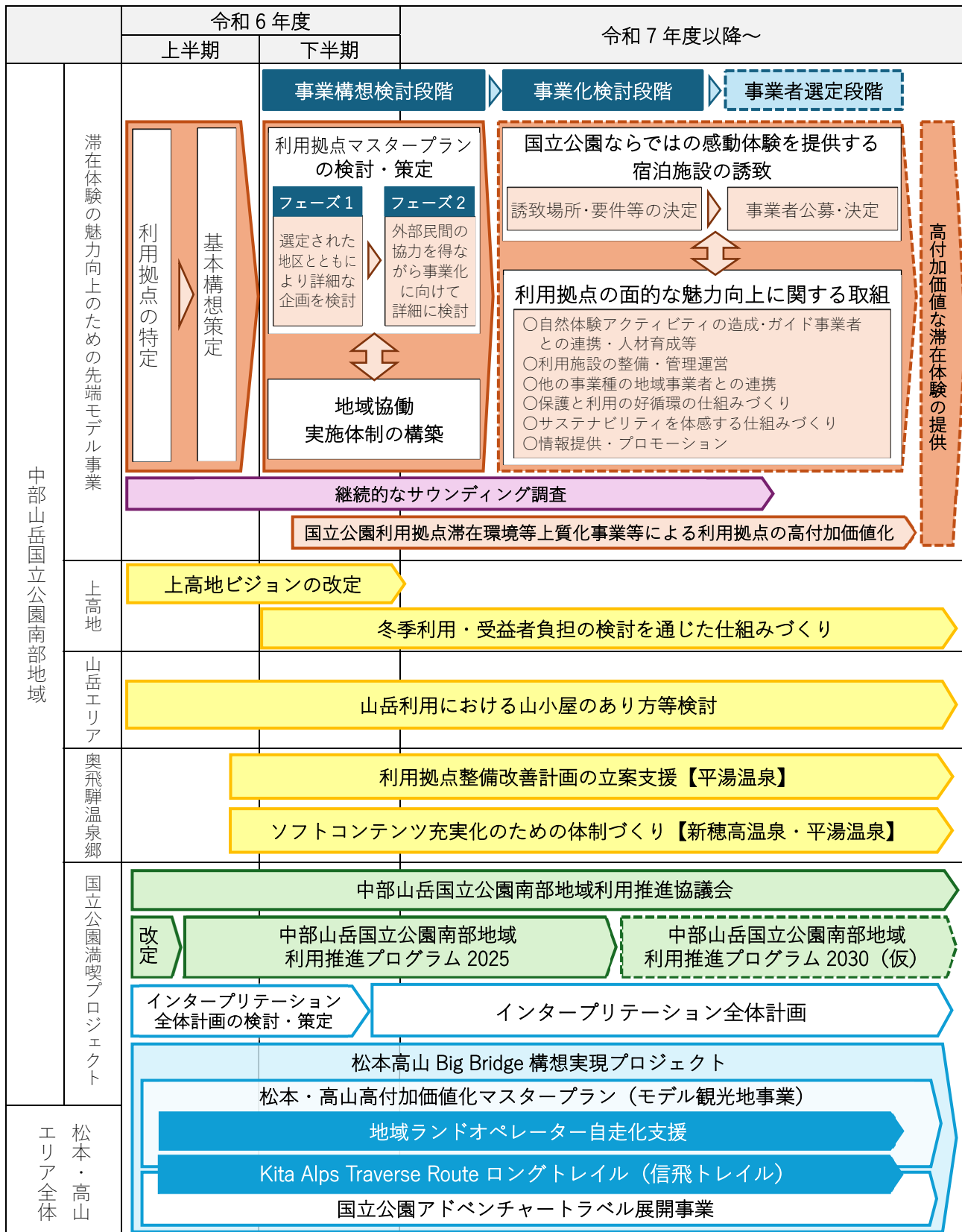


図 モデル事業と関連する取組のスケジュール

資料編

1. 基本構想策定の経緯

本基本構想策定に当たっては、「松本高山 Big Bridge 構想」のもと、これまで本地域が一体となって取り組んできたことを具体化し、各地区の磨き上げの方向性と役割分担を明確にするため、地域関係者へのヒアリングや地域説明会による意見聴取等を通じて、地域との意見交換を行いながら検討を行った。

また、基本構想の策定に先立ち、本地域における宿舎事業を中心とした利用の高付加価値化に向けて、滞在体験の魅力向上につながるアイデアや提案について、外部民間事業者から広く意見聴取（サウンディング調査）を実施した。国内における先進事例・成功事例を把握するための有識者ヒアリング等を実施し、地域内外の意見・アイデアを把握した。

地域関係者との意見交換や地域内外からのアイデア等をもとに整理した基本構想（案）は、令和 6 年度に実施した第 15 回中部山岳国立公園南部地域利用推進協議会（以下、満喫協議会）の承認を受け、令和 6 年 11 月に「中部山岳国立公園南部地域 利用の高付加価値化に向けた基本構想」として策定したものである。

なお、令和 5 年度に松本・高山エリアが観光庁のモデル観光地事業のモデル地域に選定されたことを受け、本基本構想の検討は、同事業における「松本・高山 高付加価値化マスタープラン」の検討と一体的に実施した。

表 基本構想策定の経緯

時期		会議名等	概 要
令和 5 年度	12 月	第 1 回ヤド・アシ分科会 (モデル観光地事業と合同開催)	「松本・高山エリアが目指すべき高付加価値な滞在体験とは」をテーマに、松本市・高山市の宿泊事業者・交通事業者とともにワークショップを実施。
	1 月	第 2 回ヤド・アシ分科会 (モデル観光地事業と合同開催)	「松本・高山エリアらしい高付加価値な滞在体験を実現するための課題と解決方針について」をテーマに、松本市・高山市の宿泊事業者・交通事業者とともにワークショップを実施。
		地域説明会 (上高地、乗鞍高原、さわんど温泉・白骨温泉、乗鞍岳)	モデル事業の主旨及び今後の検討の進め方等について説明を行い、意見交換を実施。
	2 月	第 3 回ヤド・アシ分科会 (モデル観光地事業と合同開催)	「中部山岳国立公園南部地域での宿泊施設を中心とした滞在体験に期待すること」をテーマに、松本市・高山市の宿泊事業者・交通事業者とともにワークショップを実施。
		地域説明会 (平湯温泉・新穂高温泉)	モデル事業の主旨及び今後の検討の進め方等について説明を行い、意見交換を実施。
		民間事業者との対話 (サウンディング調査)	本地域の宿舎事業を中心とした利用の高付加価値化に向けた意見・アイデアを広く聴取。
	3 月	先進事例へのヒアリング	他地域において、高付加価値な滞在体験を提供している民間事業者に対して、本地域での事業展開を図る上での参考とするため、ヒアリング調査を実施。

時期		会議名等	概 要
令和 6 年度	5 月	第 13 回中部山岳国立公園 南部地域利用推進協議会	モデル事業について、令和 5 年度の検討成果の報告を行うとともに、令和 6 年度の検討の進め方及びスケジュールについて確認。
		地域関係者ヒアリング (上高地、山岳エリア、乗鞍高原、乗鞍岳、白骨温泉、新穂高温泉、平湯温泉、さわんど温泉)	令和 5 年度の検討成果を踏まえた「利用拠点の高付加価値化の方向性と役割分担（仮説）」について、各地区における主要な組織体・会議体の代表の方や観光業を営む事業者にはアヒアリング調査（8 拠点 15 者）。
	6 月	地域説明会 (上高地・山岳エリア、乗鞍高原、乗鞍岳、さわんど温泉)	地域関係者ヒアリングの結果を反映した「利用拠点の高付加価値化の方向性と役割分担（仮説）」について、既存会議体を活用した地域説明会を開催し、各地区の高付加価値化の方向性や今後の推進体制について、地域の意向を把握。
	7 月	地域説明会 (白骨温泉)	
		第 14 回中部山岳国立公園 南部地域利用推進協議会	「利用拠点の高付加価値化の方向性と役割分担」及び「利用拠点候補案」の確認。
		地元自治体との調整	基本構想策定後のモデル事業の検討の進め方やスケジュール等について意見交換。
	8 月	民間事業者との対話 (サウンディング調査)	利用拠点の選定に先立ち、これまで地域で検討を進めてきた各地区の高付加価値化の方向性に即し、宿舎事業及び周辺の活用による高付加価値な体験の提供を目指した事業に対するアイデアや提案を広く聴取。
	9 月	地元自治体との調整	基本構想策定後のモデル事業の検討の進め方やスケジュール等について意見交換。
		国立公園における滞在体験 魅力向上事業 専門委員会 (非公開)	基本構想等の検討に関する進捗報告及び利用拠点の選定案の承認。
	10 月	基本構想（案）の意見照会	協議会構成員へ基本構想（案）について書面での意見照会の実施。
		第 15 回中部山岳国立公園 南部地域利用推進協議会	専門委員会及びサウンディング調査の実施結果報告、基本構想（案）の承認、今後のモデル事業の進め方について意見交換。

令和5年度 国立公園における滞在体験の魅力向上のための先端モデル事業対象公園に選定

10月下旬～

文献調査
(既存計画等)

現地調査

国立公園ならではの感動体験を
提供する宿泊施設の方向性の検討

1月下旬～2月上旬

地域説明会
(5回)

利用の高付加価値化に向けた
基本構想（案）の検討項目

- 現況・課題
- 利用の高付加価値化に向けたビジョン
- 利用のゾーニングの考え方
- インタプリテーション全体計画策定に
向けたワークフロー
- 磨き上げを行う利用拠点の特定の考え方
- 国立公園ならではの感動体験を提供する
宿泊施設の方向性
- 推進枠組みの方向性 など

宿泊事業者等への
ヒアリング

ヤド・アシ分科会
(全3回)

情報共有・連携

2月下旬

民間事業者との対話
(サウンディング調査)
地域内外の意見聴取

推進枠組みの方向性の検討

他地域の事例調査

有識者へのヒアリング

各地区の方向性検討

3月

令和6年度

基本構想（案）の検討

各地区の方向性と役割分担の検討

- ・各地区の理想の姿
- ・地区同士の関係性
- ・そこで提供される理想のヤド像

地域関係者ヒアリング
(8地区各2者程度)

事業協働・連携

5月中旬

満喫協議会

6月～7月

地域説明会
(5回)

各地区の価値・魅力に基づく体験

理想に対してできていること・できていないこと(課題)

理想に近づくために何を高めていくか

外部の力が
必要

地域の中で
解決できる

満喫協議会

基本構想（案）の作成

各地区の方向性と役割分担のまとめ

基本構想（案）として、とりまとめ

地元自治体との調整

権利関係等情報整理

民間事業者との対話
(サウンディング調査)
地域内外の意見聴取

9月下旬

環境省本省での専門委員会

10月下旬

満喫協議会

利用拠点の特定

基本構想の決定

地域協働
実施体制
の構築

事業協働・連携

2月下旬

利用拠点マスタープランの検討・策定

令和7年度以降

国立公園ならではの感動体験
を提供する宿泊施設の誘致

利用拠点の面的な魅力の向上
に関する取組

利用拠点・宿泊体験

地方における高付加価値なインバウンド観光地づくり事業

図 基本構想策定の経緯

2. 検討体制

本基本構想の策定にあたっては、中部山岳国立公園管理事務所を事務局とし、関係行政機関、地元自治体、松本市・高山市内で活動する地域団体・組織から構成される「中部山岳国立公園南部地域利用推進協議会」において検討を行った。同協議会の構成員は以下の表の通りである。

表 中部山岳国立公園南部地域利用推進協議会構成員一覧

	協議会構成員	役職
国行政機関	環境省 信越自然環境事務所	所長
	環境省 中部山岳国立公園管理事務所	所長
	林野庁 中信森林管理署	署長
	林野庁 飛騨森林管理署	署長
	国土交通省 北陸信越運輸局 観光部	部長
	国土交通省 中部運輸局 観光部	部長
地方自治体	長野県 環境部	部長
	長野県 観光スポーツ部	部長
	長野県 松本地域振興局	局長
	岐阜県 環境生活部	部長
	岐阜県 観光国際部	部長
	岐阜県 飛騨県事務所	所長
	松本市 総合戦略局 アルプスリゾート整備本部	本部長
	松本市 環境エネルギー部	部長
	高山市 飛騨高山プロモーション戦略部	部長
	高山市 上宝支所	支所長
	高山市 丹生川支所	支所長
観光事業者・団体等	高山市 森林・環境政策部	部長
	(一社) 長野県観光機構 パブリック事業部	部長
	(一社) 松本観光コンベンション協会	会長
	(一社) 松本市アルプス山岳郷	代表理事
	のりくら観光協会	協会長
	上高地観光旅館組合	組合長
	上高地ネイチャーガイド協議会	会長
	さわんど温泉観光組合	組合長
	白骨温泉旅館組合	理事長
	北アルプス山小屋友交会	会長
	(一財) 自然公園財団上高地支部	所長
	(一社) 岐阜県観光連盟	常務理事
	(一社) 飛騨・高山観光コンベンション協会	会長
	飛騨高山旅館ホテル協同組合	理事長
	飛騨乗鞍観光協会	会長
	乗鞍観光協議会	会長
	(一社) 奥飛騨温泉郷観光協会	理事長
	平湯温泉観光協会	会長
	新穂高温泉観光協会	協会長
	飛騨山小屋友交会	会長
	アルピコ交通株式会社	代表取締役
	濃飛乗合自動車株式会社 企画統括部	代表取締役
	上高地タクシー運営協議会	会長
	奥飛騨観光開発株式会社	代表取締役
	(一財) 飛騨山脈ジオパーク推進協会	事務局長

3. 民間事業者との対話（サウンディング調査）の実施

地域内外の幅広い業種の民間事業者・団体等、本事業への参画を希望する者から、基本構想（案）に対する提案を広く募集し、基本構想のとりまとめに民間提案を取り入れるため、令和5年度及び令和6年度に各1回、民間事業者との対話（サウンディング調査）を実施した。

サウンディング調査の実施概要は以下の通りである。

（1）令和5年度サウンディング調査の実施概要

【サウンディング調査の目的】

本基本構想の策定に先立ち、本地域の宿舎事業を中心とした利用の高付加価値化に向けて、滞在体験の魅力向上につながるアイデアやご提案を広く聴取する。

【サウンディング調査の内容】

- ①当該公園の利用の高付加価値化につながる宿舎事業に関するアイデア、意見・提案
- ②当該公園の滞在体験の魅力向上につながる宿舎事業と連携した各種事業についてのアイデア、意見・提案
- ③その他当該公園の利用の高付加価値化に関するアイデア、意見・提案

【参加事業者（グループ）数】

宿泊事業者 ： 6 者
宿泊事業者以外： 6 者 合計：12 者

（2）令和6年度サウンディング調査の実施概要

【サウンディング調査の目的】

基本構想（案）の策定及び先端モデル事業における利用拠点の選定に先立ち、これまで本地域で検討を進めてきた各地区の高付加価値化の方向性に即し、宿舎事業及び周辺の活用による来訪者への高付加価値な体験の提供を目指した事業に対するアイデアや提案を広く聴取。

【サウンディング調査の内容】

- ①宿舎事業を中心とした高付加価値な滞在体験につながる宿泊事業又は各種事業※のアイデア、意見・提案

【対象】乗鞍岳、乗鞍高原、白骨温泉、さわんど温泉

- ②その他本地域の利用の高付加価値化につながる各種事業※についてのアイデア、意見・提案

【対象】全地区

※各種事業：ガイド・アクティビティ、飲食サービス、広報・情報発信、物販等の事業

【参加事業者（グループ）数】

宿泊事業者 ： 4 者
宿泊事業者以外： 3 者 合計：7 者